

自立した女と男を 人間らしい生活を 差別のない社会を  
育み 創り出す

新しい家庭科

# We

ウ イ



# 6

1991

特集 心からからだへ

季節のうた

仙田敬子



つばめ

花<sup>こ</sup>辛夷  
讃美歌ふいに  
地より湧き

### インタビュー

高橋 巖さん

ー日本でシユタイナー学校をつくると

エリート校になつてしましますー

(インタビュー・稲邑恭子)

● 診察室から見た子どもたち 梅村 浄 10

● 限らない可能性が花開くようにーサイコシンセシスと私ー 平松園枝 14

● 「気」で身体を読む 片山洋次郎・談 (まとめ・稲邑恭子) 18

● 人とつながっていけるからだを 鳥山敏子 23

音楽療法の一場面 浜谷紀子 28

不登校の日々をくぐつて 倉原香苗 30

失われた身体を求めて 高橋 実 32

(投稿)目から文明と医学を見る 安東尚美 35

学習の主人公たち

共学の家庭科の授業を受けて 八王子市立檜原中学校三年 38

ー湾岸戦争ー

アメリカ西海岸から 長谷川公一 42

### 連載

● 小学校

狩りと採集の時代へ

タイム・トラベルする

栃谷明子

46

● 中学校

「人間の歴史」の授業と私

青柳優子

51

● 高等学校

少女たちのセルフイメージを

解き放つために 竹内未希代

56

荒野のバラ 「久しぶりだぜ、八代ノ」

ーほんとうは燃えているのだー 田中裕一

62

家族と家庭科

小学校「家庭」領域は徳育か?

酒井はるみ

66

男性学への契機／魔男の宅急便

「白鳥の歌」を聴く男たち

諸橋泰樹

68

椿田の夢 「暴力的」ということについて

武田秀夫

70

あかきたな おばけに燃える男

福田 緑・加藤由美子

72

買うて来て使う 裸電球

山本謙吉

75

波 心からからだへ

半田たつ子

76

○ひと 山下政一さん 50

・ 今月の読書から 61 ・ イキイキぐるうぶ 74

・ We なんでも言おう なんでも聞こう 78

・ わたくしからあなたに 80 ・ Weの読者会だより 82

・ 泉 83 ・ 十字路 84 ・ アンテナ 86 ・ 編集後記 88

表紙／長野ヒデ子 季節のうた／仙田敬子  
特集イラスト／降矢奈々

# 高橋 巖さん

イ  
ン  
タ  
ビ  
ュ  
ー

ー日本でシュタイナー学校をつくると

エリート校になってしまいますー

・インタビュー 稲 邑 恭 子

ドイツの神秘学者、ルドルフ・シュタイナー（1861—1925）が1919年に創設した「自由ヴァルドルフ学校」に端を発した「シュタイナー学校」は、今や世界に広がり、日本でも、十数年前から、子安美知子さんの紹介などにより、俄に注目されるようになってきた。

奥深く、難解であるとされているシュタイナーの思想を、数々の著作の翻訳や、講義・講演活動を通じて紹介してこられた第一人者でいらっしゃる高橋巖さんに、お話をうかがう。

スラリとした長身にも、言葉を選びながら話される、静かで優しい声のトーンにも、夢見るような、スピリチュアルな、“哲学青年”の雰囲気漂う。



## ■プロフィール

1928年、東京代々木に生まれる。慶応義塾大学文学部大学院修了。ドイツに留学。慶応義塾大学文学部哲学科美学美術史教授を経て、現在、日本人智学協会会長。〈著書〉『神秘学講義』『シュタイナー教育入門』『シュタイナー教育の方法』『シュタイナーの治療教育』『シュタイナー教育を語る』（角川書店）など。〈訳書〉『一般人間学』『教育芸術』ほかシュタイナーの訳書多数。



## \* 思考と感情と意志の教育

——『シュタイナーの治療教育』のなかで「知的な親というのは、イライラし、否定的な気分を持ち、声が甲高く、早口になりがちで、そういう親の気分がストリートに無意識に子どもの中に入って、子どものなかに否定的な生命感覚を植え付けてしまう」とお書きになっている箇所を読んで、思わず苦笑してしまい、でもこれは笑っていられないのだと。親が、知識や理論で武装すればするほど、子育てがぎくしゃくしておかしくなるというのを、自分を見ても周りを見ても痛感していましたので。

いまの日本の社会では、知識の集積ばかり大切に行っているようですが、そのことが一番の問題ではないか。シュタイナー教育のなかに、大事なヒントがあるように思いましたので、ぜひお話をうかがいたいと思いました。

高橋 では、そのあたり、知育のことから話しましょうか。いまの日本の学校教育は、幼稚園からそうなんですけど、決まった知識を子どもに覚えさせるのが教育の目的だと思っているんですね。ところが、シュタイナー教育では、知識は三種類あると言っています。

ひとつは、頭のなかでイメージできる、概念内容という知識内容で、例えば、計算、漢字、歴史の年号、地理の地名

など。ふつう、学校教育では、それは非常に重要な部分と考えられていますけど、シュタイナー教育では知育の三分の一にすぎないと考えている。次の三分の一が「判断」です。新しい課題に出会ったときにそれを自分なりにどういうふうに処理するのか。いわゆる応用問題を解く能力です。

最後の三分の一が、これはいちばん大事なんですけど、与えられた知識に対して、自分はどういう関わり方をするのか、知識と自分の生き方との関係ですね。それを自分なりにはつきりさせることをシュタイナーは「結論」と言っているんですけど、その「結論」の知識。その三つが備わらないと知育になりません。

例えば、社会主義という言葉をただ知っているのでは、三分の一の知識です。これからのソビエトにおける社会主義のあり方などを考えるのが、次の三分の一、自分は社会主義の立場に立つのか立たないのか、最後の三分の一です。

シュタイナーは、人間の魂には、思考と、感情と、意志という三つの力が働いていると考えます。知識内容は思考が、判断は感情が、結論は意志がうけもっていると考えました。ですから、知育を行うということは、思考と感情と意志の教育ということになります。今日の小・中・高等学校の中で、意志と感情の教育がどれだけ徹底的に行われているかということになる、かなり疑問ですが。

——ほとんど行われていないのではないのでしょうか。

高橋 いらないようですね。知育に限っても、思考の部分だけでは、ほんとうの人格形成にならない。今日の教育の一番の目標になっているのは、人格形成のための知育ではなくて、与えられた社会に適応する能力としての知識なんです。しかも、試験に合格するという意味の適応ですから、本当の意味の適応ともいえません。

あともうひとつ言いますと、今日の情報社会そのものが人間に対してゆがんだ価値観を持っています。そのことが、そのまま教育に反映しています。人間の精神能力が全部商品になっていくばかりでなく、人間そのものも商品化されています。そういう社会の慣習のなかで平気で生きている大人の価値観がもろに教育に出てきて、教育を歪めているのではないかと思います。

#### \* 外への適応と内への適応

高橋 社会への適応を学ぶのが教育であるということとはわかるのですが、適応の仕方が歪んでいるんですね。外に適応する行為と、自分自身に適応する内的な適応行為が両方あっての「適応」なのに、まず、いまの教育は、外への適応しか問題にしています。それから、それだけで、既に欠陥のある教育になっています。それは、お母さんがたや先生がたが、自

分自身、内に向っての適応行為を忘れてしまっているからですね。そこがおかしいので、外に対しての適応も根本的におかしくなっている。

例えば、ある小学校の先生が新しい学級の担任になるとして、それが、大変むずかしいクラスだったとしますね。そのとき、先生がまず何をするのか、自分のクラスという世界にどういうふうに適応するのか。

私たちは、子どもが五十人いたら、その一人一人のことを徹底的に知ろうとするのが、その先生にとっての第一の適応行為だと思えますから、毎日、五十人の子どもの写真を眺め、一人一人の子どもについて、いろいろとイメージを働かせ、思いを巡らせてみます。それをやったあとで、子どもに向き合うのと、全然子どものことを知らないで、むずかしい子が多いという不安だけを抱えて子どもたちに向き合うのでは、全然違います。先生の自信も違うし、子どものほうでも、本当に自分のほうを向いてくれている先生なのか、あるいはそうでないのか、すぐにわかります。いまは、その意味では、外に向かう適応行為すらも、教育の中で十分にいかされていません。

#### \* 気質と個性

——その、子どもたちの個性を知ることに関してです

が、『シュタイナー教育を語る』のなかで、胆汁質（火）、多血質（風）、粘液質（水）、憂鬱質（地）の四つの氣質のタイプにふれて、教師が道德的にいいとか悪いとか言って子どもを裁いていることが、往往にして氣質の違いへの無理解にすぎないことがあると指摘していらっしゃることが、とても印象に残りました。自分の子どもでも、氣質が反対だと、いららするということがありますから、学校の先生がたがそのことを意識していれば、ずいぶん違うでしょうね。

高橋 あれは、一人一人の子どもについて学ぶときの秘密兵器なんです。（笑）

胆汁質というのは、感情が激しく、非妥協的で、正義感の強い性質。多血質は周囲と調和的だが、移り気。粘液質は、意志的だが、始めるのに時間がかかり、外から反応が分かりにくい。憂鬱質は内向的で集中はするが、外にたいして関係を作るのが不器用。簡単に言ってしまうと、このような特徴になるのですが、こういう氣質の問題を考えていくと、まず問題にすべきなのは、子どもの氣質なのではなく、自分の氣質なのだということが分かってきます。

まず自分の氣質をよく調べて、それから子どもの氣質を調べる。絵や字を書いてもらって、それから判断するんです。

例えば、紙のまん中に小さく人物を描く子は憂鬱質、はみでるぐらい大きく描いたり、色や輪郭もはっきりしていい

ば、胆汁質、それが曖昧だと多血質、というふうに見ます。立っている姿、歩いている姿、走っている姿でも氣質がわかります。日常生活はみんな、そういう、こころの表現ですから。氣質は即個性ではないのですが、美術史で言う様式のよいうなもので、個性はその上に成り立っています。だから、個性を知るのがかりになるんですね。

そもそも、二つの魂が出会ったとき、どちらの魂が優位に立てるかというと、相手をよりよく理解する方が優位に立てるのです。ですから、教師は先ず、自分が理解されたいとは思わず、子どもの個性を理解することに徹しなければ教師らしくなれません。子どもに理解されたいと思ったら逆です。いろいろな氣質を自分の中で使い分けられるくらいでなければなりません。自分の氣質を相手の氣質に同調させて、向き合うのです。

#### \* 感覚的教育

高橋 さっき、思考と感情と意志の教育といいましたが、〇―七歳までに必要なのは、結論に当る意志の教育です。七―十四歳の時期に必要なのは、判断する感情の教育です。そして、十四・五歳になって初めて、思考の教育が可能になるんです。

――いまの教育は全く逆の順序でやっているわけですね。

高橋 そうなんです。早期教育をやること自体はいいんですが、その場合は、知的なことを教えるのではなく、「感覚」を、結論の部分で、意志の教育をやるのでなければなりません。冷たいとか温かいとか、硬いとかやわらかいとか、自分と対象との関係が重要なのです。それは、態度決定の結論に似ているんですね。小さい子はうれしいのか悲しいのか、自分にとって大事なのか、大事でないのかがすべてですから、そういう方向の教育をします。それには感覚と模倣が重要です。

子どもが大人をのびのびと模倣して、感覚を思いきり体験できる理想的な環境があれば、それで幼児教育は完璧なのですが、今の幼稚園では本質でないところが重要になり、こういう本質的なことがかえっていい加減になっています。結論するのは頭でなく、からだですから、頭だけの教育をしていると、イメージはよく膨らむが、自分との関係が分からなくなりません。もし、あまり小さいときから知的訓練を受け、思考が早産させられますと、対象を理解したり批判したりすることはできても、その対象と自分との内的な結びつきが持てず、この世の現実からどんどん遠ざかってしまいます。

### \* 氣の教育

——シュタイナーは、ヨーロッパの教育の流れが、古代ギリ

シャのギムナスト(体育教師)からローマ時代のレトール(弁論教師)へと移り、そして、最後に、知識の量で競う近代のドクトールになったところで死んでしまったと考えているというのが、とても興味深かったのですが、彼がその古代ギリシャのギムナストの教育の原点とみなしたという、ギリシャの舞踊や格闘技は、呼吸作用や血液の循環の健全な発達を重視したり、宇宙の氣の流れに沿って手足を動かすことなど、日本の「体育」の、外から枠をはめていく感じとは正反対のようを感じたのですが。

高橋 日本では、体育で一番重要なのは骨格、その次は筋肉、それから神経、というふうに外からみていきますよね。

それだと、さきほどふれました、外への適応だけではだめなのと同じで、大切なことが欠けてしまうんですね。それらを成長させるものへの視点が抜けているからです。骨格や筋肉や血液の循環や体液や神経を発達させるものものを、シュタイナーは生命体とよびましたが、そのための踊りがオイリュトミー、生命体の教育、「氣」の教育です。これはいまブームの氣功や合気道などにも通じます。

シュタイナーは生命体をエーテル体と呼んでいます。その「氣」の考え方は、もともと東洋のものなんです。氣功や大極拳など中国のものだけでなく、日本の武道にも、茶道にも、能狂言や、歌舞伎などの古典芸能にもエーテル体の文

化があります。例えば、「氣韻生動」というのは水墨画において、画面から流れて来る、生命と、氣と、音楽の響きと、動的な活発な動きのことで、それをみることが鑑賞するということなのですが、そこにも生命体の教育があります。

現代の教育が「意識の教育」だとすると、そういう、ひたすらに練習を重ねて体で型を覚えていくような、「無意識の教育」は学校教育のなかにないんですね。いわゆるおけいこごとのなかにしかない、そういう伝統的な東洋の優れた教育理念をどう生かすかを、文部省が研究してくればいいんですが、産業社会に適應できる子どもを育てるだけ早く育てるためにはどうしたらいいか、ということしか考えていませんから、問題にならないのです。教育の現場にいない役人や、各界の名士である審議会の委員など、教育がわかるはずがない人たちが決めたものをそのままやれというのですから、先生たちにやる気が起こるはずはありません。

#### \* 説得か論証か

高橋 西洋の教育プログラムには、レトリックと論証の二つがあるんです。ひとをなめるほどと納得させるのがレトリックなのですが、日本では、その部分が欠落していて、ほんとうはどうなのかという理詰めの論証か、議論をして相手を打ち負かすことばかりに集中しているのです。そっちの教育ばか

りしていると、その議論の中に愛情の部分がなくなってしまうって、感情が興奮しなくなります。

さっき、幼児期が意志の教育で、小学校が感情の教育だといいましたが、小学校のときは、感情がわくわくするような授業をしてさえいけば、真実がどうかということとは後からでもいいんです。たとえば、先生がサダム・フセインを好きだったら、それをいきいきと感情をこめて語ればいい。それを、危険思想云々と言っていたら、感情の教育なんかできません。

#### \* 反感と共感

——『シュタイナー教育入門』のなかで、「共感」と「反感」にふれて、お書きになっている、〈知的態度は対象を自分から離れたところにおいて判断する作業で、「反感」の究極の姿だが、それが昂じると魂が弱ってくる。共感の中を魂が生きたと、魂が力強くなる〉というところや、「教育はどんな意味でも知的な方向を取ってはならない」という箇所が、とても印象に残ったのですが。

高橋 そうですね。知識というものは反感で学ぶものだといわれていますが、いかに共感で学ぶ知識にするかというのが、小学校の教育の一番大事な方法論なんですけどね。

先生が子どもにどれくらい共感を持っているかなんです



ね。それが確認できたら、それがどれくらい表現されて伝わっているか、反感のかたちで表現されていないか、自分で振り返ってみる。お母さんのなかでも、子どもを愛しているといいながら虐めている人がいますよね。先生も、「自分は愛情をもってゐるから、ここでは罰しなくては」ということになる、罰は反感ですから、共感を持っていないことと同じなんですね。

思春期の、思考力が育つ、いちばん判断を自由にしなければならぬときに、有無を言わず押し付けける教育をしています。体罰ってそういうことでしょう。判断力が育つわけではないのです。判断力っていうのは楽しいものでないと。楽しくないと、論理だけが働いてイメージ・ジョンが働かないので、思いがけない発想のようなものにならないですよ。

——数年前、学童保育の指導員をしていたとき、ニイルの思想やフリースクールの運動にひかれて、その通りにしようとした時期があったのですが、権威や管理を否定し、とにかく抑圧させず発散させればよいというやりかたでは、どこかやっつけていけないものを感じるようになりました。その点、シュタイナー教育には説得力があるように思いますが。

高橋 ニイルなども、基本的な考えはすばらしいのですが、それを実践するのは難しいですね。例えば、自分と周りの人が全然違った存在だと感じ始める年頃の、いわゆる「九歳の

危機」を、どのように捉えるのかということなど。

先生は子どもの運命を引き受けている存在なのですから、権威を持って向き合わなくては。手術を受けるときに主治医の先生が権威が無いと、不安ですよ。教育でも同じです。自分のクラスに来たら安心しなさいという先生でないと、子どもは不安です。シュタイナーの教育というのは、どんな先生でも誠意があれば、そういうふうに、自信を持って私に任してくださいということができるんですね。その方法なんです。

大事ななのは精神ですから、そんなに難しいものではありません。さきほど、日本ではレトリックが軽視されているといったのですが、その意味でも、子どもたちに伝えるための技術というものが、全く無くて、何処で声を張りあげるかといった枝葉末節の部分でしか、問題にされていません。こういう気質の子にはこういう話しかけをするとか、教室の雰囲気がかうだったらこう対応するとか、午前中のこの時間にはこういう課目がいいとか、そういうことが大事なんですけどね。

#### \* シュタイナー学校は作らない

高橋 日本でシュタイナー学校を作ると、エリート校が一つ増えるだけです。だから、公立でも私立でも予備校でもいいから、シュタイナークラスを作ろう、自分の受け持ったクラスのなかでシュタイナー教育を実践しようと言っている

んです。変な特殊な学校つくって、来られる人だけどうぞ、  
といっても、ぜいたくな、偏った家庭の子どもしか来ません  
よね。エリートができて、親もエリート意識になる。それから、公立学校で教えてうまくいかないから、シュタイナー学校の先生になります、という先生はまず駄目です。親や、教師の救済願望で学校が作られるのは、自分自身を変えようとし  
ないで外に何かを求めようとするわけだから、シュタイナー教育のめざすものから外れています。シュタイナーは、当時の一番恵まれない子どもたちを教育しようとしたんです。今はまるで逆でしょう。そもその出発点が狂っています。

シュタイナークラスをつくるとしても、先生がシュタイナー教育をやっていますといっさい言わないほうがよいと思います。他の先生たちと同じように仲間としてやっていて、それでいて、自身がシュタイナー教育なのです。どうしてきみのクラスはうまくいくの、と聞かれたときに初めて、実はこういうやりかただからという、そういう態度でないと駄目です。

そういうふうにひそかにやっていらっしゃる先生は大勢います。シュタイナー教育をやっています、というふうに言わないから、目だちません。

#### \* 韓国語を小学校で

——いまの学校でもこういうことができるということがなにかありましたらぜひ……。

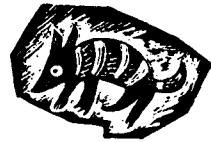
高橋 いま考えていることは、小学校の一年生から一週間に一度、韓国語の勉強をさせることなんです。韓国語は文法が90%日本語と同じ。発音はかなり違うが、実にいい言葉なんです。一週間に一度やっていけば、五・六年生の頃には、自由に話せるようになります。ハングル文字は難しそうに見えるが、最初の一・二時間で覚えてしまいます。そうすると、中学校に行く前に外国語を一つマスターするので、外国に對して心が開かれます。その上で修学旅行に行くと、韓国には、まったく違う世界があることが分かります。

例えば、バスにのると、立っている人のカバンは、座っている人が持ってくれます。それだけでなく、その人は、降りるときにとりの人にそのカバンを渡して降ります。年上の人がいれば、必ず席を譲ります。違う文化を理解するとき、韓国のようにどこか共通点があるほうが、ずっと比較しやすいのですが、それに、日本の子どもたちが韓国語をしゃべれると、韓国の人はびっくりして、日本観も変わります。国際感覚を身につけられるし、本当の意味の道徳教育にもなりますし、いまの日本の教育に欠けているものが本質的に補えますから、ぜひ試みていただきたいですね。

## 心からからだへ

### 診察室からみた

### 子どもたち



・梅村 浄

通知票のうしろには、学科の成績と、日常生活の記録の他に、必ず、出席日数の表がついている。各学期毎に、出席すべき日数と、欠席した日数、それに遅刻の回数を書き込む欄もある。私が小学生の頃は、全く休まずに学校へ通った生徒には、学年の終わりに、皆勤賞が渡された。賞状をもらうために、少々の熱でも我慢して、登校する同級生もいた。いつの間にか、私たちは、病気で休むことは悪いこと、病気をせずに、毎日、学校へ行くことは良いことという価値観に、しばられて暮らしてきた。

学校に通い始める前の幼児や赤ん坊も、できるだけ清潔で

い子には、熱性痙攣や、アトピー性皮膚炎などの理由がある。戦後、予防接種が始められたころには、腸チフス、パラチフス、ジフテリア、百日咳、結核、痘そうが定期的に必ず接種すべきとされ、この他にも、流行のきざしがあれば、コレラ、ペストなどが臨時に実施される予防接種であった。一九八〇年のWHOによる天然痘根絶宣言に象徴されるように、日本でも、これらの病気は、栄養や、上・下水道等の衛生状態が改善されてきたり、抗生物質の開発で治療が可能となり、予防接種が必要でなくなったものも多い。

今では、ジフテリア、百日咳、破傷風、ポリオ、麻疹、風

快適な環境で、病気をさせずに育てることが、母親や父親の役割のように思われている。診療所を、初めて受診した子どもには、カルテの一番上に、これまでなかった病気や、予防接種を受けたかどうかチェックするはんこを押している。ほとんどの子どもは、接種のスケジュールが、かぜなどで、多少ずれることがあっても、ちゃんと予防接種を済ませている。やっけない

疹、おたふくかぜ、結核が定期接種となり、インフルエンザや日本脳炎などが臨時に接種されている。大人になるためには必ずかかるものだったのはしかは、かなり減ってきているが、かぜひきをくり返しているうちに、予防注射をするチャンス逃してしまった子どもたちの間で、春先になると流行することもある。隣の子がはしかになったので、あわてて、ガンマグロブリンを注射してほしいと、電話がかかってくる。「かかったものは、わざわざガンマグロブリンで抑えてしまわずに、はしかにならせてしまえば」などと、電話口で、のん気に答えていると、あせっているお母さんは、何としても、かからせたくない勢いで「じゃ、他の病院へ行って、うってもらいます」と、電話を切ってしまう。

予防注射で防ぎきれぬ病気には限りがあるから、大ていの赤ん坊は、七、八カ月をすぎると、母親からもらった抗体の免疫力がうすれて、突発性発疹症や、かぜにかかりはじめる。ちやうど、育児休暇が終わって、母親が働き始める時期と重なって、保育園に入った子は、しょっちゅう、病院通いをする必要がある。毎週のように診察室にあらわれて、すっかり、本人はなじみになりニコニコしている。母親に代わって連れてきた父親は、「すっかり慣れてしまつて。いいのか、悪いのか」とぶつぶつ言っている。休みあけの保育園では、きつと大泣きをしているだろう。

保育園からも「すべり台から落ちた時、唇を切ってしまったけど、どうしましょう」と、電話がかかってくることがある。

この病気のシャワーを浴びる数カ月が過ぎると、ほとんどの子どもは、保育園に行っても泣かなくなり、私のところには、時たましか来なくなる。

子どもの病気は、スムーズな日常の流れに忍び込んだ闖入者であり、大人の仕事や生活を中断させてしまう。子どもは病気によって肉体がおびやかされるだけでなく、保育園や学校生活に順調に慣れていくことや、入学式や遠足などの、行事への参加を妨げられる。しかし、人間という生物の種である限り、ウイルスや細菌のように、人間を繁殖の場にしていく微生物と縁を切ることはできない。天然痘は、地上から姿を消したが、新たに、エイズが現れた。強力な抗生物質がつかられ、使用されると、また、それに耐性をもつ菌があらわれ、効かなくなるといふ、いたちごっこだ。そして、ちょっとした切り傷に始まって、高い所から落ちて頭を打ったなどという事故も、つきものだ。

だとしたら、いつも、かからないように万全の手を打ち、かかったら、一日も早く治るように、眼の敵にできた子ども病気と、うまく付合っていく方法を考えてみたらどうだ

ろうか。

先日、家にあるビデオを整理していたら、数年前に飼っていた、子うさぎのウーフとムーフが生まれた時のビデオ・フィルムが出てきた。この中に、たまたま、当時小学一年生だった我家の下娘が、病気休みをした日の様子がうつっていたので、再現してみよう。パジャマを着た彼女は、やつれた顔をしているが、四十度の熱を出した扁桃炎が治りかけてきた時で、ふとんに寝ているのにもうあきあきしていたのだらう。入学した学校のスケジュールから初めて解放されて、庭で、突然の休みを楽しんでいる。

妹「おーいムーフ 食べるか。あー、のどが痛い」

姉（当時中学一年生）がピアノを弾く音

姉「なぎ、わるいなあ」

妹「いいんだよ」

妹「おくびようだね。（ウーフは、扉が開いているうさぎ小屋から、庭へ）すぐ出ないね。ムーフは入りそうだよ」

母「ほほほ（ムーフは）入っちゃった。もう入れとけば」

妹「はははは（ムーフは）また出ちゃった。もう一回入らせてみようか」

母「あんた元気なの。いいの、元気だしちゃって」

うまく病気となじんでいくためには、相手の実態をつかむ

ことが必要だ。最近、育児書や、病気の本も沢山出ているので「本を読んだら、こう書いてありましたので、三日間、熱が高かったけど、そのまま、家でみていたら、今日、発疹が出ました」と、突発性発疹症の赤ん坊をつれて、診断だけを受けに来る母親も多くなった。子どもを育てているうちに「この子は、すぐ扁桃腺にきて、熱が高くなりやすい」とか、「かぜをひくと、下痢をしちだから、食事に気を付けておこう」と、子どもと、病気の相性をのみこんでくる。家族や隣近所の情報網もある。不確実な情報にふりまわされることも多いのだが。医者や薬を、病気を手なづける一つの手段として、使えるようになるまでには、ずい分と年季がいるかもしれない。

しかし、これだけでは、不十分だ。休むと、もう、その日にやった勉強がわからなくなってしまうような、盛りだくさんの学習内容が、見直される必要がある。学校を週五日制にする動きは、歓迎すべきことだ。カリキュラムは、今のまま、皆一斉に休むというより、誰でも、少々、休んでも、安心できるような、ゆとりのあるカリキュラムにしていけば、病気の子どもも、焦らずに、ゆっくり、回復の時間に身を委ねられるだろう。

子どもの病気は、個人的なもの、つまり、家族によって癒



されるべきものと考えられている。これまで述べてきたような、誰でもかかり、一時的な不調で、いずれは治るような病気は、それで済んでしまうかもしれない。生まれつきハンディキャップをもっている子どもたちは、その病気を医療によって、完全に治してしまうことはできない。ハンディキャップをもちながら、他の子どもたちと一緒に保育園や、幼稚園、学校で、生活しようとする、保母や教師も、その子の病気に付合うことになる。この場合、病気は、社会的なひろがりをもっている。

私の診療所では、ことばの相談室で、このような子どもたちの相談や言語訓練、リトミックなどを行っている。昨年の秋、一歳になったばかりの男の子が、「障害」児の療育センターから受診をすめられて、母親と一緒にやって来た。センターの医師の意見では、家庭で、一対一の密なかかわりが必要なので、私に、そのやり方を指導してほしいということだった。話をきいてみると、母親は「このまま、一生、寝たきりなのかしら、しゃべれないのかしら、と思うと、遊んだり、話しかけたりする気になれなくて」と、涙ぐんでいる。

思いきって、保育園に入れてみたら、とすすめてみた。冬になって、入園が決まった時、センターの医師は、反対だったのだが、翌日から登園。その後、四歳の兄も、同じ園に入った。二、三カ月に一回、会うたびに、母親の表情が明かる

くなり、子どもの顔付きも伸びやかになってくるのが、印象的だった。入園してから、他の子どもものすること、とても関心を示し、もっているおもちゃをとうとうして這い始めたこと、大きい声で笑ったり、文句をいう声が、だんだん、「ちようだい」や、「あった」に変わっていったことを報告される声にも、最初の時の暗さが消えている。

この子のハンディキャップは、依然としてあるのだけれど、母親の心配が閉ざしていたものがくずれ、花開いてきたという様子だ。その原動力になったのは、保育園の生活だった。

まだ、ハンディキャップも、他の治る病気と同じように、早期に発見して、母親が中心になって家庭で訓練し、克服すべきものと考えられている場合が多い。地域によっては、入園がこの男の子ほど、スムーズに行かない。歩けない子は歩けるようになったら、しゃべれない子は、しゃべるようになったら、園や学校に来て良い、と言われる。

ハンディキャップの子を排除しようとする園や学校は、病気にかかった子がゆったり休んでいられない場所でもある。どんな子どもも、ゆったり病んでいられるように、私たちに何ができるのか、考え、考え、毎日診療をしている。

(うめむら・きよら 小児科医)

## 心からからだへ

### 限りない可能性が

### 花開くように



—サイコシンセシスと私—

・平松園枝

#### 心身医学と心理療法との出会い

私はもともと迷ったり悩んだり、自分なりに納得したいというところがあって、医者になるまでいろいろな回り道をしたほうです。自分の中の矛盾や、否定的な面と闘いながら、本当の自分を求め、また他の人々とも同じ人間として触れ合いたい、支えあいたいと思っていました。医者になったのも、人間好きで、人間と関わることに、人間を知ることができると思っていたことが、大きな理由です。

心理のことを学ぶきっかけになったのは、ある慢性気管支炎の女性患者との出会いでした。彼女は、大病院を転々とし

り、よりよい医療を行うためにと始めたことが、結果的には、自分のためになったのです。このようなセミナーの中で出会ったのが、サイコシンセシスで、人間に対する肯定的・包括的アプローチとして、私個人にとっても医師としても、その後の良いガイドとなっています。

私は主に外来診療をおこなっています。高血圧、糖尿病、心臓病、肝臓病、胃潰瘍など、成人病ないし生活習慣病といわれるものが多く、これらは、名前の通り、生活、社会的なこと、ストレス、心理的なことと深く関わっています。特に心理的要因がその病気の成立に重要であるものを心身症とい

て、沢山の薬を飲み続けていたのですが、一時間話を聞いてあげただけで、ほとんど症状が消えてしまったのです。

そのことから、心身医学に興味を持ち、出会ったのが、今はお亡くなりになった東大の石川中先生<sup>おとし</sup>で、そのご縁で、心理セミナーに参加し、ヨーガなどの東洋のアプローチにも触れることになりました。そして、自身自身のこと気づくことにな

いますが、心身症と診断されないまでも、心理的要因の関与しない病気のほうが少ないと私は思っています。最近の研究では、癌も、精神神経免疫学の分野から、その発症、経過に及ぼす心理的影響が明らかにされてきています。

外来診療の場にいると、医師が一方的に治療することよりも、病気に関する不安を受け止め、取り除くことと、患者の教育が重要な部分であることを痛感することが多いのです。

まず、病気のことを正しく理解してもらう。医師に頼るだけではなく、病気の治療、経過を良くするために、患者さん自身ができることがある、あるいはむしろ自分でコントロールするしかないことを理解してもらう。検診の普及や診断技術の進歩により、外来診療における医師の役割の中で、教育の占める部分が、ますます大きくなっているのです。喫煙、飲酒、肥満に対する指導などがそれにあたります。言えれば分かります、分かればやれるのであれば簡単なのですが、実際は、医師が一方的に言っているだけです。次のときは、すみません、やろうと思ったのですが……というケースが多い。ここには、医師の側の問題もちろんありますが、患者の側の生活パターン、自己イメージ、信条(思い込み)、ものごとへの態度、生き方など、心理の深い問題、すなわち、育ち方、受けた教育などが関わってくるのです。

内科医というのは、おとなになった人を診ることを通し

て、心身の相関関係に気づき、更に、人間の無意識の支配力に驚き、そこから過去の条件づけ、教育のありかたを考えさせられる立場にあるのです。日本人は、勤勉、働きすぎで、自己受容度の低い国民です。自分がこれでいい、となかなか思えない。心身医学的には、失感情、失体感と言われるのですが、外からの期待、あるいは評価に振り回されて、自分の喜びを忘れている。何を感じて生きているのか、何の為に生きているのか分からない人が多いように感じます。周囲への不適応も問題ですが、逆に、過剰適応してストレスと感じない人の場合、長い間に体に無理がきて、いわゆる心身症となることも多いのです。

医師の立場から、日本の教育に関して感じていることは、「『すべき』『すべきでない』」他と同じように、他に負けないように」など、外の基準を教え込み、それに適応させるというやりかたが多いこと。メッセージとしては、「頑張れ」「負けるな」「早くしろ」「失敗するな」などが多いのですが、このようなメッセージが内在化して、私たちを駆り立てているように思います。

いま、盛んに言われるようになった自由か管理か、などという議論も、このような外の基準を教え込むことに対する個人の自主性の尊重の動きなのかと違ってみているのですが、自由とか自律とか言うには、自分の意志を持たなければなら

ない。自分の意志を持つためには、いろいろなものに対して、感性が働いていなければならないし、何々をしたいという喜び、欲求を持つていなければならない。それなのに、いまは、感覚自体が去勢されてしまっているのです。

例えば、子どもに「他人に親切にしない」と、押しつけて教えるのではなく、「こんなふうにならたらどう感じる？」ときいて、人と触れ合うとうれしいという感じを大切にしてい、それが育つようにする。「自分がしてもらったらうれしいようにしようね」と言えばよいのです。サイコシンセシスでは、自分の中に答えを探すということを大事にしています。

### サイコシンセシス

サイコは精神、シンセシスは統合という意味。イタリアのロベルト・アサジョーリという精神科医が、一九一〇年に発表したもので、フロイトのサイコアナリシス（精神分析）に対抗しての命名です。フロイトは無意識に光を当てた点で偉大なのですが、病的な側面から人間を見ました。おかしいところはどこかというふうにみていて、それに気づくだけで症状がずい分良くなるとしたが、アサジョーリは、健康な面、自己表現の面から研究し、それでなおかつ、気づいただけでは足りない、意志の力を働かせ統合していかなければならないとしたのです。

サイコシンセシスでは、人間は、花の種のように限らない

可能性を内在させ、成長し続けるものととらえています。内外的からのブロックをはずし、のびのびした環境におけば、思いがけないほどの花を咲かせ、実をならせるというのです。

自分の中の様々な要素に、いいとか悪いとかのレッテルを貼らず、あるがままに気づき、そのメッセージを受け取ればいい。いけないといって、やめられるものはありませんから。否定的なエネルギーを肯定的に使っていくのが原則です。気づいたあらゆる要素を抑圧せず、肯定的に方向づけ、人格の未発達部分は発達させ、未活用 of 潜在的部分を活用して、自分らしく生きるように方向づけるのです。

いま、英才教育などで、可能性、可能性をいい、いいほうだけを伸ばそうとする傾向があるように思えるのですが、もし、否定的なものを抑圧したり、無視したりする傾向があるのだとしたら、問題だと思います。上に伸びよう伸びようとしても、根の張りかたが悪ければ育たないのと同じです。無意識のうちに自分を振り回す否定的なものにも意味があるとし、自分の一部として受け入れていかなければ、それを抑圧してしまつたら、不健康なエネルギーがたまります。例えば、怒ってはならないと怒りを抑えるのではなく、怒りの意味をとらえ、健全な方法で解決してゆくのです。

このとき、怒りに気づくのも、適切に肯定的に対処していくのも、意志をもつ自分セルフです。私たちの中には、成

長したい、他人と、自然と、自分より偉大なものと触れ合いたいという欲求があつて、誰でも、深く感動したときにはそこに触れています。自分の中の、相反する部分に気づいたとき、この潜在的な部分に触れれば、両者を統合し方向づける知恵が必ず湧いてくるのです。

サイコシンセシスの技法は、この原則に沿って有効なら、何でも良いのです。イメージもよく使われ、自分の体の中に花が咲くのをイメージしていくようなレッスンは、その一例ですが、イメージに関連していえば、例えば、「タバコをやめなさい」というメッセージは、あまり、有効ではありません。否定形の目標は、イメージが湧きにくいので、達成しにくいのです。そうではなくて、「林檎のことを考えないで」と言わずに、「みかんのことを考えてください」と言えば、自然に林檎のことを考えなくなるんですね。

私は、「喜びを忘れたおとな」（私自身も含め）が、自分自身の中に答えを探していくために、喜びをテーマにして、音楽に、深呼吸、誘導イメージなども併用した、カセットテープを作り、『心の別荘一〇三』E P I C ソニーウォークマン（ブックス）患者さんにも使ってもらっています。それを聞いて瞑想の時間を持つと、力が湧いてくると言われます。腹式呼吸をやることだけでも、自律神経系は安定するのです。

## 共に育つ関係

教育という営みで大切だと思うことは、「子供に“教える”という関係でなく、「子供と“共に育つ”という姿勢だ」と思っています。これは、医療職にも通じることで、「患者に“してあげる、だけでは肩が張り、燃えつきかねません。期待を押しつけてしまい、うまくいかないときに、こちらが落ち込んでしまったりします。親も教師も完全である必要はない、共に成長していけばよいのだと思います。子どもと触れ合う、患者と触れ合うことで、私たちの仕事の喜びも大きいのですから。」

自分自身が、自分をブロックしているものに気づき、自分を解放していくことが、子どもに対して肯定的に接していく上で大事なことです。そのとき、初めて、親や教師は、無理をせず、肩を張らず、自分の否定的な面が出て恐れず、受容的に、子ども自身が自分の持つ潜在的な部分に触れて成長できるよう助けてあげられるのです。そして、そのとき、鍵になるのが、自分はこれでいいと自分を受容する自尊心で、このことが他者を受容することにつながります。

教育が大事というのは、何を教えるのか、いかに教えるのかではなく、教える自分たちがどうあるかということが一番響いてくるのだと思います。

（ひらまつ　そのえ・内科医）



## 心からからだへ

# 「気」で身体を読む

片山 洋次郎・談



まとめ 稲 邑 恭 子

私は「(氣的)整体」という方法を通して人間をみているわけなのですが、私の整体の基本的考え方を、まず整理しておきます。

第一に、成長と老・死のプロセスで、本来はスムーズにいくはずのものを妨げるもの、また本来の体質を歪めたりしているものを取り除いていくこと、第二に、体を「気」の流れと波動の場とみて、体の内部での、あるいは人と人の間の共鳴を使って、バランスを取るということ、第三に、医学的な治療や診断を目的とするのではなく、体の異常を、敏感に表面に表す、あるいは感じる体になるようにすること、第四

に、体の歪みを矯正するのではなくて、むしろその歪みを積極的に利用して、「気」の流れのよい弾力のある体にしていくこと、などを目的にしているといえます。

というわけで、整体という「気」の交流の場でみてきた今という時代の身心の在り方について、少しお話しします。

### ●「気」は個を超えている

「気」という考え方は、一つの考え方のモデルにすぎません。それがすべてではないし、医学的なものの考え方を否定するわけではありません。ただ、医学的な見方と何処が違うかといえますと、医学的な身体像では、皮膚の外側は問題にしない、皮膚から内側のことに限って問題を立てていく。それに対し、氣的身体像は、体の外側に連続的につながっているわけです。水面に広がる波紋のように。例えば、人が二人いるとすれば、互いに共鳴することを前提に考えている。

一人一人の「気」の場に触れたとき、イメージ的に言うところ、波動が硬い人と軟らかい人、或は緊張感の強い人、弱い人が

あります。硬い人は、方向性の強い人で、自分の行きたい方向を抑えられると、一つの事に執着していつて、鬱状態になりやすい。逆に、軟らかすぎる人は、分裂病に近い状態というか、無防備で、不安定、過敏です。

### ●過敏化と硬直化

時代と体のことで言いますと、近頃は、いろいろな環境汚染物質が多くなり、それを排泄しなければ生きていけませんから、異物に対し体がすぐ敏感になって、いろいろな形で排除するようになってきています。アトピー性皮膚炎や、花粉症などのアレルギー症状がそうです。そういうふうに過敏に反応しないと、体のバランスがとれない。

また、子どものほうが大人より体質的に敏感で、体も気分も変化しやすいのですが、そういう幼児に似た現象が、大人にも、特に若い人に出てきている。社会の激しい変化に対して、過敏に軟らかく反応していくという、ひとつの方向です。また逆のサバイバルの方向として、硬直してなるべく反応しないようにするという生き方もあり、両極に分かれていくような感じがあります。

硬直化というのは、老人化、極端に言いますと、「ぼけ」です。情報をカットして、反応しなくなる。変化にいちいち反応すると非常に疲れるので、反応しない方向で対応していき、固定的な世界に棲んでしまう。

今の若い人には、骨盤のまん中の仙骨が、後ろに傾いている人が多いです。体重が後ろのほう、かかとかかっている。統計的にもだんだんそうなっていますね。それが、老人的な姿勢。基本的には、骨盤のなから、エネルギーが、背骨を通じて頭のほうに昇ってゆくんですが、それがうまくいかないような姿勢です。仙骨と背骨の間を硬くして、呼吸を浅くしてエネルギーを出さない。あまりものごとに反応しない。

過敏化Ⅱ幼児化ということを経験的適応という意味でも少し詳しく言えば、あらゆるものに対して距離を置くように、早めに反応して風船のように逃げる生き方。全体をふにゃふにゃにしておいて、少しのことでも反応して、深い所に届く前に、軽いところで反応してかわす。最初から受け入れないか、入れてもどんどん出してしまおうということです。

このような在り方は、今までマイナスの評価を与えられ易かったと思うのですが、気的なレベルあるいは潜在意識のレベルでの人間の在り方、人間関係を見てゆくとき、大変興味深いものだと思うのです。

例えば、教師の中でも、過敏体質の人は多いように思えます。私の所に来る人はそういう人が特に多いようです。そういう人は生徒に言うことを聞かせることはできず、一生懸命やろうとするとよいにうまくいかないが、そのうちに、生徒の方がかわいそうになって先生の面倒を見るようになりま

す。そういう人の言葉は一見影響力を持たないけれど、子どもの潜在意識には入っていくんですね。つまり、暗示力はあ  
る。ですから、頑張るのをやめればいいんですね。そこを、  
こんなことではだめだと生真面目に適応しようすると、神  
経症っぽくなったり、からだを壊したりする。これはこうし  
なければ、ということに対して、過剰に反応しやすいから、  
あせってやろうとすると、次から次へやらなければなくなり  
苦しくなる。そこで、最初のことをワントンポ遅らせたりす  
ると、だんだん楽になります。

そういう過敏体質の人は、他人からいろいろと言われやす  
い。言われやすいということは、逆に言えば、言ったほうの  
人がそれによって、無意識のうちにエネルギーを発散でき  
て、気分が楽になるということです。そういう人がいること  
によって、まわりの人が楽になる。言われるほうは大変です  
が、そういう人は、文句もいわれやすいが、優しくもされや  
すいから、流れに逆らわなければ、苦勞しないでいけるん  
です。また、いくら一生懸命やっているつもりでもまわりから  
はそう見えないですから、そこをわかってしま  
うと、わりと聞き直れます。無意識のうちに人を動かす力があ  
るから、それを待つか、自分のペースでできる仕事を選ぶと  
いい。

いまは、その一方、強固な価値観や方向性を持った、執着

体質の人にとっても、生きにくい世の中です。こういう人は、  
自分のやりたい方向が阻害される、あるいは方向性が見出せ  
ないと、緊張がたままって、鬱になったり、体に出たりしま  
す。しばらく前までの社会では、特定の価値観をもつことは  
大変に評価が高かったし、社会全体が一つの方向を向いて頑  
張ってきたので、執着体質の人は生き易かったと思うので  
す。今、社会全体の方向が見えにくくて、特に若い人にとっ  
ては大きな意味での価値観を持ちにくいので、例えば食べ物  
にこだわるなどの、個人的あるいは趣味的なレベルの執着で、  
辛うじてバランスを取らざるを得ません。

執着がありエネルギーがある人ほど苦しい思いをします。  
抑えてしまうとすごい緊張感になる。でも、それだけに、突  
破できる可能性も持っています。結局外側に枠組みを見つけ  
られないわけですから、自分の中に探っていくほかない。も  
っと根源的なレベルでなにか新たな枠組をみつけないとやっ  
ていけない、そういうところまで、いまは追いつめられてい  
るんでしょね。

### ●現実の中に裂け目を

例えば、吉本ばななの小説がうけているのは、現実世界の  
なかに裂け目を見出して、そこにエネルギーを発散させ浄化  
する構造が作品を持っているからだと思うのです。そういう  
自分の方向を何か見つけ出さないとバランスがとれない。昔

はもっと隙間があったのですが、いまは余地がなくなりました。芸術的領域でも、新たな創造の方向を見出しづらい、息苦しい状況になっていると思います。何処かに、そう言う裂け目みたいなものを見つければ楽になるんですが。

個々人でいえば、その人が思いつきエネルギーを発揮できるような方向が見つかる元気になる、元気になる、同じ環境なのに違ったように見えるようになるんです。

### ●自立への強迫

いまは、「自立」しなければならぬという強迫が強いですが、完全な「自立」などありません。核家族の機能はもう一面を持っています。何らかの形で、家族的機能があれば、一人ぐらい居候がいても平気だと思ひ、子どもがたくさんいても無理がないと思うのですが、普通でも、十人に一人はいろいろな意味で適応できない人がいて、老人や子どももいれると30%ぐらいになりますか、そういう人がいることで、全体の緊張度が緩み、空気が良くなります。例えば、赤ちゃんなど無防備でオープンだから、ただそこにいることで、「氣」の波動を調節してくれます。ただ集中している人だけだと空気が緊張し動きが止まりますから、発散している人がいないとバランスが取れません。

大人のなかでも、過敏なタイプの人は、透明で存在感がないけれど周りを緊張させませんから、そういう人がいること

によって、無意識レベルでバランスを取っています。「氣」のレベルで言えば、その人に向かって、周りの人が発散できる。一見何もしていないように見える人たちが、人と人の間の共鳴の關係の核になり得るのです。最も、過敏體質の人だけだと、インスピレーションはあっても体系化したりまとめたりができてにくいので、執着體質の人もないと、全体のバランスがとれません。

目に見える活動だけでなく、そのように「氣」のレベルでの共鳴の關係に氣がつけば、これからの新しい人間關係も見えてくるのではないかと思います。

### ●性差

女の方は、特に三十歳過ぎると、自分中心に転換できて、世界の中心に自分がある感覚になれるのですが、男の場合は、逆に、自分が何者かにならなくてはならない、社会の何処かに位置づけられなくてはならないという事に追い込まれ、状況が厳しくなります。それは、男が社会的にそういうふうにな置かれていることもあるかもしれないし、生理的にそのように仕組まれているということもあるかもしれません。

もともと、男は大地からどこか浮いている感覚があつて、なにか中心点をつけないと生きていけない。不安定で未完成だから、戦争をしたり、組織を作る。その昔男が遊んでいた社会があつた。遊んでいたから、いろいろなものを作れた。

学問とか、芸術とか、組織とか、宗教も男が作った。もともと遊びだったものが、いまは仕事になってしまいました。男のやっていることの90%以上はある意味で本当は余計なものです。

今では、女の人のほうが、新しいことに素直に反応しやすいですね。男は硬くて反応しにくい。外側にも組織を作っていることは内側にも同じような構造を作っているというのと。逆に言うと、自分自身の中にそういうものがあるから、外にも作ってしまうのです。

### ●言葉の重みが消えていく

いまは、全共闘世代が社会を引っ張っていますが、彼らは、旧世代と新世代との結び目にあって、両方の要素を持っています。旧世代の執着する傾向もあるし、新人類的な過敏性もある。その下の世代は、なにか言いたいだけけど言葉が無いんです。深い所で眠っているのを言葉として汲み上げられないから何とも言いようがなくなっただつ。でもまだなんとかしようという気持ちはあるが、そのまた下の20代になるとそれもしなくなります。

社会的運動をしている人たちをみても、旧世代の人たちは「正論」で迫るから、若い人は逆に反論ができなくなつて、「確かにそのとおりなんだけど何か変だ」という気持ちが残る。いまの子どもをみていると、言葉そのものにはたいして意味をこめていない。言葉の意味そのものでコミュニケーションし

ようとしているのではないんです。言葉は形に過ぎない。その場をつなぐための儀式です。でも、潜在意識レベルのコミュニケーションをしようとはしている。

テレビなんかでも、若い人は、ほんのちょっとした仕草や表情から本音を読み取るのが上手です。言っていることの中はあんまり聞いていない。テレビというメディアは映画と違い、情報量が多くて、隠すことなく伝えてしまうから、テレビでは、大スターでもなんでもふつうの人になつてしまう。

いまの子どもたちは、先生が何か言いだすさに、根っこのところを見てわかつてしまっている。テクノロジが進むにつれ、そういうことが顕在化してきているんですね。別の言い方をするると、大脳で何かを考えること、論理的なレベルのことは、人間がやらなくてもコンピュータがやってくれ。そうすると、無意識領域が見えやすい位置に浮上してくる。潜在的なレベルで伝わるのが、当り前のようになってくる。もっと進んでくると、もっと露わになってきます。

潜在意識は、「気」の波動の場として広がっていて、お互いに共鳴し干渉し合っている。子どもは敏感だが、大人のほうが気がつかない。そういう事に気がつけば違ってくる。そこからさらに一歩進んで、氣的コミュニケーションに基づいた言葉が発信される時代が来つつあるのだと思います。

(かたやま・ようじろう「気響会」主宰)

## 心からからだへ

# 人とつながっていきける からだを



・鳥山敏子

### ●学校をやめようと決めて

「本気でつき合った時、子どもはいつたどこまでやるのだろう」。

子どもと対峙しているわたしの中にあるものは、もうこれだけだ。手抜き一切せず、次々と要求し、必要な足場を用意したり、手助けしたりして、本人が「自分はこんなことができたんだ」「こんな世界があったのか」と思えるようになっていくことを無上の喜びとして、この仕事を続けてきた。

ところが、三年前の三月、わたしは、傷つき、疲れはて、退職願を提出した。それは、親というものに絶望したからに

うが、子どもたちのもっている力、まだ表面にはでてきていない宝物をほり出していく「親」にはなっていなかった。わが子にとって何が一番必要で、どういう支えが必要なのかという視点ではなく、所詮は受験制度を容認し、自分がよく思われたい、悪者にはなりたくないという、常に他者の目を気にしながら生きていることからぬけ出していない、ぬけ出そうともしていない人たちであることがわかったのだ。これだけ子どもたちをとりまく生活環境、教育環境が悪化の一途をたどっているのは、実はこういう親たちがほとんどだからというところで納得はいくものの、もう、わたしには、こういう

他ならない。当時、多くの親たちは、わたしの仕事に協力的であった。他のクラスの親たちの数倍も動き、わたしの仕事を支えてくれた。わたしの呼びかけに応えて、一緒に活動もしてくれた。しかし、わたしはそれでも絶望した。ほとんどの親は、子どもたちの味方でないことを、みてしまったから。もちろん、多くの親は、自分こそがわが子の味方だと思っているだろうが、子どもたちの味方でないこと

親たちとつき合うことは、どうでもよくなっていた。本当に真剣に、子どものこと、社会のこと、教育のことを悩みながら手さぐりで道をさがしている人とやっていこう。もうこの子どもたちが不幸になっても知らない、親がやっていくしかないのだから。わたしはやるだけやって、力つきはてていた。

しかし、退職願は、「内容が挑戦的だから書き直すように」といわれ、舞い戻ってきた。「子どもたちのからだや教師のからだが大切にされないことに怒りをもつて、ここに退職いたします」という短い文章が、なぜスナリと受け入れられないのか、納得いかなかった。書きたいことは山ほどあったが、もうくどくど書くのさえ、めんどろであった。わずか三行の文に、とてもいいつくせない無念の思いをこめて書いたことで最後の決着をつけていたのに、怒りはまたふき出してきた。校長とのやりとりを続けているうちに四月一日になり、新学期はスタートしてしまい、結局もう一年残ることになった。

しかし、学校をやめることを決意してしまったからだは、もうどうにもならない。つい二週間前まで授業していたわたしは、もう過去の、わたしが捨ててしまったわたしであった。ここでこの仕事を続けるとしたら、わたしは全く新しい自分を誕生させなければならなくなっていたのだ。しかし、それは簡単にできることではなかった。子どもたちの顔をみるだけで、涙があふれてとまらなくなる毎日が続いた。友人

にたのんで、「仮面のレッスン」「クラウンのレッスン」をやってもらうことにした。日常生活の中で新しく自分を誕生させるという時間的な余裕はなかった。子どもたちの生きている一瞬一瞬は刻々とすぎていくのだから。一刻もはやくこのからだのゆきづまりをつきとめ、自分が本当はどう生きたいのかをみつけることを、凝縮された日常の場、つまり演劇という非日常の中でやっていくことが、わたしにとっては、この時、唯一の道だったのだ。

わたしは、自分のからだを整えることから始めた。野口整体協会本部道場と支部の道場へせっせと通い、少しずつ少しづつからだの奥深くから整えていった。活元運動と、友だちの愉気によってわたしは、自分のペースでゆっくりと呼吸をはじめていた。観客を笑わせるという「クラウンのレッスン」はわたしのきまじめさとの対決を必要とさせられた。四月、六月までの月一回のレッスンと、七月二十六日から三十日の集中レッスンと、三十一日のクラウンの発表会の中で、わたしの中のテーマがうまれていった。わたしにとってのテーマは「学校なんかぶっこわせ！ 色っぽくね！」であった。そのテーマが、どのような形で結実してくるかわたしにはまだみえてこなかったが、八月一日から八月二十日まで、母とネパール・インドを歩いた旅は、余計なことにもどわされずに、その一点に向かってからだがつきすすんでいく用意をす

ることになったようだった。

九月、わたしのからだは変化していた。わたしは、この学校現場をあと半年で去る準備を着々とやりながら、もう一方、無意識のところでは、現場にとどまって、再挑戦をするエネルギーがたくわえられていた。それは、再びめぐってきた三月になって、職場を家から近くのところに変える自分をみて気づいてはいたが、それでも意識は、やめる方向にむかつてつき進んでいた。あと、十か月、あと九か月、あと八か月とカウントダウンしていくことで、どんどん自分が軽くなっていった。やめてから広がってくる学びの場を想像するだけで胸は熱くなり、心は弾んできた。その弾みは、やがて、毎日の授業や子どもたちへのむかい方に変化をもたらした。

学校の中でわたしはかなり自由にふるまい、学校にいなから学校をやめた状態に近い生活をするようになっていた。武蔵野小学校という職場は、そういうわたしのふるまいを受けいれ支えてくれた。「鳥山さんは、学校貢献度ゼロ」と笑われながら、わたしもそういう自分を大いに楽しんでいた。学校にいながらにして、好きなことをやりはじめた自分をみて、「もう少し学校にとどまる」ことができそうな気がしてきた。その中にこそ、自分の生きたい道があること、いや、もう、その道を自分が歩んでいることを知った。

こうして、退職願を出して三年目に突入した。学校の教師

をやめて羅須地人協会をつくった宮沢賢治の足跡をたどるために、賢治の教え子たちにインタビューして歩く映画をつくり始めた。さらに六月中旬には、「スーホの白い馬」の授業以来、実に二十年ぶりに、念願の馬頭琴コンサートを、モンゴルの演奏家と歌手を招いて実現させた。千二百人の人たちが市民会館大ホールをうめ、モンゴルと日本のつながりを感じる時をもってくれた。そして夏休みには、一か月かけて、「孫悟空」の芝居の脚本づくり、大道具・衣裳づくりなどに取り組み、プロの演出家、照明・音楽・舞踊の人たちの手も借りて上演した。

これらの大イベントは、四年一組の父母が中心の「子育て会」が核になり、三月から九月まで、ほとんど休みなく取り組み成功させてきたものであった。

#### ●なぜ「孫悟空」なのか

何億、何千万年も国境などというもののない時代を生きてきたわたしたちのこのからだ。このからだの細胞の一つ一つはしっかりその時代を記憶しているにちがいない。わたしたちが好むと好まざるとにかかわらず、からだの深くに入りこんでいる仏教思想、儒教思想、そして、さまざまな思想。それらを「孫悟空」をやっていく中で洗い出してみたい、洗い出す中で、それらの思想をとっぴらった素裸のからだと対峙することはできないだろうか。そこから人とつながっていけ



るからだを誕生させることはできないだろうか。

あの天安門事件と前後して、私の胸の中で一挙にふくらんでいった、ふつうの中国の人たちに会いたい思い。アジアが一つにならないと世界の平和は実現しない。日本と中国・朝鮮が本当にお互いを知っていかないと二十一世紀には平和は不可能だ——この思いが、「孫悟空」という具体的な芝居を通してのからだづくりイメージを結んでいったのだ。

第一回の「孫悟空」は、一九九〇年八月三十一日、武蔵野小学校体育館において公演した。百枚以上のベニヤを使い、体育館の天井にまで届く大パネルを立てて、スケールの大きい舞台をつくったため、本番寸前まで道具づくりに追われた。また、中国の京劇の立ちまわりにみるようなからだの動きは、からだづくりができていないのと指導者がいないので、取り組めなかった。それでも第一回公演としては成功した。蒸し風呂さながらの体育館で二時間という長い芝居を、小さい子どもたちから年寄りまで大いに楽しんでみてくれたのだ。芝居の終わった八月三十一日夜には、来年の「孫悟空」公演は、沼島市民会館大ホールで行ない、一年かけてからだづくりをしていくことと決めていた。

九月からさっそく取り組もうとした時、芝居づくりに参加した親たちの間から、問題が噴出した。六月中旬の馬頭琴コンサートから、八月の「孫悟空」の公演にいたる大イベント

は、表面的なつき合いだけではつまらない関係を必要とした。深くつき合えばつき合うほど、ひとりひとりの相違はきわだち、時間にせまられての取り組みは、親たちの間に衝突をひきおこした。それらの問題解決は、ひとりひとりの親のおいたちと、そこからできていくからだの問題をみつけ出さないことには不可能だった。親たちの話し合いは、堂々めぐりの消耗するだけの話し合いになっていた。解決への道はなく、もう訣別しかないように思えるものだった。体調をくずしていたわたしが、やっと親たちの問題にかかり出したころには、すっかり感情的なしこりができ、すぐに何とかなるものではなくなっていたが、それだからこそ、本当に深いところからかわることを必要としてもいた。親たちもあきらめきれない。しかし、「もうかわり合いたくない」思いのものが一体どこからきているのか、それをわかりたいという気持ちがひとりひとりの中にあつた。おそらく、これだけ対立し合ったら、訣別するというのが一般的なパターンであろうが、そういう、人とかかわり合い方が、子どもたちとかかわりに深くつながっているのを、彼女たちは直観していた。そして、そこを乗り越えられるかどうか、これからの人生を豊かなものにするのか、限られた人とのつき合いだけで終わるのか、自分の可能性をもっとひき出す方向で生きるのか、ということにつながっていくことにも、気づいていた。

しかし、解決には時間がかかる。それは、親自身にとって、本当は、今はまだ、手をつけたくないからだ、の領域にまで踏みこんでいかないうちでできないからだ。これはこれからゆっくりやっていくことにしよう。

孫悟空上演にむけての取り組みの日は、もう十か月をきってしまった。わたしは、それまで活動の母体になっていた私たちのグループ「子育て会」とは別にとりあえず、数人の親や友人と「こころとからだの会」を結成し、中国の京劇のたちまわり指導者張維權先生を迎えて、子どもたちや親たちに指導をしていただくことにした。これを進める一方で、親たちが直面した問題にもっと深くかかわって取り組んでいくことに決めた。話し合いの他に、池田潤子先生の池田自然体操の力をかりて、からだの視点から自分たちの問題に光をあててみることをやってみた。それは、親たちが、相手を追及するのではなく、自分自身のからだに心で直面する機会をつくってくれた。しかし、親自身が、どういう育てられ方をし、それが、わが子や、まわりの人たちとのつき合い方や、ものの考え方、感じ方をどのように左右しているかに、ほとんど無自覚なまま生きてきているため、現実の問題解決となるには時が満ちてくるのを待たねばならず、その歩みは、遅々としている。

しかし、子どもたちと本気でつき合うとすれば、こういう

試みこそが必要だったのであり、こういう試みをぬきに、学校教育の問題、男と女の問題、親子・夫婦の問題、教師がかかえている問題、子どもたちのからだにおきている問題、環境や社会の問題などは、本当の解決にはなっていないのだ。

わたしは、こういう学校体制や社会問題が、このからだところのありようからうまれてくることを痛感する。意識分野ばかりを問題にしてきた従来の時代の問い方を超えて、無意識の分野を含む広大無辺な宇宙を内包しているこのからだから時代を問いなおす場として、「孫悟空」は浮上してきた。ここはもうただ芝居をやるための場ではなく、まさにそのものずばり、大人にとっても子どもにとっても「孫悟空学校」なのだ。

\* \* \*

現在、この「孫悟空学校」は、中国京劇の先生、張維權さんを迎え、演出家津田和仁さんの協力のもとに、八月四日、星夜公演にむけて、レッスンに取り組んでいます。参加したい人、参加させたい子どもたちがいるようでしたら、鳥山敏子 (0428-31-1606) か、吉田穂積 (0625-44-1914) までご連絡下さい。チケットの申し込み先も同じです。

「宮沢賢治の教え子たち」の映画も同じ場所です八月三日夕方五時半から上映します。

# 発言

## 音楽療法の一場面

浜谷 紀子

朝、十時近くになると、お父さんお母さんに連れられて、子どもたちが集まってきます。子どもたちが揃うとドアを開け、「おはよう、よくきたね」と相談員の先生たちが迎えます。

私たち二人のミュージックセラピストは、ピアノや楽器ケースのそば、また、子どもたちが主に活動する部屋の中央の大きなカーペットの上のかわいい椅子のそばで待ちます。

楽器箱へかけつける子、箱の中の楽器を一つずつ並べてみる子、ピアノの上のピンクのジョーゼットの布にそっとさわってみる子、先生の後ろに隠れじつと様子を見ている子、部屋の隅に座りこんでいる子、いろいろな表情が見られます。

ここには、何らかの問題をかかえて市の相談室を訪れる子どもたちの中でも、音楽療法が特に効果的と思われる子どもたちが通ってきます。音楽療法だけを受けている子もいます。が、普段は地域の幼稚園や保育園に通ったり、家庭にいな

ら、定期的に相談室でケア(プレイセラピー、心理相談など)を受けるのと平行して、月一回ほど音楽療法を受けるといった形が多くとられています。

私たちのところには、次のような子どもたちがやってきます。人との関係がづくりにくい子、心を開きにくい子、集団生活の中では力が出せない子、流れに乗れなくて置いてきぼりにされてしまう子、感情を表現することができない子、動作がのろい子、耳や目に障害を持つ子などです。

私たちはまず子どもたちと出会うことから始めます。音楽は言葉を超えた出会いをもたらしてくれます。小さな鈴や笛で醸し出される音楽で、そっと目で語りかけ、指と指で確かめ合い、遠くからおずおずと見ている子どもに、時には歌いかけ、時にはそっと近づき、心で呼びかけます。二人の間に無音の音楽が流れることもあります。

セラピストは子どもたちとの「共鳴音」を探し、信頼関係

を作り、子どもの世界を広げていく手伝いをします。子どもたちにとっては「こうしなさい」がなく動ける場であり、他の場面では出せない自分を表現できる場です。また外界からの音刺激を心地よく楽しく取り入れ、聴こうとする気持ちが育っていきます。

音楽に心が動き、体が動き、気持ちが開かれてゆく。それは意図したものではなく、楽しい体験の積み重ねと、心の安らぎを味わう中で自然に起こってくるものなのです。

ある子は、突然立ち上がり、ラッパを吹きながら歩き出す、ある子は柔らかい布にくるまってお母さんのおなかにもどってしまったようにじっと寝転んでいる、ある子は大きな布の波に体いっぱい、心いっぱい伸び上がり飛びついていく、あるときは全員が大きな太鼓に集まって叩きはじめる。

セラピストはリーダーとピアノストに分かれ、子どもに起こっていることを見つめ、一瞬一瞬の子どもの心に迫り、何が求められているかを感じ、絶えず音や対応で応えていきます。子どもが沈んでいるときには、沈んだ音楽を、はずんできるときには楽しい音楽で応えます。いつでも鳴らしても合うように選ばれた音のベルや鐘、笛、ラッパでおずおずと試したり、あるいは生き生きと自信たっぷり演奏したりができるように、また他の子どもたちと合わせる楽しさも味わえるようにと、気もくばります。

ここではいろいろなことが起きています。例えば簡単な音楽ゲームがあります。運転手になった子が、車に見立てた椅子に客を乗せ、色々な所へ案内します。待っている子は「駅」で出発の笛やベルを鳴らします。運転手として行く先（部屋のあっちかこっちか）を決め、速さを決め、距離を決める。自ら決定し、発見し、行動する。たったそれだけのことが、子どもたちにブライドを持たせ、劣等感を克服していく手助けになります。音楽は動きを誘発し、やりとりを盛り上げ、また、続けさせる力をもっています。音楽そのものを味わい、音楽によって支えられることで、子どもの中に新しいエネルギーが生まれてきます。他者とのやりとりのなかで、模倣し、人を認め、自分のやった事が他の子やリーダーによって新たな展開として返ってくる快感、再発見、共感。さまざまな音楽活動によって、実生活では味わえない「人生における幸福な体験」をすることができるようになります。

ここで体験したことが、どうか子どもたちの他の生活の場面でも良く生かされますようにと祈りながら、また次回へとセッションを重ねていきます。

音楽療法という場面を通して、私は心と体の表裏の不思議な関係に出会い、子どもたちの心と体が語るものに心魅かれながら、同時にそれを引き出す音楽の素晴らしさと怖さ、その可能性を改めて感じています。

# 発言

## 不登校の日々をくぐって

倉原 香苗

私は、東京シューレに通っている現在十八歳の女の子です。学校に行かなくなったのが、小学校二年の時だったので、そろそろ十一年近い月日がたつただけけど、その時の周りの対応は、今思い出しても凄まじかったと思う。

行かなくなった頃のこと、私は一年から進級する時に、友達とケンカをしたままだった。新しいクラスには、仲のよい友達がいないくて、孤立していた等、理由は様々なことがあったが、小さかったので断片的にしか覚えていない。家では、祖母や父と母がよくケンカをしていたので、学校にいても不安だった。

朝、私はなかなか起きなくて、ぐずぐずするようになった。すると、となりのクラスの先生（当時、担任は産休だった）と小一の時の担任が、車で家までむかえに来て、私が全然起きないので、ふとんからひきずり出し、服を着せ、車に乗せた。柱にしがみついて、泣きさけんであれば、どんなに抵抗しても、大人五人がかりなので歯がたたなかった。

学校に着いても、職員室で机をかためられて、逃げ出さないようにされたりして。少し落ち着くと、教室につれていかれて授業をうけさせられた。内容なんか聞いていなかった。体育の授業なんかでみんなが教室からいなくなると、こっそり学校からぬけだし、家に帰ったこともあった。

今でこそ、少しずつ学校側も動き出しているが、十年前は「登校拒否」という言葉もなく、精神病といわれ、私を取り巻く環境は冷たかった。五年生の時、教頭先生に、「学校は、あなたを食べたりしないわよ」をやさしく言われたが、私には、本当に食べられてしまうのではないかと恐怖感があった。私にとっての学校のイメージは、恐い所だった。それほど、行かなくなった私に対して、学校は、酷い扱いをした。

二年の後半には、家にいられるようになった。三年になり他県に引っ越しをし、しばらくは学校に行ったが、四年の二期ごろから、また、ずっと行かなくなった。

東京シューレと出会ったのは、私が中学一年の六月で、ち

ようど六年目だった。初め週二日のペースで行っていたが、夏休み明けぐらいから行かなくなった。今までずっと家にといたら、集団に入るのが恐かったのだ。それでも、月一回は顔を出しに行っていた。次の年の一月、ちょっと行ってみたら、劇の公演のことで盛り上っていて、私もやらないか、と声をかけられ、それがキッカケで通うようになった。それから少しずつ授業に出るようになり、シュレーの活動にも参加するようになった。そうなる楽しくて、毎日行っていた。シュレーの授業は選択制で、みんなの間で「せま勉」といわれる国・算・理・社もわかりやすく、わかるまで教えてくれるので、勉強がおもしろいと感じるようになった。

シュレーに入って一年と少したった頃、月一回スタッフで出していた通信を、子供たちの手でやらないかということになり、私もやってみたいな、と思い参加した。原稿を頼み、編集して印刷する。こう書くとなんでもないが、これを毎月やるのはなかなか大変だった。結局、通信作りは、二年ほどやった。編集長もやり、今は、二代目、三代目と、どんどん新しい人がふえてきている。私にとって、通信作りは、一冊作り上げるたびに自信となった。

今思うと、シュレーには、自分がいるという実感があるから行っているんだと思う。だから、少々の熱があっても行っていた。シュレーにいれば、いつも何か発見できるからだ。

一分でも長くいたいので、なかなか帰らないで、よくスタッフをこまらせていた。自分の居場所だ、と感じられるというのは、シュレーの魅力の一つかもしれない。

将来のことは、いろんな人から聞かれるけど、具体的には、決まってる。あと一年は、シュレーでやっていきたい。だけど、これからやりたいことは、たくさんある。学びたいこともたくさんある。初め、私は学校に行けなかった。行こうと思っても行けなくて、そんな自分をずっと責めていた。でも今は行きたいと思わないから行かない。行くのも行かないのも一つの道だと思うから。私は、私の道をみつきたい。そして、できれば今まで、たくさんの人に教えてもらった、助けてもらったことを、これから、少しずつ、今、同じような経験をしてる人たちに返していけたらと思う。

シュレーは、授業にしても活動にしても、自分がやるという選んで、それに対して責任をもつ。見方によっては、厳しいけど、私は、それが自由だと思ってる。周りの人々たちを尊重するようになって、自分の個性を出せて、自分をみつめられる。それは、誰かに教えてもらうのではなく、自然に身につくものなのだと解った。

そんな自由のあるシュレーは、私にとっての居場所だと思う。今までシュレーでたくさん体験してきたことを生かして、次のステップを進みたい。

# 発言

失われた

身体を求めて

高橋 実

## 1 演劇の産声

〈唐十郎との出会い——「劇団無頼派」へ〉

確か文化祭。幕が降りた舞台。誰もいない観客席の椅子にひとり呆けていたあの瞬間、すでに引き金は引かれていた。

高二の名もなき女優は私のすべてを風のようにさらっていた。感動というには、あまりに淡々とした私の心地は、「印象の食物」の強烈さと深さのせいだったのかもしれない。さらわれた後に残された何もないという嬉しさ。それを知らず知らずのうちに求めたのが、私の演劇へのノックだった。

今思えば、それは、幼き魂に幾重にも幾重にも着せられた、社会の通念・常識という殻からの脱皮を図ろうとする胎動だった。「教育」という船に乗せられてした航海の帰港地は、私にとって、船を徹底的に解体する歓楽街であった。昼も夜も街はスポットライトを浴び続ける。私は情念とも呼べるエネルギーの発光体に変身した。闇雲に、ただ闇雲に、知

らない者の特権であるところの理念を振りかざし、体を張った。

眼も鼻も口も耳も毛穴も全開して、溢れ出るエネルギー。絢爛たる魂と肉体が織りなす聖と俗の埒場に、高揚感と充実感を味わいながらも、それらは、楽しくはあったが魂の凝視にとつては、遠いものであった。私の遠近法は、次に舞踏を捕らえていた。

## 2 舞踏の屹立

〈「静」と「集中」の舞踏へ〉

そこには、演劇の動とは違ってかわって、静のなかにあらゆるものがひしめきあっていた。矛盾を突破する自己表出から、矛盾を背負う、否、矛盾をそのまま生きる自己充足へとチャンネルを変えたとき、突然、愛と光に包まれた。

私の不信の魂であるところの自意識が、冷靜さの海に抱かれたのだ。ほんの瞬<sup>まはたき</sup>をする間に、私は脱同一化のプロセス

を見事にやってのけた。

が、それも束の間のこと。自意識が、切り刻むことのできない肉を料理すべくこれでもかこれでもかと包丁を振りおろしても、そこにあるのは踊りとはかけ離れた木偶の坊(棒)だった。「お前は何をしているのだと」中原中也の声が木霊する。そんなある時、突然、へお前は完璧だ」と、これまで覚えたことのない確信に包まれた。これはなんだ。その揺るぎない感覚は、それまでの私を支えてきた疑いの城塞を粉微塵に砕いた。

私は裸にされた状態で、真に私らしく漫然と露<sup>あらわ</sup>に立っていた。人間の唯一の武器であり方法論でもあるへ集中のほんとの意味を知ったのは、このときだった。自由とはまさしく、私のすべてを私らしく存在させることなのだ。私の、どんな側面も漏らさず網羅する細心の注意力が、彼岸を覗く。私にとって舞踏は肉を、晒して見せる側と見る側の、互いに一抹の不安を享受する、怪しげなコミュニケーションである。

しかし、この深奥の映し鏡を、創造というジャンルに嵌めて、ぬくぬくと己だけの肌ざわりを楽しむ時代の知性は、おのずと手足をもがれ、思考や意志さえもがれて、生命という共同幻想のもとに、植物人間化を推し進めている。

### 3 治療のダンス

無意識の領域が飽和状態に達するのを待たずして、私は治

療という思いがけない世界に足を踏み入れていた。己の身体から他の身体へ移行するのに理由はなかった。私にとって治療は舞踏と同様、私と他者の意識・無意識が治療の場に飛び交うダンスだった。舞踏が存在の詩だとすると、治療は存在の海だ。

治療は操<sup>コントロール</sup>作や予定調和によって動かされることなく、それ自体が生き物である。その変幻自在なエネルギーの交流は、意識の速度より身体の速度のほうが速いことを教えてくれる。速度が速いということは、より現実近く、より現実を可能たらしめている力をもつという意味である。

私たちの意識は常に幻想を追う。幻想を追って寄り道する分、この時間に生きているという実感をつかむのに時間がかってしまう。

その最たるものが、へそんな筈はない」という思いである。最初からへどんな筈もない」というのに。その意味で、身体はへそんな筈はない」をいつも裏切る。

意識は未来を想像できるが、解<sup>とく</sup>ることはできない。身体は未来を想像できないが、この瞬間に確かな未来を準備している。それができるのは身体が解<sup>とく</sup>っているから。身体は過去を振り返れないが、過去のすべてを含んでいる。瞬間とは、常にこれまでのすべての結果であると同時に、これからの準備のことだ。



私達の知性はこの同時性を奪われているが、身体はあらゆる瞬間に、一回性の命を全うする。そして、とりあえず、現実とは、その身体が在ることに他ならない。

常に変化する身体を包みこみ固定化を図る意識の自己イメージが執着と化すとき、病いが立ち現われる。それは、他者から教えこまれ、自己の欲望に都合のよい解釈をする、認識のワンパターン化のなせる業だ。

私達は病いに対して、自分を脅かす敵として見るのではなく、意識を拡大するためのチャンスとしてその意味を理解しなければならない。病いは、夢見る身体、バランスをとろうとする身体からの訴え、メッセージである。いいかえれば、身体的（無意識的）なものの言語化（表出）であり、身体、夢の出入口でもある。治療とは、夢見る身体と夢見る意識を互いに近づけていく行為である。

それぞれの個体の独特なエネルギーと交流しながら、私は畏れ敬うことを学ぶ。

#### 4 悪について

私達は、本当に小さな家から世界を眺め、膨張した思考がその風景を蹂躪する。人間としての伝統を重んじ、意味と価値を探り続ける強迫的な手つきは、火傷をも恐れない。

私達は、私達の考えうる真・善・美の回路を絶対化する。  
〈間違いはおこってはならない〉。この思い込みの根拠はなん

だろう。それは、とても自然なことだが、〈苦〉から解放されたいという思いである。死は避けられないものと覚悟するが、苦からは逃れたい、あつてはならないと思う。そして、あつてはならないことを人は悪と呼ぶ。

しかし、この〈苦〉Ⅱ〈悪〉の浅層心理の奥に、無意識界の日常が展開している。そこでは悪が自在に濶歩する。不幸だと思える人を見れば、その原因を罵りながらも、無意識の領域では、自分が当事者でなくてよかったと胸をなでおろしている。それを他人に覚られまいとして、哀れんだり、優しかったり、許したりする。

人を善に向かわせるエネルギーは、悪があつてこそ生まれる。自由や幸せへの願いの強度は、現状に対する否定度の強弱に依拠する。それでも私達の見栄は、それを真・善・美の範囲に治めようとするのであり、その無理が、個人的にも社会的にも、病いの発端となる。

いつの時代も、世界の改善のドラマは、悪に支えられている。死を賭しても、歴史はこのルールを破らない。もし、改善する必要のない時がくるならば、悪（ダイナミズムの源）は消滅し、私達は目出度く昇天する。悲しいのか嬉しいのか、それは誰に解る筈もないが……。

（セラピスト／鍼灸・整体治療師）

## 目から文明と医学を見る

安東 尚美

私は十八年間もメガネやコンタクトレンズを使用し、最悪の場合は0.1以下の視力だった。眠りが浅く、ゆとりがなく緊張しやすい性質が視力回復の障害になっている私だが、十二年前、眼科医から「勉強を続ける限り悪化は続く」と言われたのを契機に、ベイツス理論による訓練を六カ月ほど行った。この安価で無害な訓練の結果、メガネの度が二割五分程弱まり、視力は0.2位まで良くなり、一時的には0.5位まで見えるようになった。

しかし、眼科医を含む、周囲の人たちの「視力は回復しない」という攻撃に負けて中断してしまった。その後、二人の子供の出産育児のため訓練に集中できず、画期的だといわれるRK手術（角膜を放射状に切開する）を受けることも考えてみたが、これに対しても、周囲の人は子供たちの面倒を見てくれるほどの理解を示さなかった。こういういきさつか

ら、私は目に強い関心を持つようになった。

学校の理科の時間に、生物学の知識として、「カメラではレンズとフィルムとの距離が変化して遠近調節を行うが、人間の目はこれとは異なり、水晶体の厚さが変化して遠近調節を行う」と習ったはずだ。いわゆるヘルムホルツ説というものである。これに対し、ベイツス理論では、「人間の目もカメラと同様、眼球を取り巻く眼筋によって眼球の形が変化し、水晶体と網膜の距離が変わることによって遠近調節を行っている」としている。

近視、遠視、乱視といった眼の屈折異常はこれらの眼筋の慢性的な緊張によるものなので、「メガネで矯正するほかない、全快や改善はおろか進行を止めることすらできない」とあきらめる必要はなく、眼筋が正しい働きを取りもどすような訓練を施せば全快しうる、というのだ。

私がベイツス学説に興味を持ったのは、この方法が、完全な視力を取りもどす唯一のものだと思ったからだ。各地の視力回復センターに行った知人は望遠訓練では治らないと言っていたし、RK手術でさえ、視力0.1以下の人は術後も補助的にメガネを必要とする場合があるという。

ベイツス学説による訓練法の詳細は『眼がどんどんよくなる（ハロルドペバード著、青春出版社）』などに紹介されている。正常な眼が行っている①まばたき、②視点移動、③中心固視、の機能を再獲得するために、身体回転（ロングスウィング、スウィング）などの訓練をする、というものである。私と娘は、このほか、視点移動の訓練として、パソコンソフト「速読くん」中の視力向上訓練や、電車の中で一分間ストレッチングを行った。

また、私は目の回りのマッサージの後バー

●眼筋マッサージ  
こり固まった眼筋のほぐし方

目の周りをマッサージ



(『速読くん』操作マニュアルより)

マッサージの仕上げは  
指全体をまぶたに軽く押し当てる

マッサージの仕方は  
人差し指を使って、押すように

ミングも行った。これらの訓練の中で、目尻の横、耳の後ろ、首筋、足の裏、計八カ所のツボを自覚し、指や電子鍼で刺激した。

この方法で、四歳の時に0.8で近視系のメガネで1.2だった私の娘も、一年半後に視力は1.2になった。

心と体の関連で言えば、私は「大きなハンマーで鉄を打ちつける」ときのような張りつめた気持ちで人生を過ごすタイプ。ペパード

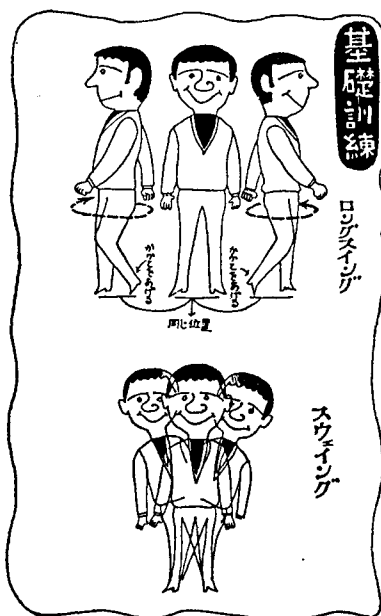
氏の言う「目の悪くなりやすい性質」の持ち主だ。訓練では単に目が良くなるばかりでなく、ゆとりを持つ習慣を知ることにもなった。

また、現代医療の全てを盲信すべきではない、ということもわかった。私は、結膜炎やものもらいについては眼科医を信用しているが、屈折異常についてはほとんど信用していない。RK手術についてすら、日本の眼科医師会が認めないので健康保険が使えないとの

こと。一枚売れば価格の六〇七割が眼科医のふところに入るコンタクトレンズや、メガネ業界の利潤を守る方が、新しい治療法の研究や習得より大事、と考えている方が多数派のようだ。

ヨガや速読法、骨盤を正す体操の教室でたまたま副産物として視力が向上したという話があるが、本来の目的とは異なる。まずは眼科医がベイツ学説を再研究してほしい。

「遺伝だから治らない」とされてきた色盲の治療法も、一人の人間が自分の体を使って独力で開発したという。「近眼は遺伝だから治



(『眼がどんどんよくなる』ハロルドペパードより)

らない」と片付けているのは、眼科医の怠慢を露呈するだけだ。

We 読者には学校の先生方や、子供を持つ親の方が多いが、生徒や子供たちの目が悪くなっても「メガネはあくまで一時的な見る助けであって、一生頼ろうと思わないように。より悪くなる前に、ベイツ学説による訓練を考えるよう」伝えてほしいものだ。今後、都市の24時間化が進めば、視力低下を訴える人はさらに増えるかも知れない。メガネは文明の象徴と言っではいけない。

姿勢や照明、栄養などこれまで言われてきた常識的なことも目を悪くしないためには必要なことで、私も、RK手術で完全な視力を取りもどした船瀬俊介氏（『グッドバイ・メガネコンタクト』農文協刊）のように、電車の中で新聞や本を読むのをやめ、英会話のカセットをイヤホンで聞くことにした。しかし、最も大きく変わったのは科学や文明に対する



（『眼がどんどんよくなる』ハロルドペパーより）

ものの見方である。「食生活の変化で幼児期から噛む力が失われ、顔面の筋肉が未発達なため視力低下をきたしている」という論文を発表した公衆衛生学の研究者も、「視力が弱いということは、生物として人間の力が弱まったということだ」と言っている。

ベイツ学説は、虹彩を絞りこむために太陽光線を用いる訓練や、眼筋説のために批判されてきたが、目の遠近調節についても、眼筋とともに水晶体も関与していると考えた方

が自然かも知れない。

屈折異常について研究をしている眼科医の方から、「まだわからないことの方が多いと思う。学会で発表するとなると、データを整え実証せねばならないので道は遠いが」という手紙もいただいている。先述した公衆衛生学者も、「生きている人間の調節方法は完全にはまだわかっていない。ヒトの生物学の立場から、牛乳など軟かい食物の摂りすぎが好ましくないのでは」と言っている。

#### ●眼筋ストレッチ訓練 電車の中で1分間ストレッチング



（『速読くん』操作マニュアルより）

## ◆学習の主人公たち◆

### 共学の家庭科の授業を受けて

東京都八王子市立檜原中学校三年

久武 龍

◆三年間、共学としての家庭科を勉強してきて感じた事は、本来の意味での家庭科の授業を行なうことができたという事です。

例えば、住居についてなら、家具の配置、日光の関係、今と昔の住居の比較、教室の設計等、小学校ではしない様な授業をしてきました。台所の設計をした時も、家族の人数、日光の当たり方、家具をどう配置したら暮らしやすくなるかということを考えて入れて、設計しなければなりませんでした。その様な、普段の暮らしでは気にも止めない事柄に注目することが、家庭科の授業では大切だということがわかりました。

二年の時には食物について授業をしました。が、この時も、普段気がつかない様な食品添加物やカロリーについて勉強をしました。

また三年では、生まれて初めて「保育」という授業をしました。自分がどの様に生まれてきて育てられたか、そして親はどれ程の苦労をしたのか、そして、将来自分が子供をもつようになった時、どの様に対処すればよいのかという様に、この授業は僕にあらゆる方面からの検討をさせてくれました。

◆住居の授業で、「自分の理想の教室」を作成したことが、意外に楽しかったことを覚えてます。これをやると、今使っている教室の使いにくさがとてもはつきりしてきたことに驚きました。「黒板だと、チョークの粉がとんで困る」などということです。そうすると、作成している間に現実を見ると、つくづくやになったこともありました。

中村 和博

◆住居の授業で設計した教室の他に、部屋の設計もしてみたかった。頭の中で考えた図を紙に書く事は楽しいと思う。そしてその部屋に住めたら一層楽しいだろう。将来家を建てる時は、自分で設計した家に住みたい。人に与えられたものの中で満足するようじゃ何の楽しみもない。自分で考え、自分の理想の家に住めたら、毎日が楽しい日々になることだろう。自分の事は自分で、できるだけ

いて学んだとき、その恐しさや、原爆を落とされたときの状況に驚かされました。

早川 宣延

◆ぼくは、住居の授業を受けたとき、他の地域の学校の写真を見せてもらって、学校にもいろいろなくふうされたものがあることを初めて知った。八王子にある学校は、みんな檜原中学校のような形のものばかりなのでおどろいた。だから、教室の設計をするときも、とまどってどうかけば良いのかわからなかった。中学生や小学生は学校で一日の約三分の一を過ごしているのに学校で生活しづらかったり不便だったりしたらこまると思う。八王子の学校も、いろいろ特色のある形になればいいと思う。

高林 武彦

◆住居の授業で設計した教室の他に、部屋の設計もしてみたかった。頭の中で考えた図を紙に書く事は楽しいと思う。そしてその部屋に住めたら一層楽しいだろう。将来家を建てる時は、自分で設計した家に住みたい。人に与えられたものの中で満足するようじゃ何の楽しみもない。自分で考え、自分の理想の家に住めたら、毎日が楽しい日々になることだろう。自分の事は自分で、できるだけ

何とかしたいものだ。そうした望みが叶えられた時の喜びは、これまでにないすばらしいものだろうと思う。昔の人々は広い土地で広い家を建ててのびのびとくらしただのに対して、今の家は狭い、環境は悪いで、不健康そのものだ。何が原因でせまい土地に無理して住むようになったのか、それを疑問に思う。

#### 桶本 真紀

◆保育の授業を通して、幅広い知識を学ぶことができた。特に大事だと思った事は、私が子供から親という立場になったときのための重要な事の話です。それを聞いて、生命というものはとても尊いもので、大事にしていかなければいけないとつくづく考えさせられた。それと同時に、決して気の迷いや、軽はずかな気持ちで、これからの人生を生きないとも感じた。赤ん坊のことが特にそうだと思う。気軽な気分で赤ん坊をつくり、殺している人がこの世の中にいると考えると、少し悲しい気分になる。だからこそ、自分はこんなことのないように深く自分の心に誓う。

それと、猿などの奇形児のビデオなどで、私はいかほどの衝撃をうけた。人間にしても、身体障害者などを街で見ると、本心は避けてしまいう。でも、これからは社会福祉を考えていかな

ければならない。好きで身体障害者になったのではないから、決してばかにせず、助けていこうと思う。だからビデオの「大二郎」の世話をしていたあの夫人は、こういう精神をもっているのだろう。それに、動物愛護心やいろいろと良い性格のもち主なのではと思う。私もそういう人間性を持っている人になりたい。最近、私は「手話」に興味を持ち始めてきています。これからの人生の中で、それを勉強できる機会があったら良いと思ってます。そして、耳の不自由な人の役に立ちたいと、心から思っています。

#### 木崎 愛子

◆私は、保育のことをもっと知りたいと思っています。私は子供が好きです。自分も子供なのに子供が好きというのは少し変だけれど、好きなんです。将来そういう職業につきたいと思い、高校も、短大がついていて保育科がある高校を選びました。

子供の動作一つ一つが好きです。私は女に産まれてよかったと感じています。やはり、大変でも自分の子供を産んでみたいのです。そして、幼児ぎゃくたいなど絶対しない母親になりたいです。自分で作った命を大事にそだてたいです。それが無理なら、少しでも子供

のそばにいれるような職業につきたいです。今の地球は大人でもこわいような場所がたくさんあるから、いつかはきっと子供も安心して暮る地球にしたい。大人も子供も仲よく、幼児ぎゃくたいいなくなきたい。

最初から子供とのコミュニケーションがうまくとれる母親も父親もいないと思います。少しずつ少しずつ自分の子供のことがわかってくるわけで、何もわからない子供が泣いたくらいで殺してしまう大人は親失格だと思える。最初から殺そうと思って産む親はいないに決まっているから、そだてたいと思って産むのだから、何もわからない子供を殺すのだけはやめてほしいと思いました。

この先、結婚しても、しなくても、立派な大人になりたいです。

#### 星川 陽介

僕はある英語劇のサークルに入っていて、どちらかといえば、小さい子供とふれ合う機会が多かった。しかし、もともと人づきあいの苦手な僕は、あまり小さい子供達を楽しませる事はできないようだった。

今回の家庭科の授業内容は、根本からそれを解消できたように思う。小さい子（といっても赤ちゃんがほとんどだった）の感性、

そして心境……どう接すればよい、という答えは見つからなかったが、相手の気持をつかむきっかけにはなったのではないかと思う。

小さい子と接するのは、何故か僕の弟のほうがうまい。何故かと考えると、僕は父親を見て、弟は母親を見て育ったからかもしれない。僕の父親は、家事はもとより育児の方もからっきしなかった——気づかひだけは十分だったそうだが、僕の面倒だけはいつも見ていたそう。つまり僕は根っからの「お父さん子」になってしまった。半分は、そのせいかもしれない。

#### 鷹野 裕子

◆家庭科の授業の中で一番心に残ったことは、人間の体についてのビデオを見たことです。そのビデオの内容は、子供が生まれるまでの過程を細かく説明したものでした。

今の技術はとても進歩し、人間の体内の赤ちゃんを写し出したり、もっとすごいものは、受精をする場面なども鮮明に写し出した……とても驚きました。受精のときの精子の、あんなに一生懸命、数が少なくなりながらも卵子に向かっていている場面を見、大変、心を打たれました。ああ、私もこんなすばらしい過程を経て、生まれて来たんだ、と改めて感

心しました。何万もの命の中から、えりすぐられ、生まれて来たのが私なんだと思い、とても感動しました。それだからこそ、自分の人生を一生懸命、精一杯に生きて行かなくてはならないと、その時に教えられたような気がします。これからも色々な困難があるかもしれませんが、頑張っていきたいと思います。

#### 新井 綾

◆家庭科の授業で印象に残ったことといえば、保育の授業が、私には衝撃的でした。親の勝手で捨てられてしまった子供や障害を持つて生まれてきた子供のことを知るたびに、自分は幸せだなあと思いました。

私も、自分で新聞から切り抜いた記事をまとめている時に、生まれつき障害を持っている人でも、本当に一生懸命生きているんだなあと思いました。やはり、それも、周りの人々の支えがあってこそできるのではないかと思います。その人一人だけではとてもできることではないと思います。ですから私も、障害者の人達やお年寄りの人達に、親切にしてあげたいと思います。

それと、私が調べた記事の中に、最近の子供はすぐに骨が折れたりすることについて書かれていました。特にその現象は小学生に多

く、少し転んだだけで骨折してしまうそうです。私はその記事を読んでとても驚きました。私自身は骨折をしたことがないのでわかりませんが、やはり偏食が原因だと思えます。これからはもっと骨折しやすくなってしまうのではないのでしょうか。私も偏食をしやすいので気をつけたいと思います。

それと、ビデオで観たサルの赤ちゃんについてはあの大五郎は手も足もろくにないのに一生懸命に生きて、何事にも意欲的で感激しました。大五郎の様な奇形ザルも、人間が生み出してしまったのではないかと私は思います。

#### 小池 恵子

◆保育の授業をして、日本では障害をもった人が多いことを知り驚きました。それなのに、私達のまわりには障害をもった人達が少ないのは、特別あつかいをされ普通の人は違った生活をしているからだと思う。

でも、かわいそうだと同情することはよくないことだと思ふ。差別したりすることはいけないなどとみんな言うけど、かわいそうだと同情することも差別しているんじゃないかと思いました。

特別あつかいをしないで普通の人と同じあつかいをして、どうしても本人の力じゃでき

ないことを手助けしてあげればいいと思う。

体に害のある農薬を沢山使っているから障害をもった人が増えるんだと思う。農薬とかに反対している人もいるけど何とも思っていない人達の方が多いと思う。そんな人達が多いから悪い環境を作ってしまうんだと思う。

それから、東京に住んでいる人で、原発は必要だけど東京に作らないでいなかにつった方がいいと考えている人がいて、こういう人がもしいなかに住んでいたら、きっと原発なんていらなくて思うんじゃないかなと思いましたが。自分に害がなければいいなんて考えるなんて心が狭い人なんだと思った。

障害をもった人って、精神的に強い人じゃないかと思う。だって、私もしし障害をもっていたら、あまり精一杯生きることができるといふ自信がない。

私は、健康なんだから、どんなことがあっても強く生きなきゃなと思いました。

### 伊藤 妙子

一番家庭科で印象に残ったのは、最近やった保育の授業だと思う。あと、最後の授業にやったビデオと先生の話がいいと思った。被服とかも楽しいけど、私はもっと赤ちゃんの事とか、そういうのをたくさんしたかった。

保育の授業で感じた事は、自分の赤ちゃんを殺してしまったりするのはひどいと思った。

ちゃんと、育児がどのくらいたいへんか、生んでちゃんと立派に育てられるか、よく考えて生んでほしいと思った。

最後の授業のビデオはけっこうびっくりした。とくにどんなふうに排卵するのか、あのシーンをみて分かったし、おなかの中の赤ちゃんがどうゆうふうにもだっているかとか受精したときとか、けっこうあーゆうような感じなんだなっと思った。

今、十代の子で中絶してしまう子が多いから、もっと学校や家でも性教育をしてほしいと思う。そうして、すこしでも十代の子の絶対が少なくなればいいと思う。あと、きけいじとか生んだりするのはやだから薬とかのまないようにしてる。私もちゃんといひ人がみつかって、かわいい赤ちゃんを生んでちゃんと育ててあげたい。女子だけじゃなくてうちの学校は男子も保育をするけど、それ以上にもっと教えた方がいいと思う。もし生めないカップルに子供ができて中絶するとしても、責任は半分だし、傷つくのは女だから、そうゆう軽い大人の男になってはしくないの、もっと男子に教えた方がいいと思う。

住居のこととかはぜんぜんわからないでわかってしまった。調理実習は楽しかった。もっとたくさん料理を教えてほしかった。とにかく保育はとて勉強になったと思う。

### 一色 千穂

檜原中で授業をうけてきて、私は、他の学校とはちがった内容、特に生きていくうえで必要な知識としての保育などが勉強できてよかったと思います。そして、これからの将来の事など、世の中や自分のことも含めて考えるよい機会になったと思います。

男子は家庭科の内容を知らなくてよいというのは、古い考え方だと思います。これから社会で生きていくときに、常識として知っておかなければ、幼児ぎゃくたい、せっかんなんてことが後をたたなくなると思います。だから、その点では檜原中の方針は、とてもよいことだと思っています。

一つ疑問に思うことがあります。それはなぜ女子も技術科をやらないのかということですが。家庭科で共学があるのなら、技術科で共学があってもいいと思います。※

※昨年の三年生は、家庭科が中心で、一部別学でしたが、今年度は全面共学実施します。

(檜原中・常陸れい)



## 「湾岸戦争」



四月号のよびかけにに応じてお便りします。「十字路」で各地で小規模ながら、それなりの抗議行動があったことを知り、ほっとしました。

願わくば、わが生涯に二度とあってほしくないと思いつつ、昨年七月から十カ月間の予定で滞米中の私は、たまたまベルシャ湾岸戦争下もう一つの戦争当事国に暮らすことにな

りました。重苦しく憂鬱な日々でした。ともあれ戦争は終わり、マスコミ報道の限りでは、多くの人々はアメリカ人好みの「西部劇」仕立ての四十六年ぶりの（あの八月十五日以来の）完勝に酔っているようです。一月末頃からここサンフランシスコ・ベイエリアでも星条旗や勝利のシンボルの「黄色いリボン」などの「愛国グッズ」が氾濫しています。

その中で、私は戦争下のベイエリアのささやかな観察者たろうとしました。一月十七日（木）朝、新聞の「戦争」の大見出しを目にして、抗議行動のターゲットとなると目ざされていたサンフランシスコの連邦政府ビル前に駆けつけました。シャッターをきり、テープレコーダーを回しながら、十九日（土）の五、十万人規模の反戦デモ以降はハミリビデオを回しながら、家族連れの抗議行動の中にアメリカ社会の草の根民主主義の健全さを見いだして私は感動していました。同時に高見順日記や伊藤整の日記の「十二月八日」のくんだり思い出しながら、五十年前のわが日本を想って目頭を熱くしていました。一月二十六日（土）のデモを除いて、ジャーナリストを含め自分以外にそれぞれの現場で日本人を見いだせなかったこともひどく残念なことでした。

十九日の帰りの地下鉄の中で、夫とともにデモに参加した六十代とおぼしき女性は「今日はベトナム戦争下一番抗議が激しかった頃と同じくらい人が集まった。あの頃もこうやったんだ。自分たちは抗議のやり方を知っているんだ」と語ってくれました。二月十六日（土）のオークランドでの反戦デモと集会に向かう途中、駅で立ち話をした三十代の女性は、私の問いかけに「私は今日で開戦以来、こういう集会は十回目。毎朝、ラジオで今日の反戦集会の案内を聞いてから動機に出ている」「この国は爆弾を落としているのに、どうしてその旗を門前に掲げたりするんだらうね、私にはわからない」とつけ加えながら。この日の集会が、パークレイにあるその「民衆ラジオ」局の主催だったことを、私は会場で知りました。

少なくともベイエリアでは、平和的なデモや集会に対する警察の対応は、ただ見守るだけで（路上の座りこみは退去勧告のあと逮捕されますが）、日本の警察のような過度の規制の嫌らしさがありません。右翼の妨害がないことや武装したセクトの介入がないことも、アメリカでの抗議行動を、一般市民が家族連れで参加しやすく、気持ちのよいものに

しています。

次の小文は、一月二十五日付けで大学の担当クラスの学生宛に送ったメッセージです。

—もうひとつの戦争当事国にて—

湾岸戦争は日本ではどのように報道されていますか。私の手紙と、日本のニュースや新聞報道とを読み比べてもらえれば幸いです。(例えば朝日新聞の場合、アメリカ駐在の記者は十二名ですが、うち六名は首都のワシントン駐在で、五名がニューヨーク、西海岸はロサンゼルスに一名のみです。いかに日本のマス・メディアの情報が東海岸中心かうかがえますね)。

(1) プロテストの人々

湾岸戦争の勃発前後から、サンフランシスコ周辺では、全米で最も抗議行動が活発です。十九日の土曜日にはサンフランシスコで五〜十万人規模のデモが行われましたが、これは十五万人を集めた71年四月のベトナム反戦デモ以来の規模となりました。この日、全米的に呼びかけられたワシントンのデモが二万五千人、ロサンゼルス六千人、ボストンが三千人ということですから、サンフランシスコの動員力の大きさが目立ちます。十五・十六日にもそれぞれ一万人前後のデモが行われ

ました。パークレイでも十五日朝の高校生約五百人によるデモをはじめ何度かデモがありました。

二十一日のキング牧師の生誕記念日はカリフォルニア州では祝日でした。

この日パークレイ市では全米を代表するリベラルな市長とされる女性市長自らが、主催し司会する平和を祈る集会が開かれ、約五、六〇〇人ぐらいの市民が家族連れで参加しました。「平和を訴えるポスターをつくりましょう」というコーナーでは、幼児や大人がポスター・カラーで思い思いの絵を描いていました。四、五歳ぐらいの女子が横長の布にお花の絵をかいたあと、「*make blue sky, blue sky, blue sky.*」と言いながら、大きな筆で、空色の太い線をグイと何本も描いたのがとても印象的でした。その幼女にとって、また誰にとっても、青空ほど平和にふさわしい象徴はないでしょう。実際、この日の空もそうでしたが、澄みきった、まぶしいばかりの透명한青空は、カリフォルニアで最も美しいもののひとつです。

二十二日から春学期が開講したパークレイ校でも、初日に早速国際関係研究所の主催で、中東問題の連続シンポジウムの第一回が

開かれました。これから二月一杯毎週開かれる予定です。私が出席した「男性学」の院生用の授業でも教師のイニシアティブで、後半は戦争についての討論になりました。元社会学部長を発起人代表とする教官有志による全学的な「平和委員会」も組織され、三十一日には彼らの呼びかけで「ティーチ・アウト」という、授業時間に自分の担当の教室で、戦争について学生と討論を行ったり、全学的な討論集会をもつことが予定されています。こうした市長やキャンパスという教育の場での大学の教員有志のイニシアティブによる平和と反戦の訴えは、私の「日本的な常識」からはきわめて新鮮です。六十年・七十年代の紛争と激動の中で鍛えられてきたリベラリズムのあり方をまのあたりにする思いです。

アメリカでもマス・メディアの報道は、交通巡回のバトカーが火をつけられたり、若者による落書きや投石という暴力的な面を強調しがちですが、私が観察した限りでは抗議活動はおおむね平和的です。サンフランシスコでは十七日には約千名が逮捕されましたが、その多くは路上への座りこみの若者などでした。「*I'm here demanding PEACE instead of watching TV*」とこうプラカードをもつ

女性を開戦翌日の朝サンフランシスコの連邦ビル前のデモ行進の中でみつけたが、「いま、この場でまさに自分が抗議の声をあげている」という自己表明を重視している点や、楽器を奏でて踊り、絵を描く、「We shall overcome」などのプロテスト・ソングといったパフォーマンス志向の強さ、あまり組織化されていない文字どおり草の根の動員である点など、「新しい社会運動」の生きた標本を見る思いがします。家族や友人と連れだって、主催者のよびかけに応じて十万人近い人々が集まるといえるのは、サンフランシスコ・ベイエリアの草の根民主主義の力と伝統を示しているようです。

興味深いのは、これらの参加者は白人やスペイン系が多く、現在までのところ黒人の参加がきわめて少ないことです。またアジア系はさらに少なくほとんど見かけません。ふだん街ではかなり黒人やアジア系を見かけるのですが、この辺は政治文化の相違かもしれません。

米軍の30%は、全人口では8%に満たない黒人で占められています(50%は人口の20%を占めるスペイン系ということです)。このような背景があったか、黒人の間では、戦闘を

支持する声は白人の60%程度にとどまっています。後述のニューヨークタイムズの全米の世論調査では、白人の80%が武力行使を支持しているのに対して、黒人では47%にとどまっています。人種間のギャップが目立ちますが、抗議行動への参加者は、むしろ少ないのです。

また高校生や二十歳前後の学生は、元活動家やエコロジストの子弟や、このような志向をもつ教師の影響で参加しているケースが多いようです。戦争の長期化が徴兵制の復活をもたらずではないかという危機感も手伝わっているようです。

## (2)世論の多数派

ただし全米のレベルでは、二十二日発表のニューヨークタイムズの全米世論調査で、開戦直前に比べて、緒戦の成り行きもあってか、ブッシュ政権の開戦を支持する声が47%(十一―十三日)から75%(十七―二十日)へと急騰しています。二十五日付けのサンフランシスコ・クロニクルのベイエリアの住民を対象とする世論調査でも、武力行使を支持する声は全国レベルと同じく75%です(反対は20%)。ただしサンフランシスコ市民では、支持は59%に低下し、反対が34%にも達してい

ます。

そして、このところ米軍を支持する人々の行動や集会も増えてきたようです。

## (3)戦争の行方、戦後の行方

テキストの一節にあるように国家の道徳性は、この国では建国時以来の「美しい理念」のようです。それゆえベトナム戦争は非道徳的な戦いであったとして、この社会に深刻な傷跡を残しているのです。ベトナム戦争は国論を二分させ、経済を疲弊させ、大国アメリカの今日に至る凋落の引き金になりました。いま抗議者たちは、なぜアメリカ人がこの戦争で血を流さなければならぬのかを、第2のベトナム戦争化を恐れながら問い続けています。

武力行使を是認する立場でも、元国務長官のキンジャラー氏が強調するように、イラクが強くなりすぎることはもちろん、この戦争によってイラクが弱くなりすぎることも、中東の力の均衡を崩し、新たな火種をもたらすでしょう。

戦争そのものも難しい課題ですが、戦後処理はアメリカにとっても、中東諸国にとってもさらに難しい課題です。

開戦以来の円高ドル安傾向は、この戦争の

長期化がアメリカ経済にとって打撃となることを、経済専門家が冷徹に見ていることを示しているようです。

#### (4)そして日本

日本政府は九十億ドルの実質的な追加的戦費支出を決定しましたが、日本ではどんな議論が行われているのでしょうか。

ちょうど五十年前、日本人の多くは日本の敗北はないものと信じつつ（信じさせられつつ、いまのイラクと似ていますね）、政府は連合国との開戦に踏み切りました。それから五十年たって、日本人の多くはいまもなお「大勢」既成事実に弱く（裏返せば大勢に順応するのが得意で）、少数者として批判の声をあげ続けることが苦手なようです。

#### 君たち、若い諸君はどうでしょうか？

この手紙が、君たちの思考のひとつの刺激となれば幸いです。五月には帰国します。再会を楽しみに。

#### 追伸

湾岸戦争に反対する集会とデモは、今日二十六日もワシントンやサンフランシスコで行われました。サンフランシスコでは参加者は十九日よりさらにふくれあがり、十七万五千人にのぼりました（主催者側発表）。西ドイツ

やロンドン、日本でもデモが行われたようですが、サンフランシスコが最大規模だったことは確実のようです。今日は数名日本人の参加者も見かけました。韓国の学生グループや中国系の若者二グループも見つけました。パレスティナの解放を叫ぶパレスティナ人のデモ隊のすぐ後ろを、国際的な連帯を訴えるユダヤ人グループが行進するの印象的でした。

他方でテレビ・ニュースや新聞報道によれば、全米でもベイエリアの各地でも、軍を支持するデモや集会も、小規模ですが頻繁に行われているようです。近所の材木屋さんは、最近国旗を掲げています。国家への忠誠のアピールなのでしょう。

人種や民族、信条の多様性こそは、移民が作りあげてきた（先住民を減ぼしながらですが）アメリカの社会や大学の活力の源泉であり、他方で、今日に至るアメリカの社会問題の背景的要因でもあります。裏返せば、日本社会の言語的・民族的な相対的「同質性」は、日本社会や日本の大学の強さであるとともに脆弱さでもあるのです。

ただしアメリカが本当にインターナショナルな社会であるのかは、大いに疑問です。例

えば大事件があると、日本のテレビは、東西主要国の反応を報じますが、新聞は別として、今回の戦争の開戦についてアメリカのテレビは、イギリス政府の対応は報じましたが、湾岸の関係国を除いては、世界の主要国の反応に言及しませんでした（開戦前後は、テレビにかじりついていたのですが）。報道はアメリカ中心に著しく偏っているのです。

このようなアメリカ中心主義は、社会学界などでも、同様に感じられます。他方、日本社会や日本の学界は、世界の動向・時流というものによきにつけ悪しきにつけ過敏です。〈進んでいる——遅れている〉は、日本では重要なものさしですが（日本の「経済大国」化の秘訣の一つでしょう）、アメリカでは人々はもっと悠然と、自分の世界を追求しているようです。

ともあれ、描きかけのパレットの中の、何色も絞りだされ、混じり合わされた油絵の具のような、ガラガラした混沌と、それがつくりだす未完成の解放感、アメリカの大学の魅力のひとつです。

私は、十数年前の、君たちの年頃をもう一度やり直しているような思いで、キャンパスを歩き回っています。（'91年一月二十六日）

新しい・家庭科を・創るために

## 狩りと採集の時代へ

### タイム・トラベルする

栃谷 明子

(東京都練馬区関町北小学校)

「ぼくたちのずーっと前の人間は、どんなだったのだろう。どんなくらしをしていたのだろう」

色々想像をめぐらすのは、とても楽しい。そして、本当はどうだったのか、とっても知りたい。子供たちにとって、自分たちの歴史はとても興味のあることなのです。

これから紹介する授業は、私が「人間の歴史の授業を創る会」で出会い、学びながら行ったものです。「人間の歴史の授業」は、白井春男さんが構成されたもので、これについては、本号で青柳優子さんが書かれていますのでお読み下さい。ここに紹介する授業の内容は、青柳さんの実践をもとに、小学校六年生の社会科で行ったものです。

授業記録「狩りと採集の時代」より

“人類と石器”

「えーっ、これが人類の祖先なの？」

「ゴリラみたい」

「ずいぶん小さいねえ」

人類の祖先と言われる、アウストラロピテクスの実物大の絵をベニヤ板に貼った手づくりの模型を見たとき、子供たちは、驚きの声をあげました。そして、

「先生、手に何か持っているみたい」

「ひょっとして、あれ石器？」

アウストラロピテクスの手にしているものに気がつきました。

「石器」、これこそ、人類であることの証拠であり、ちゃんと、アウストラロピテクスの化石といっしょに発掘されているんだと聞いて、何百万年もの昔をさぐる学者の仕事のすごさに、私自身本当に驚かされました。

「石器」、これを人類は、どんなふうに使っていたのでしょうか。タイムライフ「人類百万年」からコピーした実物大の色々な石器を見て、何に使ったのだろう、と自由に想像してみました。例えばするどくとがった石は、

「やりみたいに木にくつつけて動物をさしたと思う」という意見に、「そうそう」とうれしそうにうなづく子が多数いた中で、

「あのね、けもの肉をひきちぎって、ちぎったやつをツンツンってやって血をなめる」

と、おもしろい考えを発表してくれたのは由香ちゃんです。すかさず、

「えーっ血っておいしいのかなあ」

「僕、前ケガしたときちよつとなめたら、何かしょっぱかったよ」

「きもち悪いこと言わないでよー」

と、子供たちの声がとびかいます。

小さくて丸い石は、

「なげて武器にする」

「ぼくもなげるっていうのは同じなんだけど、ヘビとか小さい動物にあてる」

など、とても具体的に考えてくれました。

「ボールのかわりにして遊ぶ」

さすが、野球の大好きな篤君の意見です。男の子たちから、

「ぼくもそう思った」「ぼくもだよ」

賛成の声があがって、ニコニコうれしそうです。

「でも石じゃあ指が痛いじゃない」

と、もつともな美夏ちゃんの疑問にも、

「あのね、原始人は、とても指がじゃうぶだったんだよ」と、すましています。

いつもユニークな考えを発表してみんなをびっくりさせる洋平君は、この時も、別の石器を指して言いました。

「これはね、手術に使ったと思う」

「えーっ手術？」

「そう、お腹を切ったりするの」

みんな大笑いですが、実際にそんなことは絶対なかったとは言えないのです。子供たちの自由な発想には本当に楽し、感心してしまいます。

この後、学者たちは、こんな風に考えているみたいだよ、と、かんとんに説明をしました。

「あっそれは、僕の考えと同じだ!!」

と大喜びしたり、「石器をつくるための台にした石」など、自分たちの考えにはなかったものが出ると、

「へえー、そんなことにも使ったのか」

と、感心したりしていました。

また、別の時間には、石器の作り方や、使いみちを調べている様子も、ビデオで見ました。石器の刃の部分を顕微鏡で調べて、どんなことに使ったのか推測しようとするところなど、科学者たちの熱心な研究の様子には、子供たちも私もひきつけられました。

「先生、科学者の人たちは、発くつしていて、これは石器だつて、どうしてわかるんだろう」

「そうだよ、ただの石かもしれないし」

子供たちからも色々な疑問が出されました。本当にそういうことを研究していくのは、とても根気と努力が必要なのだろうと思うと、すごい仕事だと思つづく思われました。

―石器づくり―

さて、いよいよ、自分たちで石器づくりをするのです。

「えっ、ぼくたちも作るの?」

「ヤッター」

「おもしろそう!!」

「先生、いつやるの? 早くやろうよ」

「そうね、じゃあ、みんなが材料の石をもってきたらやろう

ね」

―次の日の社会の時間―

「先生、全員そろったから、石器をつくらうよ」

さすがにこういう楽しそうなことは気合いのはいり方がちがいます。(他の宿題では、とてもこうはいきません)

さっそく中庭に出て、思い思いに作り始めました。カチンカチン：ゴリゴリ：

「あれー、こういう形にやりたいのに、うまくわれないよ」

「ビデオで見た時は、簡単にわれてたみたいなのに」

「この石、かたくて、全然われないよ」

なかなか思うようにはいかないようです。水道のところで水をジャージャー出しながら、わったところをといでいる子もいます。

「石器ができたなら、実際にお肉を切ってみようね」

と声をかけると、

「ヨーン、よく切れるヤツ作ってやるぞー」

と大張切りでした。そのうち、石を地面において、上から思いきり他の石をぶつけるとわれる、ということがわかり、われなかった子も、そんな方法で作ったり、一人一人、立派な石器ができました。

―つくった石器を使う―

次の日は、実際に肉を切ってみるのです。私が用意したの

は、豚と羊のスペアリブと、豚の肩の骨でした。肩の骨は、知り合いの肉屋さんに頼んで分けてもらったのですが、とても太くて大きく、びっくりしました。ビデオで、「原人たちは、石器で骨を割り、骨髓をとり出して食べていたらしい」と言っていたので、私たちもやってみることにしたのです。

「わあ、ぬるぬるしてる」

「ねえ、手がくさくなるよ」

「先生、昔の人って、本当にこんなの食べてたの」

「今の私たちだったら、絶対食べられないよね」

みんな、肉や骨と格闘して大さわぎでした。

特に豚の肩の骨は太くて、さすがに簡単には割れず、班の子供たちが力を合わせてやっと割れたようです。みんな汗だくになってやっていました。その様子を、子供たちが感想に書いてくれたので、次にのせます。

。石器を作る石をさがした時は、たいへんだった。道にすわりこみ、由香ちゃんとさがした。もっていった石はよくわれて思うようにいかなかった。でもわったところがとんがってお肉をきれそうするどいのができた。お肉を切ってみるとなかなか切れなくてこまってしまった。でもおもしろかった。原始人になった気分。

(たえちゃん)

。石器をつくって、ひつじ、ぶたのお肉を切りました。石で切るのは、とてもたいへんなので、ちょっときれめだけを入

れて、あとは手でひきさくんじやないのかなあ、と思いました。先生が骨の中に何か入っているというので、いっしょうけんめい班の人たちとほねをたたいて、たたいて、たたいて、たたいてわれたら、シーチキンのようなものが出てきました。ついでに血管が2本でてきました。骨をわるには苦労しました。だから、ほねをわるにも「ゴツ」があったんだと思います。ふつーの地面において石でたたいても、ぜんぜんわれませんでした。すべてすべってわれるどころか、けがをしてしまいます。だから、骨のはしとはしを石につけて、ほねのまん中を命中させてわっていたような気がします。むかしのゴリちゃん(アウストラロピテクス)たちは、石器なんかを作って、よくくらせたなあと思います。今のようにはうちょうなどもないし、まないたもない。お肉もスーパーで売っていない。しかもスーパーなんてなかったから、むかしの人が、今の人よりも、くらしのちえはあったと思います。

(かおりさん)

自分たちが苦労して石器をつくり、肉を切り、骨をわってみたことで、人類の祖先たちのすばらしい知恵や文化、そして苦労が感じられたのでしょ。

こうした授業は、一番初めにも書いたように、私一人でやれたものではありません。月二回の学習会の中で、授業の構造や内容、教材や教具の使い方を教わり、それ以前に、自分が



まず、この時代のことについて沢山勉強をする等、一つ一つ学んでいき、初めてできたことです。そしてやった授業記録について、色々なことを指摘してもらおうことで、課題を持つて次の授業に進んでいくこともできました。

このような学習会を持ちながら、「狩りと採集の時代」は、他にも火おこしの実習などもやり、楽しく授業が進められたのですが、その後、農業と牧畜の時代と国家の誕生の

授業は、そうはいきませんでした。農業をするようになった人間の生活がどのように変わったのか、そして、今までと全くちがった社会が生まれ、国家ができていったことを、子供たちに伝えられる授業をすることが私にはできませんでした。けれども、その後の近代、現代社会にもつながる国家をわかることはとても大切なことです。そこを課題としてまた勉強していきたいと考えています。

今夏のフォーラムのテーマは「出会いと歴史をつくるII―違いとつきあう―」。メインは同じタイトルのシンポジウムだ。シンポジストの一人、山下政一さんは、アジア保健研究所(AHI)の前事務局長。世界キリスト教協議会の代表でもあり、ここから推されてカンブチア厚生省顧問として、保健衛生計画を立案された方だ。

アジア・アフリカなど「南」の国々に、どういう援助が最も望まれるのか？日本が行っているのは、もしかしたら見当はずれ、善意の押しつけ、自己満足や申し開きのためのものになっているのでは？と後めたさを感じてきた私。山下さんは、大国のヒ

モツき援助、モノの援助ではアジアは自立できなないと痛感。岩村昇氏らの「キリスト教医師連盟」や財界を動かしてAHIを設立した。医療・保健・自治組織作りなどの中間技



フォーラムの  
シンポジスト

山下政一さん

術・情報「移民」をしたり、日本の中学・高校生や一般人がアジアのスラム、農村で共に過ごすスタディツアーも運営してこられた。まさにフォーラムのテーマにぴったりの方。

折よく上京されたチャンスにお会いした山下さんは、グレイの髪、日に焼けた顔、温厚なお人柄の中に精悍さを感じる。聞けば昭和ひとけたで、少年兵として上海航空隊に入り、無事生還された。戦後は日本福祉大で学ばれた後、YMCAボランティアとして国内各地で活動。一九六九年から七五年まで、南ベトナムで難民救済に当たり、「革命」後もボランティアとして現地に残ったという剛毅な方。

援助とは、「こちらの都合でして上げるものではなく、あちらが何を必要としているから出さすべき」が持論。四月から南山大学附属高校で「現代社会」を担当する。一クラスの人数を少なくし、実践を通して教え、相対評価はしない条件で引き受けたと。(半田)

新しい・家庭科を・創るために

## 「人間の歴史」の授業と私

青 柳 優 子

(市川市立市川第五中学校)

私が、故白井春男氏につくられた歴史教材「人間の歴史」と出会ってから十五年以上になります。

中学・高校のころ、歴史という教科は、最も嫌いな科目でした。見たことも、聞いたこともない昔の人の名前を覚えるなんて、何と無意味だろうと思っていました。ところが、今はその嫌いな科目を教え、教師を天職だと思っています。学生のころからは、とても考えられないことです。

この道を歩ききつかけになったのが、雑誌「ひと」、「教育ってなんだ」(斎藤茂男著、太田次郎社)、遠山啓氏と水道方式、板倉聖宣氏と仮説実験授業、そして白井春男氏と人間の歴史の授業……との出会いでした。授業をしたい……しかし、免許は社会科しかとれそうもない……と困って参加した

のが「社会科の授業を創る会」(「人間の歴史の授業を創る会」の前身)の合宿研究会でした。

それから十五年。結局「人間の歴史」とのつきあいが一番長くなってしまったのは、それまで受けてきた社会科教育に對して私が持っていた批判や疑問を明快にときあかし、私の現代史像をひっくり返してくれる力があつたからでした。

ただし、授業時数でいうと二百時間に及ぶ「人間の歴史」の体系全体が見えだしたのは、八年めをすぎたころからでしたから、つくられた白井氏自身が言われていたとおり、人間の歴史は、「パツとわかる」のではなく、「<sup>\*</sup>澱りのように少しずつたまり、いつしかそれがつながつてみえていく、そういう勉強なんだ」と思います。

「人間の歴史」の特徴は、生産と労働を中心にすえた歴史なのですが、もっといえば、人間の愚かさにより一方で歎息をつきながらも、こんなに人間とはすばらしいのかと感動してしまふ、その人間のすばらしさを中心にすえた人類史だと私は思っています。

民衆は権力者に対して抵抗運動を起こす。しかし、時代の制約の中でその抵抗は阻まれる。その敗北や、抵抗の精神がひきつがれ、次の時代の原動力をつくりだす——これは決して誤りではないものの、こうしたイメージでしか歴史を教わらなかった私は、そんな敗北の歴史なら、なぜ学ぶ意味があるのだろうかと思いました。私が中学生のころ、すでに学園紛争はおわり、三無主義がさかんにいわれていました。そのころと重なって私たちの未来にも、どうせ敗北しかないのかと、非常に反発を感じました。

民衆対権力者という図式が中心ではなく、人民の生産・労働が歴史をつくりだしているという「人間の歴史」は、どれだけ私を、ホッとさせたでしょう。「一粒の種から、自分が食べるために植物を育て、食糧をえる」。インドやタイや、東南アジアの何千年も前の人々が、その種を毎年毎年休まずに播き続け、中国の人、朝鮮の人がその種をたずさえて、海を渡り、それを、そのころの私たちの祖先が受けついで、また種をまき、育て方を次の世代に伝え……そうした気の遠く

なるほどの人々と歳月をへて、今、私が食べているお米がある。研究会で、野生種の写真を見たり本を読んだりして、イメージが私の頭の中につくられるようになってはじめて、「農業を発明した人類とは、なんとすばらしいのだろう」と感動しました。

十五年の会の活動の中で最も楽しい行事がフィールドワークでした。このフィールドワークの中で、今現在歴史をつくっていると思うような多くの方にお会いでき、私たちの祖先が生きていた証拠の品々にさわることもできました。この経験によって、「歴史ってどんなもの？」という私のイメージは、大幅に変えられていきました。

沖縄で米軍基地の反対運動をつづけておられる阿波根昌鴻さん、筑豊で炭鉱に働く人々や、廃坑後のその人々を書き続けられた上野英信さん、北海道で基地反対運動を続けておられる川瀬厄二さん、北海道で共に反対運動をしながら、授業をされている三宅信一さん、私は、会員のひとりとして、フィールドワークに参加しただけでしたが、そのお話に、どれだけ勇気づけられたことでしょう。

こうして、いつも見慣れている風景に、ハッと驚くようになりしました。山梨県でのフィールドワークでのこと、一見、平らにみえる水田地帯だが、水を回すために、水田一枚ずつわずかに傾斜がつき、次の田は、その前の田よりもわずかに

低くなっている。次の次の田は、またわずかに低く……能登の千枚田ほどではなくても、わずかず段差をつけなければ水田としての役をしない……このことに気がついた時、人間の英知と、その労働の量に仰天する思いでした。「そうか、こうやって歴史は今もつくられているし、私もつくっているのか」と十五年の間に頭の中にそういうイメージが、パイの皮のように何重にもつき重なっていく楽しさがありました。

自身が歴史を学ぶ楽しさを体験すればするほど、これを授業で伝えたいと強く思うようになりました。そして障害児学級、小学校の一、三、四年を担当したあと、五、六年を受け持って「人間の歴史」の授業をやるようになりました。

そして子どもたちと歴史をときあかすのは、ひとりで本を読んで勉強してきた時より、何百倍、何千倍も、楽しいことを知りました。子どもたちが質問をしたり、推論したりすることは、ほとんど科学者も解決できない難問だったり、大論文のテーマだったりします。ケストナーの「飛ぶ教室」のように、時間と空間をとびこえられるなら、その時代の人々の様子を見てみたいと私自身が思いました。こんな時、「授業は最高！ これさえあれば、他のものは何もいらぬい」そんな気分になります。「人間の歴史」の授業の中で生まれた子どもたちの言葉は、私にとって、キラキラ光る宝石のよう

す。

そんな宝物が手のひらからこぼれおちるほど、たくさんになりました。そのいくつかをご紹介します。

・五年生の光安さん（北京原人の周口店の発掘を勉強して）

「私は科学者の人たちはすごい人たちだと思いました。歴史をどんどんといってしまうので、まだ掘っていないところも、はやくかいけつしてほしいと思います」

・五年生の森君（石器をつくってみて）

「ぼくは、なんで生まれてきて、さるからうまれなかったんだろう。ぼくは石器をつくって、どうして（オーストラロピテクスは）石器なんかつくれてしまっただろう」

・六年生の原田君（穀物の余剰をどう使うかと考えて）

「ぼくが（古代国家のような国の）王様だったら、人を雇う。お城や家をつくる人や、パンをつくる人」

・六年生の高原君（日中戦争を勉強した時、安土桃山時代の朝鮮侵略を思い出して）

「秀吉と同じだ」

子どもたちは、私を飛びこえて、考古学者や、歴史学者、そして、祖先の人々と、直接対話してしまうのです。ひとりの個性によって、私には想像のつかない豊かな考え方が何十種類も出てきます。「人間の歴史」の授業をするようになってから、人間に対して、私は畏敬の念を深くもつよう

になりました。

昨年四月、小学校から中学校へと引っ越してきました。受験という壁の中で実現が難しいといわれていた楽しい歴史の勉強を中学生とぜひいっしょにしたいと思い、挑戦することになりました。

次にご紹介するのは、甘えんぼで自分勝手、しかし愛すべき中学生たちと、一年間悪戦苦闘した歴史の授業のほんの一部です。近現代史では、まず産業革命を、実習も含めていねいに勉強します(七時間)。そのあと、イギリスが産業革命でつくりだした大量な綿布をどうしたのか……ということとで、世界市場、植民地、戦争、などについて学びます。この中のイギリスとインドの関係についての授業を、簡単に紹介します。

私「イギリスは大量生産でつくりだした綿布をどこに売ったと思う?」

生徒たち「お店」「問屋だよ」「働いている人」「他の国?」私「そう、まず、問屋にもって行って、それから小売りにするでしょう。買う人はイギリスの人だよ。大量につくったのだから、余るよね。それを、外国にも売ったでしょう。どこに売ったと思う?」

生徒たち「フランス」「アメリカ」「ドイツ」「日本」「アフ

リカ」……自分のイメージで、あるいはあてずっぽうで国名を言います。そこで、このあと、一時間かけてイギリス綿布輸出先のグラフを描きました。

私「この間グラフを描いて、気がついたことをいろいろ言ってもらいました。イギリスが一番多く綿布を輸出していたのが、インドだったよね。じゃあ問題です。

〈問い イギリスの布を大量に買いこんだインドは、⑦豊かになった ④貧しくなった〉

さてどちらでしょう。それぞれ賛成の人、手を挙げてー。

生徒たち「⑦だよ」「④に決まってるよ」

私「答えは④。貧しくなったです。では、

〈問い なぜインドは貧しくなったのでしょうか〉

これは相当むずかしい問題だし、予想で考えられる範囲をこえているので、ほとんどの中学生たちはお手上げでしたが、中には「布を買いすぎてお金を使いすぎてしまった」と、ずばり要点をとらえた男の子の意見もありました。そこで、私の方から三つの点を説明しました。

①まずイギリス産業革命以前は、インドは世界の大綿布輸出国だったこと。正確な資料は手に入りませんでした。が、十八世紀はじめごろ、インド国内でおよそ十億ヤード消費し、外国に五億ヤードほど輸出していただろうという推計を示しました。



蒸気機関を動かす子どもたち

②ところが、イギリスは、このインドの国内市場に目をつけ、職人の手を切りとる……などして、インド手工業をつぶしながら無理矢理イギリスの工業製品を買わせたこと。白井さんが参考にした、『産業革命の群像』（角山栄著・清水書院）から抜粋して読みました。

③インドの綿布の手工業をイギリスがつぶしてしまったことから、インドでは大量の失業者・餓死者が出たこと。白井さん作成の棒グラフをお借りして見せました。

ここで一時間の授業は終わりましたが、このあと「インドの次にイギリスが売りこもうとし

たのはどこか」「アヘン戦争はなぜ起こったか」「日本はこれをどう見ていたか」と授業は続きます。そこまで終わった時の佐々木さんの感想です。

「みんな一言で産業革命といっているけれど、この革命の中には『ぎっしり』といういろいろなことがつまっていると思います。綿工場で働く人も、低賃金、長時間労働で年少労働者の出現のことや、蒸気機関車のようなすばらしいものを作ってしまった、それによって産業が成功した国や失敗した国、さまざまで、国の中でも、色々な動きがあったなあと思いました」。

この感想を読んで、私は大変うれしくなりました。産業革命をへて大量生産の技術をうみだした人類の知恵に驚きながら、一方でその大量生産が、いろいろな国を巻きこんでいく悲劇、そのどちらも、実には的確にとらえてくれています。私が驚いたこと、何とひどいと嘆いたことが、そのまま中学生に伝わっているように思いました。これから中学で人間の歴史の授業を続けていくと、どんなことが待ち受けているのか、楽しみです。こんな仕事をずっと続けていくつもりです。（なお、一部しかご紹介できなかった近現代の授業については、『産業革命』から『メイドイン東南アジア』までの授業を一冊に納めた『近現代の授業』（授業を創る社）を発刊しましたので、ぜひご一読ください）。

新しい・家庭科を・創るために

少女たちの

セルフイメージを解き放つために

竹内 未希代

(東海大学第三高等学校)

芹沢俊介氏によれば、子どもは三重の意味で選択の余地のない受身な存在として生まれてくるという。(①生きる②親

③性と体) おとなになるためには、思春期にそのことを改めて問い直し、その、三重の不自由さが、実は自分が在ることの原点であるというように、子ども自身で、能動的に選び直してゆかなくてはならないし、親(おとな)は、子どもが選

び直しをする機会を作ってやらなくてはならないといっている。(『現代〈子ども〉暴力論』大和書房)

選

選び直しに失敗したらどうなるだろうか。芹沢氏は失敗例として、①生きる↓自殺やシンナー吸飲、②親↓家庭内暴力や親殺し、③性と体↓拒食症や過食症、をあげている。

ここでは、少女たちが「性と体」を受容できるようになっ

てはしくて試みた「月経観」の授業について述べたい。

●女であることを受容すること

私は、音楽の教師だが、性教育をきっかけとして、家庭一般(一年女子二単位)を臨免で教え始めて六年になる。私自身、母性を持つ体を受容し、女という性を肯定して、男に対する「ひけめ」、表情やしぐさに染み付いた「へつらい」を洗い流すことに二十五年もかかった。

思春期から二十五年間、女であることに対し、あきらめと反発の間を揺れ動いてきた。拒食にも過食にも至らなかったが、あれは、「つっぱり・あきらめ症候群」としか名づけようのないような病이었다。

私の病いも、父権社会の女全体が抱えていた犠牲だったか

ら、囲りのおとなから癒しへの援助をされることはなく、むしろ適応するようにしむけられた。

自分のどこが病んでいたのだろうか。自己像<sup>セルフイメージ</sup>を図にしてみた。図1の2層めがNOでぐらぐらしていた。それなのに私の努力は4層、5層めに向けられていた。性格や外見、特技を磨けば、もっと自信がもてると信じて。でも、何を磨いても積みあげても、土台の弱さは致命的で、私はぐらつきつづけた。

2層がOKになり土台が固まった時、自信の持てない4層、5層へのこだわりが消えた。私にとって本当のパワーアップは、2層「性と体」の肯定からだった。

●そして、少女たちは……

少女たちは「性と体」をどのように受け止めているのだろうか。東海大三高の自立度調査より、「性受容」の数字をあげてみよう。

「今の性でよい」40%（男子77%）「今の性はいや」10%（男子0.5%）「どちらとも言えない」50%（男子19.5%）であり、「女で良かった」と言いきれない少女は60%（男子19.5%）と、半数を越えている。

「女でよかった」と言いきれない理由を、多い順に書くと、月経（51%）、ダブルスタンダー



図1 当時の自己像の構造



図2 囲いこまれた少女のセルフイメージ

ド、経済的自立の困難さ、不平等、性分業、出産、となっている。一見元氣少女に見える彼女たちも、「性と体」の選び直しでやはり、つまづいていた。

少女たちの置かれている状況を図にしてみた。（図2）  
底辺は体。体は心を支える形。少女たちの身体観は月経の存在故に不安である。沼地のように不安定きわまりない土台の上で、年齢と共にふりかかってくる現実、差別や分業、商品化や外見重視と、どれだけの少女が闘い続ける気概を持てるだろうか。

あきらめた少女は合理化する。「男は大変、女でよかった」男に愛される自分作り。朝シャン、ダイエット、「わかんない」、へつらう少女は、不本意な性交さえ断れない。



反発する少女も、We'90年2・3月号で宮淑子氏が指摘したように、「女の将来知れたもの」をキーワードに、「今楽しまなくちゃ」の非行、「おとなの女になりたくない」の摂食障害、「並の女になるものか」の女性性の否定、などの中で自分らしさを失ってゆく。

あきらめと反発をくりかえしながら、男社会に身を合わせてきた女たち。少女たちに同様の囲いへの道を歩ませたくない。

### ●癒しは体から

昨年度は、最後の4時間を「女性について考える」にあてた。図2の説明をした時、少女たちの表情は複雑だった。「私もうすうす、こう思っていた」「暗くなっちゃう、知らない方が良かった」「ワナだ」「先生、どうにかできないの?」「囲いから出たいね、どこから手をつけようか?」と私。あきらめたのか無表情の子、考える表情の子、それぞれだ。「下! 下からやろう。上は世の中のことだからだめだけど、下(月経のある体)だったら自分のことだから、何とかかなるよ」一人が叫ぶように言った。

### ●月経観をゆさぶろう

少女たちの月経観を、ミニ調査で調べてみた。「自然で大切なことはわかっているが、何となくうしろめたくて、隠して無いふりをしている」が大多数である。それは、ナプキン

をトイレへ持ってゆく時の工夫や気遣いに、はっきり現れていた。私たち親の世代と、ほとんど変っていない。

授業は、ミニ調査の結果を読み、皆が隠そうと気を使っていることを知らせた。「私だけじゃない、他の人もそうだったんだ」。周辺の子とそんな会話を交す。親密でなかなか雰囲気になってくる。実態把握や雰囲気作りにミニ調査は役立つ。

「あたりまえってわかっているのに、どうして隠すんだろう」「月経のどういう所が、私たちを隠したい気持ちにさせるか」出た意見をまとめると二つになる。

(1)出る所が性器だから。(2)出るのが血だから。

「血について考えよう。血に何を感じ何を連想するか」

(A)殺人、ケガ、事故→恐ろしい、不気味、きたない

(B)献血、輸血、血統→生命、大切、尊い、神聖

人が心を強くゆさぶられる反応を「血への畏れ」とまとめた。『私たちの月経観は「血への畏れ」の暗い方(A)の影響だね。(B)の影響を受ければどんな月経観になるだろう。今日は月経観の歴史を勉強しよう。ずっと暗い方だったのか考えてみよう』

### ●月経観の歴史

縄文時代を説明し、美しい土偶の写真から、縄文の月経観を想像させる。病気やケガではなく、一定年齢に達すると一定間隔で流れる、理由のわからない血。女の腹や腰が痛み感

性が鋭くなる時、新しい命を産み出す所から流れる血。あの女は満月のたびに、この女は新月のたびに。月の満ち欠けに呼応して流れる血。月の満ち欠けのめぐりは、潮の満ち引き、季節の移り変り、この世の秩序を司るように思えただろう。

『こんな時代の「血への畏れ」は、(A)(B)どちらだろうか』

この辺りで、少女たちの表情が、何か感じ取ったように明るくなる。月経観が揺らぎ始めた。まだ言葉にはならない。「神聖の方だね。女の体に神さまが宿ったって思っただろうね」。少し待って、言い添える。「痛みや出血は神との性交、感情の高ぶりは神の乗りうつり。つまり女は神に近い存在、女に霊力があると考えたんだ。卑弥呼につながるね」。

高柳美知子さんの『美しい性を生きる』（学習の友社）を読んで「不浄の根元Ⅱ月経」という昭和（戦中）の月経観を知る。「かわいそう」と、ショックを受ける子、「わかる所あるよ」と自分の感じ方に通じるものを発見した子。

「縄文の神の宿り、昭和の不浄、天と地ほど違う月経観だね。この間にどんな歴史の流れがあったんだろう」。この問いを解くため、手に入った資料をもとに、その時代の文化や男女の力関係をからめて、月経観の変遷をたどる。

学習マンガを使い、古事記（叔母ヤマトヒメと甥ヤマトタケルの関係）、魏史倭人伝（姉卑弥呼と弟の関係）から、霊力をもって指示し血縁の男を守る女と、指示を受け武力で実行

する男、両者の力の関係を知る。当時の月経観が不浄ではなかったことを、ヤマトタケルとミヤズヒメの歌を読んで知る。結婚の宴でヒメの衣についた経血のシミを、ヤマトタケルは月に見たてて詠む。月を「あら玉の月は来経ゆく」と待っていた時間にかけて、機知溢れる歌を返すミヤズヒメ。月経のネーミングの由来だ。

「みんなだったらこんな時どうする」と聞く。「恥ずかしくて逃げ出す」「落ちついて歌なんか詠めないよ」と生徒。「二人は結婚しました。その日性交したでしょうか」という私の質問に、性交と月経のイメージを重ねて考えている様子で、誰も口を開かない。指名する。「しない」の連続。「二人は性交しました。この時代の月経は不浄じゃなかったんだよ。だからヒメもうろたえなかったのかもしれないね」。

外来文化の影響を紹介する。律令制による政治は、女の霊力による政治決定を退けた。仏教は、女を生まれながらに悪（五障、血盆経）とした。儒教は、女は男に従うべし（三従）とした。婿取り婚から嫁入り婚へ、男女均分相続から女子相続制限へと、女は弱者になって行った。それに伴って、「血への畏れ」は神聖より不浄が強調されていったことを「月経小屋」の存在などから説明。

「私たちのひけめは、この歴史を引きずっていたんだ、なんかすっきりして肩のあたりが軽くなった気分」（感想文より）

# ●肯定的な月経観は女の生き方を支える

「女性性」を肯定し、ジャーナリストを夢みて日記や小説を綴ったアンネ・フランク、東京女子マラソンで、経血で足を染めて完走したワインホルト、不浄の性を美しい性と呼び直すことができた高柳美知子。彼女たちの姿から、「肯定的な月経観は女の積極的な生き方を支える」ことを伝えたかった。ワインホルトの写真は、強烈なインパクトを少女たちに与えたようだ。より客観的に自分の月経観を見つめ直すことにつながったのではないか。

月経を隠す理由を考える授業は終わった。もう一つの理由「外性器」を考える授業をこの後行い、「女性性の受容」についてレポートを書かせた。少女たちの感想を紹介できなくて残念だが、これほど力のこもった感想がよせられた授業、あれほど真剣に集中し、ナマの表情を見せてくれた授業は今までなかった。

それだけに、歴史資料の提示があまりに主観的、感性的で、客観性に欠けはしないか、本当に少女たちのこれから生きる力になり得ているのか、もしかして彼女たちは、イメージに働きかけようとする私の語りのにせられてしまっていないか。また、ミニ調査で8割を越えた月経痛について、彼女たちに、その痛みを受け入れ納得させる、満足な説明ができていないこと、等々反省や課題は多い。

「We」創刊十年！ この歳月に、著者が  
出会い、思い、考えてきたことの集大成  
ウィ書房が贈る最新刊！

半田たつ子

## 木犀の 白うさぎ

### 目次

- I くらしの中で
- II 人とかかわりの中で
- III 女と男
- IV 教育をめぐる
- V 私、そして家族
- VI いのちを考える

医師も驚く生命力で病魔と闘ってきた夫が、遂に力尽きたのが九月三十日。お通夜、お葬式をすませ、家に帰ろうとした時、木犀の香を聞いたのです。  
夫を見送り、「We」が創刊十年を迎えるという区切りの時、まとめる本には「木犀」を名乗らせたいと思いました。こうして、いまに区切りをつけ、次の一步を踏み出したいと願ったのです。

定価一八〇〇円（税込） 千三二〇円

（「はじめに」より）

ご注文は最寄りの書店に。〈地方小出版流通センター〉  
ウィ書房に直接お申し込みの場合、単行本は、送料をお  
断りの上、郵送で。〈書名明記〉

182 東京都調布市西つづじ丘2-25-14 ㉞ 03(326)1380

ウィ書房

振替口座 東京6-59867

## 今月の 読書から



稲 邑 恭 子

G・ヘンドリックス十ラッセル・ウィルズ  
／手塚郁恵訳

『セントリーング・ブック』

春秋社刊

セントリーングとは「自分の中に中心を持つ」ための技法のこと。サイコシンセシスと同様、米国のトランスパーソナル心理学の流れから出てきた、教育へのアプローチの一つで、本書は、大人と子どもが共に使えるテキストになっており、ヨガ・氣功などの手法と重なるボディワーク、マレー島に住むセノイ人の夢のワーク、お話の読み聞かせなど、イメージを豊かに駆使した実習がちりばめられ、読むだけでも楽しい。実習の中には、大人から否定的なエネルギーを浴びたときに「かわす」方法まであって、思わず感心してしまう。

ジョーン・ポリセンコ／伊東博訳  
『からだに聞いて こころを調える』  
誠信書房刊

著者は、ニューイングランド・デュークネス病院付属「マイインド／ボディクリニク」の所長。細胞生物学者で、「精神神経免疫学」のバイオニアでありながら、サイコセラピスト。ヨガと瞑想のインストラクターでもある。〈医師の診察を求めている人の75%は、結局ひとりでなような病気であるか、あるいは不安やストレスからくるものだ〉という最近の研究の成果を前提に組まれた、彼女のクリニクの十週間のプログラムに沿って書かれたこの本は、こころと体の相互作用をやさしく解き明かしながら、簡単な呼吸法・瞑想法も折り込み、東洋と西洋の知恵を結集した私たちの、深い「気づき」と「癒し」に満ちた本になっている。

医師の診察・治療が必要と思われるときは病院に紹介してゆく、当クリニックの在り方は、心と体をトータルに診てゆく治療のありかたとして注目に値する。また、終章の、エイズに冒された青年との対話は、死にゆく人に、どうやって寄り添っていけるのか、を浮かびあがらせて、読む人の心を深く揺るがす。

G・ポーター／上出洋介訳・平松園枝監修  
『自己治癒力の医学』  
光文社 カッパサイエンス

脳腫瘍になり、現代医学から見放された九歳の少年。イメージ療法や、不安を取り除きリラックスさせる瞑想などによって、彼が自分の持つ本来の治療力をよみがえらせ、回復に至るまでの過程を描く。

片山洋次郎  
『氣と身体』

日本エディタースクール出版部刊

人間の体を読むのが面白い。人を見ていると、自分がわかってくる。体を見ていると、全然関係ないことがみえてくるのも面白い、と語る著者。野口晴哉氏の「整体」に深く影響を受けながら、それをも相対化してしまった醒めた切り口が、新鮮で、ハッとさせられる。

エバ・フュージット／平松園枝訳  
『やさしいサイコシンセシス教育』  
春秋社（近刊）

米国の、なす術がないと言われた「荒れた学校」に赴任し、サイコシンセシスを導入しようとした一人の教師の奮戦記。子どもたちが次第に自尊感情を取り戻してゆく過程が生き生きと描かれている。

# 荒野のバラ

田中裕一

「久しぶりだぜ、八代<sup>やつしろ</sup>！」

——ほんとうは燃えているのだ——

## 1 追いつめられた子供たち

子供たちは疲れている。飢えている。だから荒れている。子供が休息を求めているのにテストを、優しさを求めているのに規則と体罰を、愛と信頼を求めているのに管理と不信を大人は用意する。パンを求める者に石を、希望を求める者に絶望を、日本の多くの学校が与えてきた。子供たちはすばらしい可能性を眠りこませたまま、暴発寸前の飽和状態を切りぬける為に、抵抗するか、良い子になりますかするが、内気な子、生真面目な子・無器用な子はそれができないから諦める。学校が変わらなければ子供が変わるしかないから、中退・不登校が続出する。待つことさえできない大人には、それが

またがまんならない。資本の論理が貫徹するにつれ、すべてが商品化され、計量化され、手段化され、ランキングされる。生徒まで偏差値で、学校は国公立入学者数で評価される。体育教師が、ふと「優勝と準優勝では天国と地獄の違い」と洩らした。スポーツ界まで、寡占から独占へ優勝劣敗の自由経済が貫徹する。弱者は捨てられるしかない。こうして人と人、人と自然の昔ながらの絆は断たれ、共同体の解体は進む。

子供本来のひたむきな純粹さは、そんなシステムの中で色褪せ、「ダサイ」「ウザッたい」と虚仮にされる。口を開けば「二十一世紀」「国際化」を言うが、校門で生徒を殺したり、入試採点を水増ししたり、丸刈りのみが正統とされたり、退廃は極まっている。校門で生徒を殺した校長が、「あと10分早ければ」と言ったり、入試不正校の教頭が、会議で「表に出れば校長の首がとぶ」と発言、学年主任は「拒否すれば昇進に響くと思った」、逮捕された校長は「大物と見られたかった」、それに県議・県教委絡みとあつては、語るに落ちた「恥の構造」だ。

かつて「港のほとり並び立つ 科学の誇る工場は 平和を守る日本の 希望の希望の光です」と校歌を歌う四日市の子供たちの中に公害認定喘息患者もいた。窓を開ければ昭石・中電火力・石原産業が圧倒する谷間で、子供たちは一日五回うがいをし、エアクリナーのフル回転する教室で生きてい

た。市教委が「公害に負けない体力づくり」を提唱した上、当時の体育の指導事項に「悪い空気は吸わないこと」と書いたのも驚きだ。

かくて、小中の三人が喘息で死んだ。小四の谷田尚子さんは転地療養も空しく、中三のK・Mさんは苦悩の自殺であった。これが、この国の行政の、子供たちに対する仕打ちなのである。

## 2 体感できる教育を

「落葉松<sup>カハツマツ</sup>」という白秋の詩を国語で教える。だが奇妙なことに、教師も生徒も誰も落葉松を見たことがない。日本中部亜高山帯の落葉松は、九州には一本の自生もない。落葉松の芽立ちの、あの柔らかな浅緑の美しさ、落葉の、あの黄味を帯びた典雅な淋しさを知らねば、「しみじみと見き」「淋しかり



校内のバピルスで生徒たちが作ったバピルス紙。古代エジプトの製法によった。象形文字は葦の茎のペンで書かれている。

けり」の詩句は理解できまい。おかしい「知育」は実物不在のまま受験用に進む。私は各教科の教科書の中に登場する約七十種の植物を集め、校内に教材植物園を作った。そこで落葉松の新芽・落葉は見られる。だが詩のように「林を出て」「林に入りぬ」とはいかない。そこで軽井沢の現地の写真パネルを用意し、授業で使ってもらった。さらに木下利玄の牡丹の歌や近藤芳美の泰山木の歌等に合わせ、英語ではドッグ・ウッド（ハナミズキ）やメイフラワーに合わせ、理科では光合成や細胞観察に合わせ、社会では商品作物やプランテーション作物に合わせて、関係植物を栽植した。音楽では、「早春譜」の〈葦は角ぐむ〉「夏の思い出」の〈石楠花色にたそがれる〉が現物で体験できるよう、からたち、うつぎ、うのはな、タネンバウム、ドイトウヒ（樅の木）、リンデンバウム、ぼだいじゅ、ロサ・カニナ（野ばら）等を栽植、エーデルワイスはスイス持ち帰りの種子を育て押し花とした。社会科用のパイナップルはよく実った。社会の教生の一人は、その実が大根のように地中に実り、実の上の葉だけ地上に出ると思っていた。実物を見て衝撃を受けているのを見た私が衝撃を受けた。コーヒーもブルーマウンティンが毎年よく実った。校内に栽培しているバピルスの古代紙制作実習は希望者が多くて困ったが、よくできた。

母の日、父の日の為に、校門のハハコグサやチチコグサを



在校生に見送られる卒業生の胸にはランのコサージュ  
＝熊本市千葉城町の跡園中で



校内で実ったブルー  
マウンティンコーヒー

ーションより、それがどれほど喜ばれたことか。その反応に子供たちが驚いた位である。「しっかりと勉強するから、元気を出していつまでも長生きして」とか、「もっと体を大切に」とか、なかなか泣かせるメッセージだった。

卒業の時は、校内の温室（職員作業で作成）で育てたデンドロビニウムの花で在校生がコサージュを造り、全卒業生と担任の胸に着ける。卒業生たちは、本校で学んだしるしのコサージュを胸に（写真は3・14日付朝日新聞より）、誇り高く巣立っていった。もちろん生徒会で、丸坊主規則を廃止した誇りも胸に、である。「荒れる中学」とはほど遠い活力にみちた学校造りは、絵に描いた夢ではない。掛け声だけの政治

的野心に支えられた「教育改革」は、荒廃を深めるだけだ。耕すべき荒野は、足もとに幾らでもある。そして改革のキーもまた足もとの荒野にこそ探すべきものだろう。

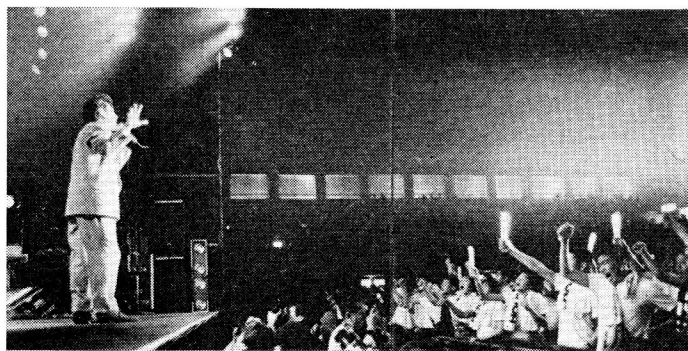
### 3 燃えるフランス

「僕等の内面はとても離ればなれになっている。胸にフランスを抱きながら……」とシュベルヴィエルは歌う。だが昨年十月から約一か月、フランスの高校生は燃えた。大学入試資格検定合格者は約半分、三分の一は進学断念に至る。校舎や教師の不足・暴力がひどく、昨年十月の女生徒への暴行が抗議デモのきっかけだった。そして十一月十日の全国行動では、教師父母も参加し、パリだけでもバスチーユ広場は二十万人で埋められた。警察官労組までデモの方法を助言したと報じられている。ミッテラン大統領は20人程の学生代表とエリゼ宮で会い、「すべての要求が受け入れ可能」とした。フランス全土で数十万、約一か月続いた学生デモはロカール首相を動かし、45億フラン（千二百億円）の緊急予算を計上させた上、ジョスパン教育相はカリキュラム再検討に着手、本年九月の新学期より職業高は25人、普通高は30人を定員とし、文書・相談事務に575人を増員、五か年計画の教員拡充、課外文化活動費5千万フラン、生活援助資金2億フランを約束した。フランスの若者たちは、大人たちの陥った混沌の壁を、自らの現実認識と行動で突破した。この時日本は、中退や不

登校が増大する中で、「即位の礼」や「紀子さまブーム」に現つをぬかしていた。そして校門での生徒の圧死、入試採点の水増し―何と貧相な認識であろうか。たかだか一人の教授が何らかの正常化をしようすると、卒業予定者の23%、257人が留年し、就職も取り消され、その発表に学生たちが泣きぐずれたり、父母が訴訟をといきまく体たらくなのである。

#### 4 「久しぶりだぜ、八代」

だが日本の若者たちも捨てたものじゃない。昨年十一月、私たちは子供の権利条約の為の「子供フェスティバル」を企画し、県内高校生の自由サークル「放題の会」（代表岩崎洋美・高三）を実行委員会としてフォローし、弁護士を交えたパネル「権利条約スーパードッグ」、「劇」、「ロックバンドコンサート」で大成功を収めた。劇は高二の松下真己君が台本を書き、高校生たちで上演した。筋は、「バウンド・ドッグ」ロックコンサートを楽しむにしていた中学生たちが学校から禁止され、署名運動を展開したが、禁止の壁に阻まれ絶望する筋立てで、題して“Bound Dog”。



(Friday 91・4・19より)

「『バウンドドッグ』―しばらくつけられた犬―そのまま私達のことじゃない!」(第六場)  
この劇は現実を下敷きになっているプロテストである。九〇年七月二十九日、八代市の市制50周年で市が企画した「バウンド・ドッグ」ロックコンサートに、中学校長会が中学生の入場を禁止した。理由は、終演が遅い、料金が低い、不良の音楽(―)等だった。中学生たちは街頭へ出た。不当を訴えた運動に二千名の市民が署名した。教育長交渉もしたが、「校長と話せ」の一点張り。十校の中学生は、校外私生活に干渉され、権利条約にいう意見表明権まで無視された。ハウンド・ドッグのリーダー大友康平氏らはこれに痛く心を打たれ、本年三月二十九日の八代再来演を実現させた。今度は十九時終演の無料。学校はもはや制止の手段を失った。大友氏は開演で呼びかけた。「久しぶりだぜ、八代。卒業おめでとう!」二千六百人の中学生たちは、卒業証書を片手にかざし、総立ちで熱唱に応えた。彼らは、自ら掴んだこの興奮と感動を一生忘れないだろう



# 家族と家庭科

## ● 酒井はるみ

### 小学校「家庭」領域は

#### 徳育か？

永芳らの『教科書検定総覧小学校篇』によると、小学校家庭科ではじめての教科書が出たのは一九六一年度から使用のもので、前年には十社十種類が刊行された。この刊行までに、学習指導要領は二度の改訂を経ているので、この間の経過を手短かにまとめておこう。

一九五六年、'47年の指導要領（試案）がはじめて改訂された。この間、家庭科の存廃が問題となり、他教科は指導要領改訂が行われたのに、家庭科は、「小学校における家庭生活指導の手びき」（'51年）に組みこむ形で教科としての存続をはかったという（常見育男『家庭科教育史』）。そして'56年改訂に至る。ここでは、教科の目標1〜4のうち「1、家庭の

構造と機能の概要を知り、家庭生活が個人および社会に対してもつ意義を理解して、家庭を構成する一員としての責任を自覚し、進んでそれを果そうとする。2、家庭における人間関係に適応するために必要な態度や行動を習得し、人間尊重の立場から、互に敬愛し、力を合わせて、明るく、あたたかい家庭生活を営もうとする」が家族関係の領域で、内容量も位置付けも大きかった。

この改訂では「家庭生活についての日常的な指導は、必ずしも教科による指導だけに期待することはできない。……」という一文があり、「家庭生活指導の手びき」を一部引受けたらしいことがわかる。

次に、一九五八年には、科学技術教育の振興と道徳教育の特設に特徴づけられる、エポック的改訂があった。中学校では家族分野が消え、技術教科という性格を一層鮮明にしたが、小学校でも同じであった。

家庭科で指導すべき中心的な目標は「1、被服・食物・住まいなどに関する初歩的、基礎的な知識・技能を習得させ、日常生活に役だつようにする」というのである。従来の家族関係はなくなり、家族関係と生活管理の二領域をあわせて「家庭」という領域に変わった。高校の'60年改訂と同様の変化が一足早く起きている。しかも、「家庭」という領域は、目

標のなかで4に位置づけられ、内容の大幅削減とともに、「家庭生活の意義を理解させ、家族の一員として家庭生活をよりよくしようとする実践的態度を養う」と、実践が強調された。

58年指導要領は「家庭科は教科の特性上、他の教科や道徳などの指導との関係がきわめて密接であるから……」という。他教科との関係があることは当然として、新設の道徳との関係がきわめて密接だとはどういう意味なのであろうか。

道徳は、善悪、正邪の価値判断を伴うものである。家庭科は科学的でなければならぬと考えている私は、道徳的価値観も教えるといわれると、頭から冷水を浴びせられたような思いがする。教科と道徳は別でなくてはならない。

これは51年「手びき」を引受けたところに原因があるのではないだろうか。「手びき」は道徳的、訓育的表現にあふれているのだから（たとえば武田一郎『楽しい家庭5』大誠書房54年）。

なお、中学校でなくなった領域や項目で小学校に移ったものではなく、中学校の内容は宙に浮いたまま顧みられなかったことになる。ここでようやく教科書の分析にたどりつく。刊行された全部、十種類二十冊を対象とするが、残された頁は少ないので、二つのことにふれ、本文については次回に譲りたい。

「家庭」の領域は五、六年の教科書（全部で二〇～一二八頁）中わずかに十頁内外を占めているにすぎず、マイナーな領域だと印象づけられる。しかも、うち五頁程度は「応接と訪問」で、あいさつ、お茶や座布団の出し方などのしついで占められている。

つぎに家族構成では、本文中、メインとなる家族のさし絵を分類したところ、核家族5、三世代家族9、不明6で、三世代家族が半分を占めることに意外な感をもつ。

またすべて祖母のみの三世代家族で、祖父は消えてしまった。ただし余暇を楽しむさし絵は、三例とも核家族である。近代的夫婦家族の親密さを表現したかったのだろうか。

子ども数は二人が4、三人が9、四人が1。三人の子どもの組み合わせは、女二人男一人がほとんどである。47年の中学教科書では子ども二人の核家族だったことが、ふと頭に浮かぶ。

次回は科学と道徳という視点から、教科書の内容をとりあげたい。

# 男性学への契機

魔男の宅急便

■諸 橋 泰 樹

## 「白鳥の歌」を聴く男たち

人間、数十年も生きていると、身体のうちこちに、ガタがくる。ぼく自身にてらしてみても、弱くなった酒や宿酔の取れにくさ、薄くなる頭髮やますますの視力の衰え、慢性的な胃腸の調子の悪さ、そして三十代に入り突然やってきた自律神経の失調や花粉症とおぼしきアレルギー……と、およそ「景気」の悪い、しかし本人にとっては深刻な症状のオンパレードを呈している。「私はもう行間しか読めなくなった」と視力を失った七十歳のサルトルのようなカッコイイことは、とても言えない。

かつて大江健三郎は、連作の短篇小説集『レイン・ゾウ雨の木』を聴く女たち』の中で、作家である主人公に、自分が作家としてしばらく書かなかった短篇を書くサイクルに入っているということ、そして、これはつまり、「人が死に向けて齢をとる」ということなのだと、語らせている。人には、自分のラ

イフサイクルの変化によって、このように、人は死に向けて齢をとるものなのだと気づく瞬間や契機があるようだ。

たとえば、ぼくが二十歳の時に、職場の顧客として現れた初老の婦人が、当時好きだった女性の数十年後を確信させる貌をしており、鮮烈なイメージを受けた時。あるいは数年前、恋人の貌にはつきりと「老い」の徴候を見た時の、ともに生きる（齢をとる）ことの歎びと、しかし同時に、死が二人を分かつことによつて底知れぬ悲しみを味わうかもしれない、との怖れを感じた時。あるいは、冒頭で述べたような、身体にあらわれ始めた多くの徴候を自覚した時。

先の大江の作品を刊行と同時に読んで、自分が死に向けて齢をとるということを自覚したのは、一九八二年の夏のことだった。ちょうどその頃、人より四年遅れのスタートではあるが、研究者として自分なりの「出発」となる筈の卒業論文にとりかかろうとしていた。それからしばらく後の秋のある日、大学からの帰りの乗り換え駅で、ぼくはホームに入ってくる電車に恐怖を感じ、またホームから電車に移る際の緊張を感じ、身体も精神もこわばらせて立っていた。

——今、自分は書きかけの原稿の束を持っている。モシ今、ココデ自分が電車二巻き込マレテ死ンデシマッタナラバ、この書きかけの原稿は高橋和巳の『憂鬱なる党派』の主人公西村恆一（西村 恒一）の原稿のように、誰の眼にもふれぬまま雲散霧消して

しまうのだろうか。それとも、誰かが線路に舞った原稿やその続きを書いたノートを集めて編纂してくれるだろうか。未だ紙に書きつけていない、これから書くかと思っていることの全て。ぼくが、それを紙に書きつける前に死んでしまったとすれば、それは無かったと同じで、永遠に誰にも知られることはないのだ……。

このような恐怖に襲われ、ぼくは書きかけの卒論の清書原稿や下書きの入った鞆を下げる手をしっかりと握りしめ、足を踏んばった。ここでは死ねないぞ。まだ死ねないぞ。

「書かないうちは死ねないぞ」ということをこの時に自覚してからというもの、ぼくは、無意識のうちになるべく「やりかけの仕事」を常にかかえているような状態に自分を置くようになっていった。節目となる論文や依頼原稿などを書く機会が増すにつれ（そのような仕事を半ば無意識に呼び寄せているのだが）、未練がましくも、この仕事が終わるまでは死ねないぞ、と「先送り」することで、かえって「死」を見ずえることを避けている。だから、逆に、自分の「寿命」を自分で知っておかないと、仕事の目途が立たないと思いたち、三十代になってから気の滅入る症状が続くのにウンザリしていたこともあって、内臓のどこかに確実にあると感じられる疾病を疑って自ら病院へ赴いたのは、昨年春のことだった。結果は（勿論）シロだったのだが、さて、あの時に「寿命」を

言い渡されていたら、かえって「仕事の目途」などつく筈はなかったと思う。おそらくぼくのパターンとしては、毎回その都度、ここまでやったら、ここまでやったら、と死神の来訪を一つ延ばしにしながら、向こうがしびれをきらして時間切れとなり、途中で一切の思念を宙ぶらりんにしたまま「無」に帰するしかないのだろう。

「まだ死ねないぞ」、という感覚が強くなるのは、女は子どもがいるから、男は仕事があるから、という単純なものでもないように思う。なぜなら男も「産む」のであり「産んだ」男性も多くが子どもが小さいうちはまだ死ねないと考え、しかし、一方では自分の分身を残せたことで、沈みゆく「白鳥の歌」にいくらかは冷静に耳を澄ますこともできるからだ。

だから、子どもを作らずに赴くことを決めているぼくが、この仕事が終わるまではと「先送り」のように生きているのも、子を持つ男性や女性とさほど差はないのではないかと考えている。逆に、子を持つと安心して死ねるとか、子がいないと寂しいという言説に対しては、血のつながらぬ（ここがぼくには大切だ）「ミニ諸橋」を人の記憶に残せばぼくも安心して死ねますから、とか、生徒や自分の書いた本がいるから寂しくありません、と言いたいようなところがある。死の自覚といだら「死ねない感覚」には男も女もないのではなか。

## 橋田の夢

### 「暴力的」ということについて

武田 秀夫

「そういえば、このごろJさんに会わないな。彼、元氣?」

「元氣ですよ。先週の土曜は、来て飲んで行きましたよ」

鮎をにぎりながら板前が言う。

「なんたって、Jさんは凄いいねえ。蚊の刺したあとが痒いからって、煙草の火を押し付けちまうんだから」

「まったくなあ。痛くないのかねえ」

「呆れ返って、あたしも聞いたんですよ。痛くないのかって」

「そしたら?」

「そしたら、痛いことは痛いんですけど」

「そりゃあ、そうだろう」

私は声をあげて笑う。

「そりゃああそうですよねえ。でも、あの人、それよりも痒い方が我慢ならないって、平氣

な顔して言うんだから、参っちゃいますよ」

「まったくなあ」

私は笑いながらまた酒をする。

「タケダさんと同い年でしよう、Jさん」

「ああ、もう五十を越している。それでい

て、あんなことをする。静かな人だけど、何

をやらかわからないようなところがあるな、

あの人には。おっかない人ですよ」

すると、おかみさんが、やっぱり笑いな

ら口をはさんだ。

「Jさんも、若いように見えて、トシなんで

すねえ。この前、前歯をぶつけて欠きまして

ねえ。ところが、あの人、医者に行くのが面

倒だって、欠けた歯を、瞬間接着剤でくっ

けちまったんですよ」

「アロンなんとかっていうやつ?」

「そう。セメダインなんかじゃ、もたないか

らって」

冗談を聞くように笑っているが、書く人が書けば、Jさんをモデルにちょっとした短篇小説ができる、それぐらいに私は思っている。

小さな町工場の主人。五十にして独身。高倉健を二回りほど小柄にした風貌で、短かく刈った髪に最近白いものが混じりはじめた。いつも静かに飲み、静かに話す。そんな男が、「痒いなあ」とつぶやきながら表情も変えず、腕の内側に煙草の火を押し付ける。肉の焦げる微かなにおい――。

Jさんのことを思うたびに、「暴力的」ということが心に浮かぶ。

かねてから、ビートたけしが気になっていた。テレビをほとんど見ないから、バラエティ・ショー、トーク番組等におけるビートたけしを私は知らない。私が注目しているのは、映画におけるビートたけしである。

ずいぶん前のことになるが、たしか荒木一郎が出た映画だったと思う。監督は東陽一だったかな。

ビートたけしが町のチンピラやくざを演じたのだが、それがひどく新鮮だった。演技など全くしていないようにでいて、次の瞬間、い

きなり何を仕出かすかわからないような、危険な、暴力的な雰囲気を濃厚に漂わせていた。それが最初。

次が、大島渚の「戦場のメリークリスマス」。坂本龍一扮するエリート of 武官・ヨノイとは対照的に、日本の無明の闇に生きる庶民の、底の知れない無気味さを身体全体にたたえた軍曹ハラ。そのハラが、捕虜虐待の科によって戦犯として処刑される前日、獄を訪れた英軍中佐に、「めりいくりますす。みすたあ・ろーれんす」と声をかける、その時の笑顔がスフィックスの謎のように私の中に残った。虚無的なようできて妙に明るい不思議なあの笑いは、いったいどこから生まれるのだろうと今でも思う。

そして滝田洋二郎の「コミック雑誌なんか知らない!」。内田裕也脚本・主演のこの映画は、「ゆきゆきて、神軍」(監督原一生・主演奥崎謙三)と並んで、ここ十年ほどの日本映画中最も激しく私を打ったものだが、その映画のラスト近く、豊田商事事件をモデルにしたテロの場面に出演したビートたけし、これがまた凄かった。威風、あたりを払う? 存在感があつて、私は、「ヘー、こりゃあもう天才だあ」と心底思ったものだ。

最近では、「その男、凶暴につき」「3-4-X 10月」と、監督としても仕事をしているが、それらの作品も私にはひどくおもしろかつた。

ビートたけしという男が何を考えているのか、私にはよくわからない。彼はことばで解說的に映画を語る男ではないようだし、彼は、ことばで表現するには難しいものをこそ映画で表現しようとしているように見える。

ただ、子どものころから数だけたくさん映画を見つけてきた私の経験と感覚だけに頼って判断するのだが、ビートたけしという男が映画でやってきたこと、やろうとしていることは、きわめて新しくユニークだ。そう思える。

では、何が新しいか。

私にしてもことばでうまく言い表わせないが、危険を冒して無理に押し出すとすれば、どうしても「暴力的」ということばになる。

映画は、さまざまな暴力を描いてきた。映画表現の中心に、なぜ暴力がかくもくりかえし据えられるのか。観客は、私をふくめてなぜそうした場面をくりかえし見たがるのか。考えるに値するテーマだが、それはしばらく

措くとして、事実として映画は暴力的なシーンをあくことなく描きつつつけてきたわけだが、日本の映画に限っていえば、ビートたけしのそれは、かつてない種類のものだ。それは本質的に新しい。私はそう直観している。顔は笑っていても、ビートたけしの目は、少しも笑っていない。笑わない裸のままのその目を開け放しにして、彼は役者として暴力的にふるまい、監督としては、たとえば、自分自身の肉体に対する痛覚を全く失ったような、新しいタイプの暴力的キャラクターを画面に登場させる。

いままでも日本の映画作家たちは、さまざまに暴力的表現をめざした。が、ビートたけしを前にすると、彼らはいずれも、観念でそれを行ったにすぎないと思われてくる。ビートたけしの暴力表現において、大声が怒声が叫喚が発せられることはない。ビートたけしにおいて、暴力は、いわば静かにふるわれる。ことばや観念ぬきに、肉体の直接性において。

日本という風土には独特の暴力的なものが潜んでいる。それにはじめて映画表現を与えたのがビートたけしだ。私はそう思っている。(この項につづく)



え・加藤由美子

ぶん・福田 緑

—おばけに燃える男—

「まこと君はことばの教室でどんなことをやりたい？」

「そうですね、まず迷路をやりたいです」

「はい、はい。それから？」

「なぞなぞもやりたいです」

「なぞなぞの本もあるわよ。それから？」

「あと、おばけが作りたいです」

「へえ、おばけって、どんなふうに作るの？」

「そうですね、あの位のダンボールなら十九個位用意してください」

「うーん、十九個は難しいかもしれないけど……それでどうやって作るの？」

「ここと、ここを合わせて、中に入るんです」

「あ、そうか、まこと君が入るわけね」

「いえ、ちがいます。先生が入るんです」

「エッ、先生が入るの？ じゃ、まこと君はどうするの？」

「ぼくはちがうおばけをやりますから」

「あ、そうか、いろんなおばけを作るのね。じゃ、来週はどんなおばけを作るのか、図に

かいてみようか？」

「はい、そうしましょう」

まこと君は校内の四年生の教室から一時間だけ授業を抜けて「ことばの教室」にやってくるのですが、ことばがいていねいすぎて、何とも奇妙な具合です。視線も合わず、ニコリともしません。この日は迷路のゲームをやって、チャイムが鳴るとサッと立ち上がり、シンデレラの如く教室に戻って行きました。

でも、私は内心ワクワクしていました。お母さんやお父さんから、まこと君は家庭でもほとんど口をきかず、お友だち関係もうまくいかない、彼の頭の中はおばけで一杯で困っているって聞いていたからです。おばけで一杯なら、おばけでつながってみようじゃないの、思いもかけず、早速おばけ作りをしたいと言いつたのですから、「シメ、シメ！」というものです。

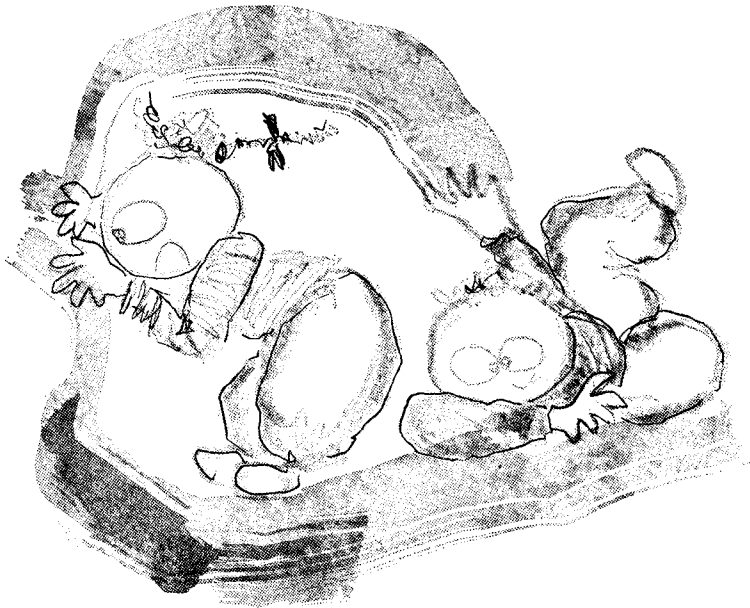
次の週に、具体的なイメージを描かせてみ

たら、出るわ出るわ七人のおばけが彼の手に  
よって描き出されました。私に三役、まこと  
君が四役の割り振りです。それならどこかで  
おばけの発表の場を設けたいと考え始めた  
ら、まこと君の方から「おばけ屋敷をやりま  
しょう」と言い始めました。

さあ、それからが大変。休み時間になると  
目を輝かせて職員室のドアをガラッと開け、  
「先生、また来ましたあ。これ、一等の賞品  
にしてください」

とノートの切れ端で作った剣のような物を差  
し出します。彼の頭の中でぐんぐんイメージ  
がふくらみ、とうとう学級全員参加のま冬の  
「おばけ屋敷」をやり上げてしまいました。

学級で鉛筆削りのカスやノートの切れ端を  
食べてしまうこともなくなり、お友だちに乱  
暴することもなくなり、穏やかな笑顔で通級  
するようになったまこと君は、今、本物の夏  
の夜に「おばけ劇場」をやりたいと、燃えて  
います。





## 名古屋からだに聴く会

〈木村 易〉

だれもそれを望んではいるけど、なかなか本当にイキイキとは生きられずにいます。七年前に竹内敏晴氏のあるワークショップに参加した数人が始めたこの会では、さしあたってフォーカシングという「自分のからだに聴く」方法にそのための手がかりを見て実習し合っています。人間の成長は、心身一体であるからだ、その自律性、可能性に信頼を寄せ、その語ることばを素直に聴くことから始まります。

ゆったりと坐って静かに呼吸をして下さい。そして「自分の生活はどうなっているのだろうか」ときいてみましょう。幾つか気になることが浮かんで、その一つが特に気になります。「そのことを考えるとどんな感じになるのかなあ？」と自分に優しく聞いてみます。少し距離をとってその問題の全体を感じてみます。からだ、胸やお腹の辺りの感じに注意を払って。何かことばになりにくいある感じが生じているのが感じられますか。しばらくそれを大切に味わって下さい。思いがけない言葉やイメージが浮かんで来て、からだがあふつと楽になるのが感じられるでしょう。したらあなたはもうフォーカシングを始めているのです。ジェンドリンの『フォーカシング』（福村出版）を是非読んでみて下さい。

連絡先 〒475 愛知県半田市新川町五八一 横山体真方

☎0569-21-2187

## 自己紹介ぶるうぎくい

日本アントロポゾフィー協会

「ルドルフ・シュタイナーハウス」

〈秦 理絵子〉

ここは、シュタイナーが二十世紀の初めに展開した世界観を学ぶ場です。その世界観は、生きた実践と結びついて、教育・芸術など社会のあらゆる分野に及び、今、世界中にひろがってきています。

実生活と離れた知識にはあきらまらない、でもただ気持ちだけでは何も産み出せない、本当に自分のしたいことは何なのだろうなど、様々な思いを抱いた人たちが、シュタイナーハウスで出会います。シュタイナー教育への関心から、そして音楽・絵画・あるいはオイリュトミー芸術への興味から、各々が自由に色々な研究会に参加します。時々、公開講座や講演会、舞台公演も催されます。

世界と自分とのつながりを、シュタイナーの思想から生まれる活動の中にも実現しようとする人たちと共に、シュタイナーハウスは、今年の四月で十年目を迎えます。

「自分自身をわかって思うなら、世界のあらゆるところをみつめなさい。世界をわかって思うなら、自分自身の内へ目を向けなさい」（ルドルフ・シュタイナー）

もっと詳しくお知りになりたい方は、二百円分（送料込）の切手を同封して、左記までご連絡下さい。

連絡先 〒169 新宿区大久保3-9-5 117ルドルフ・シ

ュタイナーハウス「バンフレット」係

# 買ろて来て使う

■山本謙吉

## 裸電球

「ちょっと持っとって」

電灯の笠を預けて丸椅子の上にあがり、コードと吊金具を持った両手を伸ばした。アパートの六畳の天井のまん中に長芋くらしいの太さの丸太の竿縁（きんぎょ）が渡してある。そのちょうど中ほどに明かりがともるように電灯を吊るした。さて、ひもを引っ張ってみると、ついた——

日が暮れてから仲間が来ると、何よりも先にひと働きすることになる。まず、板の間にある丸椅子を六畳の押入れの前まで持ってきて、天袋にしまつてある電灯をおろす。笠のついた結構な重さのその電灯を持つて、再びゆっくりと丸椅子にあがり、吊金具とコードの先端とをおさまりよく取りつける。ひもを引っ張つてめでたく明かりがともれば、夜の始まりとなる。

「みんな帰ったらまたはずすねん」と嬉しそうに言つたら、「ずっとつけとつたらええねやん」と、「みんな」が口をそろえて言う。でもこんなのがずっとあつたら、服を着替えるときも気になるし、どうも窮屈で、みんなが帰ると、やっぱり取りはずして天袋にしまつておくことになる。

三畳と六畳に明かりがなかったアパートに引っ越してしばらくの間は、そういうわけで、夜は板間の蛍光灯が頼りだった。が、暮らし慣れてくると、やっぱり各部屋に明かりがあるほうが便利かもしれないということになって、僕は電球を買いにゆくことにした。それも、あまり大きくなく、重くなく、電球自体の値段が高くないもの、ということで、10Wの透明の裸電球を買った。

その昔、真つ暗な部屋の中で、10Wの明かりで、手もとだけを照らして本を読むのが楽しみだったことを思い出す。10Wの裸電球がどれだけ明るいものであるかは、頭で考えてみてもわからないが、夜になってその明かりを消してみればよくわかる。こんな有り難い品物はちょっとないぞと思えてくる。

ひもを引っ張つてつけたたり消したりできるしかけのアダプタとソケットを三畳の天井に取り付けた。うまくぶらさがったソケットに裸電球をくるくる回して、はめ込んだらできあがり。ひもを引くと、光った光った。ぎらぎらとまぶしくはないけれども、フィラメントはすばらしく輝いている。部屋の中のものは、どれも黄橙色（きだいだい）のセロハンの向こう側に見えるようである。今では、六畳にも板間にも台所にもついている。

## 心からからだへ



半田たつ子



「老人が優しいのは、沢山の死に出会ってき  
たからだ」という。美しい言葉だ。

もう三十年も昔、二番目の子供が死んで産  
まれたことは、私をメタメタに切り裂いた。人  
生の深淵を初めて覗いた。この衝撃から立  
ち直るために、私は初めて自分の意志で文章  
を書き、勤めていた高校の文芸誌に発表した。  
沢山の生徒たちが、心を寄せてくれているこ  
とに、私流の感謝を表したかったから。

この文章の題を「失い、そして得たもの」  
としたのは、子供を失ってぽっかり開いた穴

に、降り注がれるあたたかな人の情けのシャ  
ワーを書きたかったから。シャワーは穴を埋  
めることはできない。けれど、虚ろな目は、  
そこに立つ虹を捕えていた。「この世のどん  
なさやかな『美』にも敏くあろう」。虹を  
仰いで、私はこうつぶやいたのだった。

夫を失った悲嘆は、まだ言葉で形容できな  
い。娘たちとアメリカを旅し、非日常の旬日  
を過ごした後、いつもと同じように仕事を処  
理している自分がウソっぽかった。ひどく薄  
情に思えた。どつぷりと悲しみに潰かってい  
なければ、夫がかわいそうだと思った。未亡  
人とは、嫌な言葉だけれど、そのニュアンス  
は分かった。いにしえの女が、夫の菩提を弔  
って、尼になるという心境もよく分かった。

三年前、夫君をやはりガンで亡くされた私  
の友は、西国三十三ヶ所観音霊場めぐりをし  
て、めでたく満願を迎え、般若心経を納め  
て、やっとほっとしたと言う。私にも、西国  
三十三ヶ所めぐりが必要だった。

私は、夫が発病した二月六日から、その死  
の九月三十日までを、もう一度迎ってみるこ  
とにした。病床に付添いながら、毎日メモし  
てきた手帳の文字を、明るい所に引き出そう  
と思った。

昨年は、講演をほとんど断っていたが、私  
自身も出会いたい人との幾つかのお約束があ  
った。今、私をとらえている問題を投げかけ、  
自分をさらしながら、共に考えてみようとする  
私の流儀では、当然、私を揺るがした夫の  
死に触れないわけにはいかない。しかし、私  
の態勢は、人前で語ることが出来るまでに整  
っていない。私は、悲しみの袋の口をきゅっ  
と閉じ、そこには触れずに生きてしまった。

けれど、二月六日、私は袋の紐を解く。そ  
の日から、きちんと夫の闘病の跡を辿る。そ  
れが私の西国三十三ヶ所巡りなのだ。こう思  
うことで、辛うじて自分を支えた。

二月六日、いよいよ。心を励まし励まし、  
ワープロに向かった時、やはり涙が溢れた。  
目の前に四枚、後ろに一枚、夫の写真がエー  
ルを送ってくれた。毎夜、ワープロをカタカ  
タと打ち続け、ふた月でお葬式の日まで辿り  
ついた。ほっとしたが、同時に寂しかった。

今度は、夫の死を知って、慰め、励まして  
下さった大切な友からのお便りを、日付順に  
ワープロで打ち始めた。なんという優しい言  
葉、なんという美しい言葉、もし立場が逆だ  
ったら、私はこんな素敵な言葉を贈ることが  
できるだろうか！ 大勢の方が「お慰めの言

葉を知りません」と書いていらっしやるのだが、不思議なことに、私にはちゃんと言葉が届いた。

そして、身近な人を失うことによって、こんなに人の情けをいただくなら、「死に触れるほどに、人は優しくなる」という言葉は真理だなあと実感した。

四月二十日、朝日新聞の「私の紙面批評」で、向井敏氏が大岡信氏の「折々のうた」を絶賛しておられた。大岡氏は同欄を、四月初めの五日間、桜の歌で埋めた。向井氏は、その一つ山川登美子の絶唱を、ここ半月ばかりのあいだに「朝日」に載ったすべての記事の中で、最もすばらしい文字だった、と言う。「後世（こぜ）は猶（なほ）今生（こんじやう）だにも願はざるわがふところにさくら来てちる」

山川登美子は、私の大好きな歌人。生前発表された最後の作が取り上げられたことだけでもうれしいのに、向井氏のこの歌に寄せる心が、胸に迫った。「変転つねない内外の政情を躍起となつて報じる記事や、うとましい政界のスキヤンダルを暴く誇らしげなスクープのひしめく中で、ひとりこのコラムは千古変わらぬ自然の営み

に託した人間の慶び悲しみを伝えて動じない。『後世はもとより今生にさえ望みを絶つたと覚悟した人のふところに、なお散りかかる桜の幻』を写して揺るがない……。

夫の闘病の跡を迎れば、あの時、この時のせつば詰まつた思いと、その折々に感動した人間の優しさ、夫の必死の闘病と、病院のいきとどいたケア、そして彼の死を悼み、私の心にひしと寄り添って下さった友人たちが蘇る。

喪の世界に、封じこめられていた誘惑から、ほんの少し身をずらすと、そこに、どっぷり漬かつて、味わい尽くさなければならぬ世界があった。毎日とびこんでくる無数の情報、それらを追っかけ、一つでも知らなければ、ひどくソンをし、遅れたように思ひ込む。自分の願いが妨げられる原因を探り当て、それを除くために働きかけなければならない相手をめぐって、あくせくと行動する。いつも満たされずに、いつも頑張っている……。

こうして過ごして来た日々が、ひどく空しく、充実した生を送ろうと取組んで来た全てに、待った！ をかけたくなったのだ。人生には、もつと根源的な価値がある。そこをひたと見つめて歩まなければならない何か。私は、アルフォス・デーケン氏が主宰する

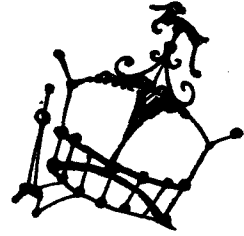
「生と死を考える会」に入り、定例会に参加し、同氏の著作も何冊か読んできた。デーケン氏は語る。ドイツの哲学者、カトリック司祭でもあったアルフレッド・デルプは、四十歳の若さでヒトラーの命により処刑されたが、こう書いている。「もし一人の人間によって少しでも多くの愛と平和、光と真実が世にもたらされたなら、その一生には意味があったのである」と。

またデーケン氏の師・マルセルは、愛する妻の死を経験して人間の不死性の問題を、愛という現象から説明しようと試みた。彼はそのことを、美しい文章で表現した。「人を愛するとは『いい人、あなたは決して死ぬことはありません』と言うことである」と。

こうした深い哲理が私に分かつたわけではないけれど、表面的なあれこれに、遅れてはならじと、まなじりを決する気持は、遙か遠くに去ってしまった。真に重要なものに注意を向けて、生きたい。そう切望するようになってしまった。

ふと気付くと、リュウマチの痛みがすっかり薄らいでいる。からだは心を知っている。私にとって「心からからだへ」は、まさに実感だ。

We  
に  
なんでも  
言おう  
なんでも  
聞こう



◆四月号に、つたない文章を活字にしていた  
だいて（五年前に『フレネ教育の誕生』とい  
う翻訳を出しまして以来のことです）、  
改めて自分の文章の進歩のなさを、情なくな  
がめました。でも、こんな素晴らしい機会を与  
えていただいて、本当に感謝しております。  
重ねてお礼申し上げます。

文中でも触れましたように、学校教育に挫  
折した経験からなかなか卒業できず、時を過  
ごしてまいりました。それは多分、今度与え  
ていただいた機会のように、自分の欠点や誤  
りを一度白日にさらして、しっかり見つめる  
という過程を経なければ出来ないことだった  
のだ、と思います。

何だか、これで次の一步を踏み出すことが  
できそうな気がしております。そしてフレネ  
のことも、罪悪感なしに語れそうです。

それにしても、学校現場や親の立場からの  
発言にくらべて、私の見方は随分甘く、夢の  
ようで、読者の皆様は、あきれてしまわれる  
のではないかと心配です。でも、それが今の  
私。考え続けること、試することはやめないで  
しょう。

中東での戦争については、住んでいる調布  
市の仲間と、私もできる限りのことをしてみ  
ました。

その過程で仕事場である公民館（つまり調  
布の市政）と私の間には、埋めようもない断  
絶のあることを思い知らされました。任期の  
切れる来年三月までは、何とかがんばってみ  
るつもりですが。

（東京・名和道子）

◆四月号、ドキッとするテーマでしたが、す  
ごくおもしろい視点だし、問題提起ですし、  
よかったと思います。二冊送っていただきま  
したので、岩手県の一戸高校に新任でゆく私  
のゼミ生に、プレゼントしました。一戸は、  
盛岡から30分くらいのところだそうです。  
どなたか新任家庭科教師の話し相手になる先  
生はいらっしゃいませんか。いらしたら教え  
て下さい。馬力のある素直な卒業生ですの  
で、きつといい先生になると思います。

（水戸・酒井はるみ）

◆先日、小金井市で開かれた「男女混合の出  
席簿を！」の集まりに参加しました。私の住  
んでいる松戸市は、男女の順が投票所入場券  
にも現れているので、根が深いと思います。  
出席簿を男女混合に、という問題も、松戸の  
状況をよく知っている人たちからは、しきり  
にやめておきなさいと言われています。松戸  
という所は、市民運動のやりにくい所なのだ  
そうです。

先日のような集会に出席しますと、思いを  
同じにする仲間がいるのだと、本当に勇気づ  
けられます。それと同時に、半田さんが進め  
てこられた家庭科共修の実現に、20年もかか  
ったという事実は、運動のたいへんさを痛感  
せずにはいられません。どうして、こんなに  
自明で合理的な考えが、一般にすんなりと受  
け入れられないのだろうと、また怒りがこみ  
上げてきそうです。

忍耐が必要なのだとかつくづく思い知らされ  
ます。なんといっても「忍耐」は、女らしさ  
の象徴みたいなものです。しかし「あきらめ  
の忍耐」ではなく「現状を変えていくための  
忍耐」のエネルギーを持ち続けたいと思っ  
ています。

先日、湾岸戦争反対の市民集会に参加し

たおり、雨の中のデモ行進で疲れ切った子どもたち三人を見かねて、船橋から新松戸の自宅まで車で送って下さった（一時間半くらいかかりました）方がありました。その方は、せっけん運動をずっと続けておられて、今も一日二〜三時間、ボランティアでせっけんを売り、廃油を回収するために働いているということでしたが、「とに角、地道にこつこつ、無理しないでやっていかないと、長続きしないのよ」と話して下さいました。怒りばかりかかえていると、ついつい焦りがちになります。怒りのエネルギーを、忍耐のエネルギーに変えていく術を学ばなければならない、と思いました。

（松戸・小山尚子）

◆重油にまみれて、息も耐え耐えの海鵜と、象のトンキーの話がダブって、シンゾーが氷りつきそうでした。いじましい議会でやりとりや、軍事評論家なる人種のコーフンぶりを、学校の授業なんかやめて、しっかり子どもたちに見せればいいのに、と思ったりしました。カッコイイテレビゲームのように、空中戦の命中心のところだけ見せる、アメリカ式の「大本営発表」。ジジババは孫たちに伝えることが、山ほどあったでしょうに――。

私は預かっている子どもの母親に、毎日毎

日話をしました。

四月号は、久しぶりに夢中で読みました。いろんなイミで面白かったデス。この頃よく愚息が「ア〜モウ自分で整作のしかないな」と嘆いているので、佐藤通雅さんの文章を、ぜひ読ませたいと思っています。

（東京・武末久子）

◆長い間、下手なイラストを載せていただいて、ありがとうございます。

この春、二人の中学生の男の子の親となります。Weを、いろいろ参考にさせて頂いていただきます。昨日、うちの食器戸棚から、ホカロンで巻かれた産直卵一コが発見されました。家の中に男の子がいると、いろいろと面白いことが起きます。

（東京・井田裕子）

◆統一地方選の第一ラウンドが終わって、応援した候補が一七〇〇票ほど少なくて落選してしまい、ガックリしています。男でしかけど、市民活動家で、実際のところクラブ生協の「主婦」三人（全て当選）よりはフェミニズムの視点をもち、またいい女が周りに沢山いましたので、当選してもっともってフェミニストになれそうな人だっただけに、本当に何といってよいやら……。

でも、クラブ生協の三人のこれからにも期

待でき、「元気に政治する会」（支持母体）の中で、フェミニズムの視点を持つより、支えていくのもいいかな、と思っています。

昨日は、泊原発2号炉の営業運転。二年ぶりに泊へ行ってきました。地域のビラまきで感じたのは、住民はまだまだ六ヶ所のようにかたくなになっていないな。「こんにちわ」と言うのと「こんにちわ」と返ってくるし。でも「2号炉営業運転の日です」と言うのと、「アソーかい。ごころうさん」という感じで、ちょっと拍子抜けの感もあります。

本社前では、さみだれ解散時に、機動隊がデモ隊に突っ込み、手あたり次第に引き抜き二人の男性が逮捕されました。

この一月、ペーパー離婚し、今日、下の子の今年度初めての懇談会に夫妻で出席しました。一人のネームしか用意していなかったのに「父親は渡部ですが、母親は高橋なので、ネームをもう一つお願いします」「どうも、気付きませんですみません」ともう一つもらいました。自己紹介で夫が「わが家は別姓なので、電話などで用のない方が出ても、めげないで〇〇さんいますかと聞いて下さい」と言いました。全く違和感をもたれたふうもなく第一回目は通過しました。（札幌・高橋芳恵）

# わたくしから あなたに



◆聞いて下さい。私たちのリサイクル・ショップオープン

私の住んでいる団地の一階の店舗に、リサイクル・ショップを作りました。事のはじめは、子ども会世話人のHさんが、小さなジーンズ・ショップを始めたので、パートナーがスキー修学旅行中の気安さも手伝い、毎日立寄り話し込んだ時の会話です。

「喫茶店がつぶれたまま、シャッターがしまつててさみしいわ。何かできないかしら」「コンクリートぶちっ放しのままなので、とに角リサイクル・ショップでも始めながら、やりたいこと出しあつていいかない?」「そんなら私も一口乗るわ」といった軽いノリから始まりました。

店の改装費用がないので、コンクリートの床に安いビニール床を貼っただけ。大阪の浅

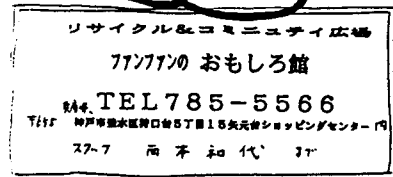
井さんのフレンドリー・キルトの作品をまねた明石高校生徒の作品も、殺風景な店を飾ってくれています。家賃は月10万、とにかく家賃を売り上げなくちゃと、店番はすべてボランティア、都合のつく日に出来ます。私は土・日曜、春休み中も重なり、仕事以外の日は店に出ました。

高齢の方がこんなに住んでおられるのか、そして障害をもった方も……。七年余りも住んでいるのに、世間知らずもいいところ。それだけに耳にする会話がどれも新鮮。二週間があつというまに過ぎました。「この店がもっと早く出来ていたら、あの家具も、衣類も、本もゴミに出さなかつたのに、毎日何が出るか楽しみで、一日一回のぞかないと気がおさまらない」という方が……。

やり始めてよかった。で  
きるだけ長く続けたい。でも  
前途多難。仕事として事業  
として成り立たせたいとい  
う現実派と、夢追い派  
(私のこと)とどう話をつけ  
るか。給食サービス、リサ

イクルとコミュニティの広場というのがねらい。手づくりの喫茶店と子どもの本の文庫、学童保育的な所、高齢者や障害をもった方との出会いの場……50㎡たらずのスペースに夢は広がります。

でも現実には、精神的にはいろんな出会いに自覚がふくらんでも、身体的にはくたくた。新学期が始まったらどうなるだろうと……。少しずつ改装しながら、リサイクルの現実派とコミュニティの夢追い派に分かれて、独立採算でいこうと言っています。夢を追いつながら、家賃をどう捻出していこうか、アイデアを探っています。



まずWeの読者の皆さんに広告を出すことを考えました。ご家庭で眠っている不用品、衣類は春夏物の新品・中古、子ども服、なんでも結構、送料以上が出そうなもの。お近くの場合、まとまればとりにうかがいます。Weの読者で団体登録します。売値の3割は手数料、7割返金します。よろしければWe誌にカンパもしませんか。ご希望の方には、自然食品店で一コ千二百円で売っているよもぎ石けんを一コ二百五十円でお送りします。毎日珍しい品物が入ることを楽しみにして待っている方が大勢おられます。いろんなアイデアをお聞かせ下さい。

(神戸・西本和代)

◆反戦リボンをまわしてくださったあなたへ  
湾岸戦争は、多国籍軍がイラクを力でねじ伏せるかたちで、ひとまず終結しました。この戦争でいったいどれほどの人たちが生命を落とし、家を失い、故郷を追われたでしょうか。海には原油が流れ、たくさん魚や鳥や動物が死にました。空には今なお黒煙が充満し、大気を汚染し続けています。これが正義の戦争だったとどうして言えるでしょうか。今回の戦争は、さまざまな点で過去の戦争とちがっていたと思います。その中のひとつに、戦闘も、情報の流れも、最新のハイテク

を駆使して行われたということがあります。そのために、私たちは遠い中東の戦争をリアル・タイムで経験しました。情報はかなりコントロールされていたと思われませんが、それにもかかわらず、私たちは明滅するテレビの画像から、ジェノサイド以外の何者でもない戦争のほんとうの顔を見てしまいました。ブッシュ大統領の勝利宣言にもかかわらず、自由のための戦争、やへ戦争という名の正義などあり得ないことを知りました。

私に關して言えば、今回の経験を通して、肝に銘じたことがひとつあります。戦争というものはいったん口火が切られると、とめどなく、猛烈ないきおいで燃えひろがるものだということが、戦争の機運がただよい始めてからそれを止めようとしても不可能だということです。やはり、日頃から反戦の姿勢を明確にしておくことがたいせつなのです。そのためにどうするか、新しい課題ができました。目下考えています。

開戦直後から始まり始めた反戦リボンが、戦闘の終結で、このところ少しずつもとってきています。返送されてきたものを見ると、首都圏を中心に、静岡、愛知、大分、長崎など、かなり広範囲に飛んでいったようです。

リボンに書かれたメッセージをひとつひとつ読んでいくと、書き手の思いが重なり合い、大きな反戦の響きが10倍にも20倍にもなっている感じられました。単なる署名でなく、ひとりひとりが言葉を連ねるかたちにして、ほんとうによかったと思いました。それと同時に、もし行き先がなく、迷っている反戦リボンがあるようなら、回収してひとつに繋げる作業をしてみようという気になりました。

もし、あなたの手元に行き迷っている反戦リボンがありましたら、ご面倒でもお送りください。国連や日本政府など関係機関に送った方も、コピーがあればお寄せください。ひとつなぎにしてみたいと思います。

なお、反戦リボンといっしょに、感想やご意見もお寄せください。ありがとうございませう。

(東京・竹見智恵子)

◆皆様お元気ですか。桜の咲きそうな九州を後にして、いまだ雪深い北海道に来ております。先日、札幌で勤務地の内示を受けました。紋別南高校家政科です。紋別市はオホーツク海沿いの街です。無事に家庭科の教員として採用されたので、ひと安心。一年生の家庭一般と、三年生の家庭経営を担当します。

(北海道・江口凡太郎)



✿



◆二月二十三日(日) 千里公民館にて。テーマは「子ども性の被害を考える」として話し合っ  
った。講師は田上時子さん——ビデオプロデ  
ューサーとしてカナダで少数民族、日系人、  
女性問題等のビデオコミュニケーションを制  
作。帰国後も女性問題等のビデオディレクタ  
ーをフリーランスでやりながらビデオを作  
成。講座の講師としても多忙(私は彼女の主  
宰するビデオサロンで作った「ワールド・ア  
パート」というアパルトヘイトに立ち向かう  
少女のビデオに感動)。

田上さんの話は、いろいろなデータを示  
し、「子ども性の虐待を考える」ビデオを見  
せてくれ、具体的によくわかった。

「帰国当時、埼玉で起きた幼女誘拐殺人事件  
の報道で、日本の遅れを痛感した。まず子ど

田上さんの話は、いろいろなデータを示し、「子どもの性虐待を考える」ビデオを見せてくれ、具体的によくわかった。

「帰国当時、埼玉で起きた幼女誘拐殺人事件の報道で、日本の遅れを痛感した。まず子ど

もの人権が抜けているということ。アメリカなどでは加害者の精神鑑定はやらない。性犯罪は、犯罪であり、社会問題として捉えられねばならない。加害者個人の異常心理の問題としたり、育った家庭環境の問題に収束すべきではない。また性犯罪が日本では軽く見られている。例えば強かんが窃盗の半分の罪にしかならない。加害者のほとんどが釈放後も繰り返し罪を犯すというのだ。アメリカでは性犯罪の罪は重く、他の犯罪とは分けて考えられ、加害者には必ず治療をしていく。その治療にはフェミニズムの考えが有効であるとされている。男社会のさまざまな力関係とゆがみが性犯罪の根本原因である。加害者自身の男性性が問われなければ治らないだろう。性犯罪は、女・子どもの人権の軽い社会で多発する。そして、自らの人権意識の希薄な女・子どもたちもまた、SOSを発せないでいる。後遺症はさまざまな形で必ずあらわれるというのに」。

そこで日本語訳のテキスト『わたしのからだよ』を出版。子どもを性被害から防止するには、子ども自身に力をつけるしかないという。子どもたちがさわられた時イヤだと感じることをの大切さを教えてくれる。知らない人

あなたに

ただに對してではなく、親に對してもイヤな時にはイヤだと表現する権利も教えてくれている。このテキストが、もっともっと読まれたら……と思いつつ話を聞いていた。

〔北川好美〕

新緑が日に日に色を濃くしていくように十年目のWeも、どんどん進捗していきます。東と西が呼応して開いた「初夏のつどい」も終わり、最大のイベント「夏季フォーラム」に向けて、活動全開です。実行委員会に、若い、新しい読者の方々が加わって、さわやかな発言があるのもうれしいことです。

あなたの周りに、Weの新しい仲間をふやして下さい。Weの記事について交わした話を、どうぞ気軽にお寄せ下さい。またあなたの知人で、ぜひWe誌上で活躍してほしいと思う方なども、ご紹介下さい。

Weを最近読み始めた方、索引を活用して、バックナンバーをご注文下さい。Weは創刊以来、一冊も廃棄していないことを誇りにしています。「温古知新」ですね。（半田）

# 泉



この頁はあなたと  
私の情報交換の場  
小さなスペースで  
すが、ご利用くだ  
さい。

## ◆日本女性学会春季大会のお知らせ

日時 六月十五日(土) p.m. 一時から  
シンポジウム／均等法五年―ジェンダーは  
いかに再編成されているか―  
六月十六日(日) a.m. 九時から  
研究発表会・ワークショップ  
場所 東京女子大学文理学部(杉並善福寺)  
参加自由・参加費 千円  
問合先 学会事務センター 日本女性学会  
担当係 ☎03-3387-5801

## ◆もうひとつのブライダルセミナー

「結婚」からの解放」自分らしい人生を生  
きるための新しい出会いを求めて：結婚して  
いる人もしていない人も、あなたにとっての  
「結婚」をもう一度考えてみませんか？

(チラシより)

主催 関西女性学研究会「結婚改姓を考え

る会」

大阪市立北市民教養ルーム

。第一回「こうすればあなたも結婚できる」

甲南大学教授／上村くにこ

四月十六日(火) p.m. 六時三十分～八時三十分

。第二回「婚姻今昔物語」 神戸大学助教授

曾根ひろみ 五月二十一日 以下シリーズ

で第六回まで毎月第三火曜日に予定。

。参加費 一回八百円・六回通し三千六百元

問合先 奈良市西大寺北町三ノ二ノ十三ノ

二〇二川端まで ☎0742-49-6435

## ◆We 100号記念の楽しい「索引」のお知らせ

もうご覧になりましたか？ We 100号を記念  
して「We 関西の会」の方たちが中心となって  
作った、楽しい索引が大好評です。

内容は・創刊号から100号までの特集テー  
マ 一覧・索引の利用のしかた・テーマ別索引・

100号によせて・各地のWeの会とイキイキぐ  
るう紹介・執筆者名索引と盛りだくさんで、  
いろいろと利用していただけます。

。A5・64頁(発行 Weの会)

。一部 五百円(送料 実費―一部175円

二部250円)

。申込先 相川美和子 〒657 神戸市灘区鶴

甲四ノ六鶴甲コーポ 23―402

☎076-843-3970

。数に限りがありますのでお早目にどうぞ。  
ウィ書房でも、ご注文受けまます。

## ◆We '91年夏季フォーラム(チラシ参照)実行委員会のお知らせ

日時 五月二十五日(土) p.m. 二時～五時

赤城社会教育会館 学習室A

地下鉄東西線 神楽坂駅神楽口下車三分

JR飯田橋下車十三分 赤城神社隣の神楽

坂エミールの奥 ☎03-3269-2400

※どなたでもお気軽に御参加下さい。

## ★現地合宿実行委員会

。六月二十九日～三十日(土)・(日)に、下見も兼  
ね、大学セミナー・ハウスで実行委員会を  
開きます。宿泊者は、事務局まで早めにこ  
連絡ください。

★フォーラムのチラシが出来上がりました!!  
所属されるサークルやお友達に、PR用と  
してどうぞ。ご連絡くだされば、お送りい  
たします。

。問合先 事務局 ウィ書房内 青木

☎03-326-1380



## 十字路



〈北海道〉「國の弱い者いじめ」とアイヌ地権者が訴え―日高二風谷ダム建設(朝日3/13)

「湖水の底の人柱になる決心を固めている」北海道・日高地方の平取町で建設中の「二風谷(にぶたに)ダム」に反対するアイヌ地権者が、建設省での意見陳述でこう訴えた。問題のダム建設はすでに半分まで進んでいる。しかも、用地買収に伴う補償金の受け取りを拒否している二人の地権者に対し、その「受け取っていない補償金」に所得税がかけられた。「どこまでいじめ抜いたら気がすむのか」。この叫びは政府だけでなく、和人(日本人)総体に向けられた問いかけでもある。(高橋芳恵)

〈宮城〉植物染料解説書『草染めかまふさ日記その一』六年ぶりに増冊(河北新報3/13)

仙台市在住の染色家宮地房江さんが、お弟子さんたちと自費出版した『草染めかまふさ日記 その一』が、六年ぶりに二百冊増刷された。『草染めかまふさ日記』は全部で五巻。植物染料から得られた約二百色について、色名の由来や媒染剤との組み合わせ方を和文と英文で説明し、色見本に手染め布を小さく切って張り付けてある。植物染料の資料として

貴重であるほか、仙台市郊外、釜房湖畔の作業場で四季折々につづった宮地さんのエッセーが、手間と時間をかける草木染め作業の雰囲気をよく伝えている。購入申し込みは仙房会・宮地染色工房 023(388)5335。(小野七瀬)

〈千葉〉八街少年院生が詩集出版―「行間」ににじむ多感な心 夢や悩みつづる(千葉日報3/23)

法を犯し更生に励む少年たちが、揺れ動く多感な胸のうちを告白した詩集「若い木の詩」が八街少年院(八街町滝台、島谷宗泰院長)から出版された。ささやかながらも心のこもった出版記念会が十九日、同院で開かれ、成田山の鶴見照硯貫首や評論家の無着成恭さんが「悩み苦しむ語りかける、もう一人の自分を見つめ、大地に根を張った若木に成長してほしい」と激励、院生らが自らの詩を朗読して刊行を祝った。

詩集「若い木の詩」は、B5判、二〇六ページ。同院には暴走族のリーダーやシンナーを常用し傷害事件を起こすなどした比較的問題性のある、十八歳から二十歳未満の少年が収容されており、八十七人の作品百四十一編

が収録されている。詩集は希望者に実費八百円で領布。詳しくは八街少年院(0236)5335まで。(木田直子)

〈神奈川〉合成洗剤使いません―返子市踏み切る 庁舎内は石けんだけに(読売4/2)

返子市は一日から市役所内で合成洗剤の使用を取りやめた。富野市長の進める「自然に優しい行政」の一環で、体制が整い次第、市立小、中学校八校を含むすべての公共施設で石けん使用に切り替える。五月には市民を対象に石けん作り講習会を開き、全市民的に合成洗剤追放運動を盛り上げたいとしている。(青木昭美)

〈埼玉〉君が代斉唱に反発―上福岡四小卒業生約二十人が着席(朝日3/26)

「日の丸・君が代」の義務化に、市民グループから強制反対の申し入れが出ている上福岡市で、二十五日全市一斉に小学校の卒業式が行われ、同市福岡、市立上福岡小(岸田徹校長)の卒業生のうち約四分の一が君が代斉唱のさい、起立を拒否した。同市ではその他にも父母や教員の一部が強制に反対して着席したままの学校もあり、義務化の投げかけた複

難な反応をかいま見せた。

(長谷川宏)

〈福岡〉チマ・チョゴリで一年生お出迎え  
先生は名前が二つ(毎日4/10)

福岡市城南区の田島小(清水重貞校長)の入学式で、新一年生のクラス担任になった女性教諭が、朝鮮半島の民族衣装チマ・チョゴリを着て、子供たちを迎えた。日本人の父と、韓国人の母の間に生まれ、日本国籍を持つ金昌子(キム・チャンカチャ) 日本名・渡辺昌子(34)。

金先生が学校の公式行事でチマ・チョゴリを着たのは、同和教育推進教員をしていた前任校で昨年三月の卒業式が初めてだった。「どんな差別にも負けない人間に育ってほしい」との願いを込め、「半在日韓国人」として自らが民族差別に負けない決意を子供たちに示そうと思ったから。田島小に赴任した昨年四月以降も始業式などで着た。

また、金先生は今年一月、学校で「二つの名前」を使うことを宣言した。「自分の中にある朝鮮に対する思いを大切にしたい。『日本国籍の朝鮮人』がいることも知って欲しかったし、民族名を名乗ることで多くの人

に『なぜ?』と考えてほしかったんです」と話す。

非開示処分取り消し—教育情報公開訴訟  
(フクニチ4/11)

福岡県情報公開条例に基づいた県立高校別の中退、留年者数の開示(公開) 請求を県教委に拒否された西日本短大教授、原口政敏さんが県教委を相手取り、非開示処分の取り消しを求めた「福岡教育情報公開訴訟」の控訴審判決が十日、福岡高裁民事三部であった。緒賀恒雄裁判長は「処分は違法」とし県教委の非開示処分を取り消した一審判決を支持、県教委側の控訴を棄却した。(安倍宣人)

〈鹿児島〉花もほころぶ「男の世界」 女子生徒が急増の傾向(朝日3/7)

男子校のイメージが強かった国立高等専門学校(高専)で、女子の入学者が急増している。五年前に制定された男女雇用機会均等法の影響で各分野への女性の進出意欲が高まったことなどが原因らしい。とはいえ、各校は設備面での対応に苦慮、文部省も「女子急増は重要諸問題」と受け止めている。(横山雅子)

〈熊本〉中国人女子が見事合格 孫文ゆかり

の熊本市の清々髯高(朝日3/16)

五年前、来日した熊本市の中国人女子中学生が「日中友好の懸け橋になれば」と、中国の国父と称される孫文ゆかりの熊本県立清々髯高校を一般生徒とともに受験、見事合格した。清々髯高校は来年初創立百周年を迎える熊本県内屈指の進学校。外国籍の新入生は初めてで、学校側は「在校生の刺激にもなる」と喜んでいる。(横山雅子)

〈沖縄〉戦跡めぐり—ひめゆり学徒隊の足あとと約百八十人が参加、追体験語る(沖縄タイムス4/1)

糸満市伊原のひめゆり平和祈念資料館の開館二周年を記念し、ひめゆり同窓会が主催した「戦跡めぐり—ひめゆり学徒隊の足あと」が三十一日、約百八十人が参加し開かれた。同窓会が初めて企画した追体験ツアーだけに、三百人余りの応募が殺到し、約半数を断るほどだった。各地での学徒の生の証言、各バスには四人の学徒が乗って、移動中にも証言を続ける濃密な内容に、参加者にも強烈な戦争追体験になった。(大嶺麗子)

## 十字路

事件を象徴する出来事とされた「葬式ごっこ」についても、判決は「鹿川君がいじめとして受け止めていたとはいえず、むしろひとつのエピソードとみるべきだ」と述べ、自殺と直結させて考えるのは不当とした。(3.27日付 朝日)

### ★中・高校7割が校則見直し

文部省は「校則は各校が主体的に決めるもの」とし基準づくりなどは避けてきたが、校則違反者の写真が卒業アルバムから外されるなどで校則が社会問題化した'88年4月「時代の進展を踏まえ各校で見直しを」と指導したがその結果を検証する校則についての全国調査を初めて、昨年11月、全日本中学校長会と全国高校長協会に委託し、行った(回答-1472校)。

その結果、この3年間に全国の中・高の7割以上が校則を見直し、その大半が校則を緩和しており、昨夏の神戸高塚高校校門圧死事件もきっかけになったとみられ、男子の丸刈り規定を廃止したり、女子のポニーテールを新たに認めたりするケースもあったが「瑣末な修正にとどまっている例もある」と、さらに積極的な見直しを求める通知を出した。(4.12日付 読売)

### ★内申書開示を求める

市個人情報保護条例に基づいて内申書(調査書)の開示を求めている大阪府高槻市の女生徒(中学校を今春卒業)が、4日市と市教委を相手取り、「速やかに(開示を)決定しないのは違法」との訴えを大阪地裁に起こした。内申書の開示問題が法廷に持ち込まれたのは初めて。

「プライバシー」「知る権利」「子どもの人権」といった基本的人権の意識が徐々に定着する中、教育の分野で、自分自身の評価に関する資料の開示を求める動きが広がってきている。(4.5日付 朝日)

### ★子のいる家庭、4割を切る

減少傾向の続く「子どものいる世帯」が初めて全世帯の40%を割り込んだことが、

28日、厚生省が発表した「平成2年国民生活基礎調査の概況」で明らかになった。第2次ベビーブーム世代が統計上、大人扱いとなる18歳を迎えて「独立」していく一方、空前の出生率の低下でそれに代わる子供がいないため。反面、高齢者がいる世帯も全体の27%と、3割に迫る勢いだ。(3.29日付 読売)

### ★非嫡出子の遺産差別やめて

「正式な夫婦の子供(嫡出子)かどうかで遺産の相続分を差別するのは不当」との訴えを東京高裁で棄却された東京都内の女性が、同高裁の決定は憲法14条の法の下での平等などに違反するとして、12日までに最高裁に特別抗告を申し立てた。非嫡出子の相続分は嫡出子の2分の1と定めた民法の規定に対し、裁判でその合憲性を争った初めてのケース。(4.13日付 読売)

### ★夫婦別姓容認を提言

海部首相の私的諮問機関「婦人問題企画推進有識者会議」(縫田暉子座長)が10日、女性の地位向上のため今後5年間に取り組むべき重点施策をまとめた意見書「変革と行動のための5年」を、海部首相に提出した。具体的には、夫婦別姓の容認や、離婚後の再婚禁止期間の法制の見直し、国の審議会などの女性委員の割合を5年後に15%(昨年11月1日現在で8.2%)に大幅に引き上げるなど、より積極的な方策が盛り込まれ、政府はこれをもとに、現行の女性施策の指針「新国内行動計画」('87年5月策定)を、来年5月をメドに見直すことにしている。

意見書の総合目標は、「男女共同参画型社会システムの形成をめざす」とし、現行計画の「参加」という言葉を「参画」に変えさまざまな活動で女性が企画段階からかわることの重要性を強調。「平等を基礎とした男女の共同参画」「国際協力と平和への貢献」など5つの基本目標と17の重点課題を挙げた。(4.10日付 読売)

## ★日ソ関係一新時代へ

ソ連のゴルバチョフ大統領は16日、ソ連の元首としては初めて来日し、対日関係の打開をめざし、首脳会談に臨んだ。

会談は領土・平和条約締結問題をめぐり難航したが、18日深夜まで計6回の会談を経て、最終的に決着、両国政府は19日午前零時前、両首脳が署名したうえで共同声明を発表した。

共同声明は、「領土問題」との柱を立ててその存在を認めるとともに、①歯舞群島、色丹、国後、択捉の北方4島を列記したうえで、その帰属も対象に含まれる ②領土問題を核とした平和条約交渉にあたっては、'56年の共同宣言以来の両国関係を踏まえ作業を進める——と、'56年共同宣言にも間接的に言及している。

さらに2国間関係強化の一環として拡大均衡政策の推進や定期的首脳相互訪問をうたっている。海部首相ら日本側は、一定の前進が図られたとしているが、今後、これをどう具体化していくかが最大の課題となりそうだ。(4.19日付 読売)

## ★見直しせまられる日本農業

平成2年度の農業白書が5日、閣議で報告されたが、新多角的貿易交渉(ウルグアイ・ラウンド)の農業交渉で焦点となっているコメの市場開放問題については、「国内自給を基本」とする従来の方針を繰り返しており、農業が直面している問題点として、急増する輸入農産物との競合という国際環境の厳しさを指摘、国内的には、産地間競争の激化や、農業後継者の不足、急速な高齢化の進行などで、農村地域の活力が低下していることに、これまで以上に強い懸念を示している。さらに、消費者ニーズの多様化や環境問題への関心の高まりに対応していく必要性を訴えている。

国際競争の激化や担い手不足など、農業の現状に対して強い危機感を示し「農業、農村をめぐる制度・施策のあり方について、中長期的展望に立って積極的かつ総合的に見直しを行っていくことが重要だ」と結論

付けている。(4.5日付 読売)

## ★家庭科必修一男子にどう教える!?

男子も家庭科必修をひかえ、「家庭科の男女共修をすすめる会」では、「男子の家庭科」をテーマに学習交流会を開いたが、これまで家庭科教育の経験のない男子校の教師たちの参加が目立った。「導入は決めたが、困惑もしている。設備もない。何をどう進めていいかわからない」「正直いえばやりたくはない。内申書の評価などでとまどいも出てくるだろう」など、不安や設備・教員不足を訴える男性教師の声が多かった。

文部省は今年度予算で家庭科施設などの整備費を増額し、各都道府県でも段階的に整備が進められている。会でも「他の授業や実習にも使える多目的ホールを造ったところもある」という工夫例も参加者から紹介された。

家庭科教員については、都高教では、実施年の少なくとも1年前には採用し、準備に当らせてほしいと都に働きかけている。(4.10日付 読売)

## ★鹿川君へのいじめ認めず

東京中野区立中野富士見中2年生だった鹿川裕史君が'86年2月、「このままじゃ、『生きジゴク』になっちゃうよ」という遺書を残して自殺した事件をめぐり、鹿川君の両親が、「自殺は、級友らのひどいいじめによるもので、学校側には生徒らへの適切な指導を怠った過失がある」として、都と中野区、2人の級友の両親を相手取り計6000余万円の損害賠償を求めた訴訟の判決が27日午前、東京地裁で言い渡された。村上敬一裁判長は、鹿川君が自殺する2カ月前の'85年末ごろまでの級友らの行為について「いじめとみることはできない」と認定、交遊グループから抜けようとした鹿川君に対しグループが加えた'86年1月以降の暴行についてのみ違法性を認め、その精神的苦痛に対する慰謝料として被告4者に計400万円の支払いを命じた。

## 編集後記

◆私が子育てに追われている頃、保育つきの公民館の講座は、同じ思いの母親たちが交代で子どもを見あい、講座の運営をはかってきました。しかし、今、このシステムは性役割を補完もする「側面」と指摘されています。フォーラムの子どもの参加も、母親同士の助けあいから、父親、地域も巻きこむ方向へ。家に置いてくる選択肢を今年は一つ呼びかけたと思います。(青木)

◆「心からからだへ」というテーマを掲げながら、その逆もあったよね、と揺れ動く。心身医学を中心にするつもりだったのが、「気の教育」特集の様相を呈してしまった。でも、多分、いまの私は、これを一番取り上げたかったのだらう。大人が、自分の思惑通りに型

にはめていく「教育」ではなくて、花の種を育ててゆくような「教育」。口にするのは易しいことだけれど。(稲邑)

◆「十字路」の記事で福岡の小学校の先生の話に感銘を受けました。差別されている当人が力強く立ち上がらなければ、差別の問題は解決されないのではないかと。

昨年河上紀子さんが送って下さった同和問題に対する生徒の感想文の中に「自分が自分を差別しているのだ」という視点が、中学生とは思えない洞察の深さに感心したことを思い出しました。(河村)

♥小学校三年生になった娘は、いつの間にか覚えたのかしらと、思うようなことを言ったり、行動したりで、子どもはどん

どん成長していくんですね。親もつかうかしてはいられませんが。子どもと一緒に、頑張ろうと思っても、今日もまた「あーつかれた」とゴロリと横になっていました。Weに關

わって一年。初心を忘れずで、これからもよろしくお願いいたします。(渡辺)

★映画「病院はきらいだ」は長野・佐久総合病院の老人在宅ケアを支えるネットワークを紹介しています。寝たきりでも老人は病人ではない。医師・看護婦・医療ソーシャルワーカー・ホームヘルパー・ボランティアが老人の生活を支えます。固い手足を自分の意志で動かすように手助けしながら「体を動かすことで心も動きます」とナレーション。

★「フォーラムへのお誘い」同封しました。お申し込みはお早めに。★次号は「生と死を授業で」です。(半田)

**Weバックナンバー** (在庫があります。ご注文は、最寄りの書店「地方小扱い」または、料金をおそえの上、振替で直接ウイ書房へ)

- 90/2.3 教育の中の性差別 (¥567)
- 90/4 '90年代、学校を変えよう (¥567)
- 90/5 生、そして死に迫る教育 (¥567)
- 90/6 「家庭生活」をどう語る (¥567)
- 90/7 「環境・資源」を見つめる (¥567)
- 90/8.9 消費者教育は、何を指す? (¥567)
- 90/夏増刊号 家庭科が変わる  
一情報化のうねりの中で (¥721)

- 90/10 地域をよみがえらせる (¥567)
- 90/11 高齢化社会がやってくる (¥567)
- 90/12 マス・メディアは何処へ (¥567)
- 90/冬増刊号 出合いは歴史をつくる (¥721)
- 91/1 性役割の固定化は描らう (¥567)
- 91/2.3 新しい家庭科を創る (¥567)
- 91/4 「教師」という仮面を脱ぐ (¥580)
- 91/5 少年・少女の現在 (¥580)

### 新しい家庭科

Vol.10 No.3 1991年5月20日発行  
定価580円(本体563円+税17円)送料共  
年間購読料・定価7200円  
編集兼発行人/半田たつ子

### 発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14  
☎・FAX03(3326)1380 郵便振替 東京6-59867  
第一勧業銀行 調布仙川支店 普預1075292  
印刷所/(有)岩佐印刷所〒112文京区春日1-6-7

家庭科男女とも必修!

共学の授業づくりにWeが贈る

# 家庭科新時代

—Weからの提案—

小・中・高・珠玉の実践31編

男女共修の家庭科の授業で、  
生活を大切にするあなたの座右に

半田たつ子編

2060円 千310円



## ●男女で学ぶ新しい家庭科 —京都における歩みと実践—

森 幸枝

1339円 千260円

## ●消費者教育の創造

宮坂広作

2060円 千260円

## ●教室のミニ舞台から 児玉澄子 —こぼれ話20—

1350円 千260円

## ●子ども発、大人へ —いま生まれる新しい関係—

「学習の主人公」と小沢牧子

1339円 千260円

## ●若いいのちの像 児玉澄子 —私のカウンセリング入門—

1339円 千260円

## ●らくだが翔んだ 平井雷太 —教育の常識の非常識—

1236円 千260円

## ●子どもって不思議 長谷川孝 —学ぶことは生きること—

1339円 千260円

## <羽生楳子詩集>

## ●人間って不思議 半田たつ子 —一つの視角—

1545円 千310円

## ●木、鳥、娘たちとわたし

1030円 千260円

## ●私塾霞国語教室風景 もしかしたらちいさなじゅくはユートピア

武田秀夫

1751円 千260円

## ●絵 III

1030円 千260円

## ●夢運び屋

1545円 千260円

最新刊

## ●花・野菜詩集

1648円 千260円

ご注文は最寄りの書店に(地方小扱)。直接お申込みの場合は送料をお添えの上、振替で

# ウイ書房

東京都調布市西つつじヶ丘2の25の14  
電話 3326-1380 振替 東京 6-59867